か-12-31

ヘヴィオブジェクト

HEAVY OBJECT

死の祭典

PURGE OF DEATHWORKS

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

イラスト・オブジェクトデザイン／
凪良
NAGIRYO

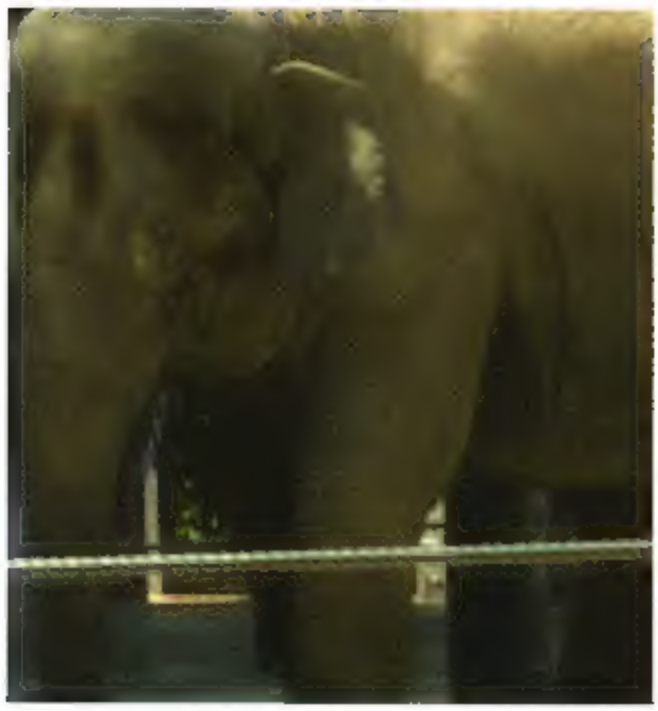
ヘヴィオブジェクト 死の祭典
鎌池和馬

電撃文庫
550

9784048709972
1920193005509

ISBN978-4-04-870997-2
C0193 ¥550E

ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 550 円
※消費税が別に加算されます



鎌池和馬（かまちかずま）

本日のレプリカント的観察日記。象です。おそらく世界で最も鼻を器用に扱う動物？　何事も工夫次第だという事を教えてくれます。感覚器官、アーム、放水とよりどりみどりなので、遠隔操作のオフロードカーにつけるだけで用途の幅がぐぐっと広がるかも？

【電撃文庫作品】

インデックス
とある魔術の禁書目録①～㉒
インデックス
とある魔術の禁書目録SS①②
インデックス
新約とある魔術の禁書目録①②
ヘヴィーオブジェクト
ヘヴィーオブジェクト 採用戦争
ヘヴィーオブジェクト 巨人達の影
ヘヴィーオブジェクト 電子数学の財宝
ヘヴィーオブジェクト 死の祭典

イラスト：凪良（なぎりょう）

バンダイナムコのゲーム『アルトネリコ』シリーズのキャラクターデザインをつとめる。電撃文庫では『シャープ・エッジ』『F』（著／坂入慎一）、『アプラクサスの夢』（著／高橋弥七郎）などを担当する。個人サークル『S.E.C』でも活動中。http://www.sec.or.tv/

カバー／暁印刷

ヘヴィーオブジェクト 死の祭典

「……お兄ちゃんは、最後まで私の味方でいてくれるよね……？」

「――――とでも言って欲しいのか？　この変態め」

全世界が待ちに待ったスポーツの祭典、テクノピック。世界的勢力の代理戦争であるこの一大イベントに、『資本企業』航空PMC所属の一二歳の少女が参加した。課せられたのは、スポンサーが売り出す新型ライフルを使用して好成績を上げること。

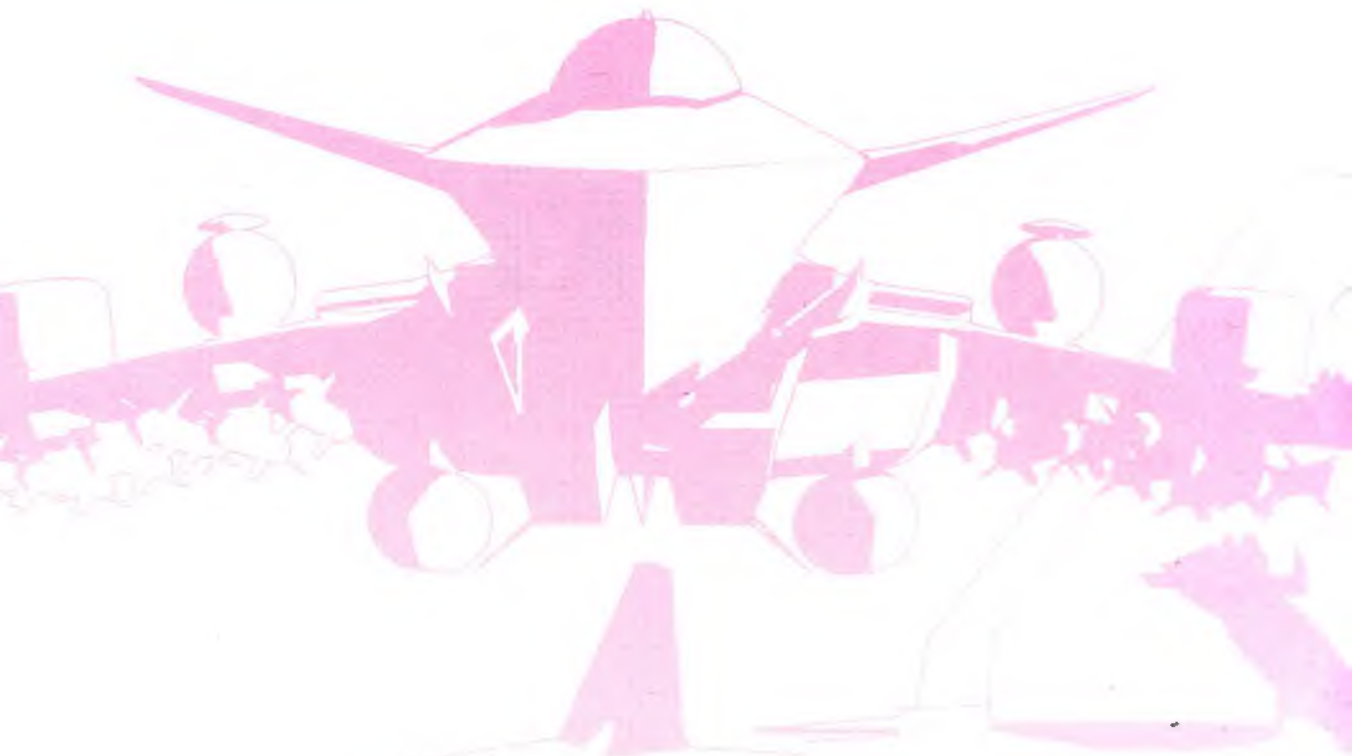
「スポンサーの許可がとれたからって、撮影クルーをバスルームの中にまで入れるなよ」「あの失礼ですが、そちらの需要はスタイルを鑑みて、ユーザーニーズはほぼ皆無というか、我々も商売でやってんだぞと」「どこ見てコメントしやがったこの野郎」

……クウェンサーとヘイヴィアは？

そんな細かいことはどうでもいいのだ近未来アクション！

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO



結局、戦争はなくならなかった。
でも、変化はあった。
――超大型兵器オブジェクト。
それが、戦争の全てを変えた。

ヘヴィオブジェクト
HEAVY OBJECT
PURGE OF TECHNOPOLIS 死の祭典

INDEX

000010 序　章
000012 第一章
000062 第二章
000114 第三章
000114 第四章
000114 第五章
000268 終　章

[Harpuiai]

VTOL性のある戦闘機。外装・基本的なフレームは「正統王国」のS/G-31と同じ(「正統王国」から亡命した技師が設計したため)。
後部にはジェットエンジンのベクタースラストノズルに特徴的なパドルがあり、これによって「正統王国」のS/G-31との差異が見られる。

パイロットは、顔にゴーグルと酸素吸入用ヘッドセットを、喉には小型のマイクを取り付け、高速飛行中の気道を確保する。
装備が単純なヘルメットとマスク方式でないのは、オブジェクト操縦士エリート用技術を流用しているため(オブジェクトを操縦するエリートはヘルメットなどで顔を隠す必要はなく、オブジェクト全盛時代では、使い物にならない戦闘機などには国防費は回されない)。

Designed by Hirokazu Watanabe(2725 Inc.)

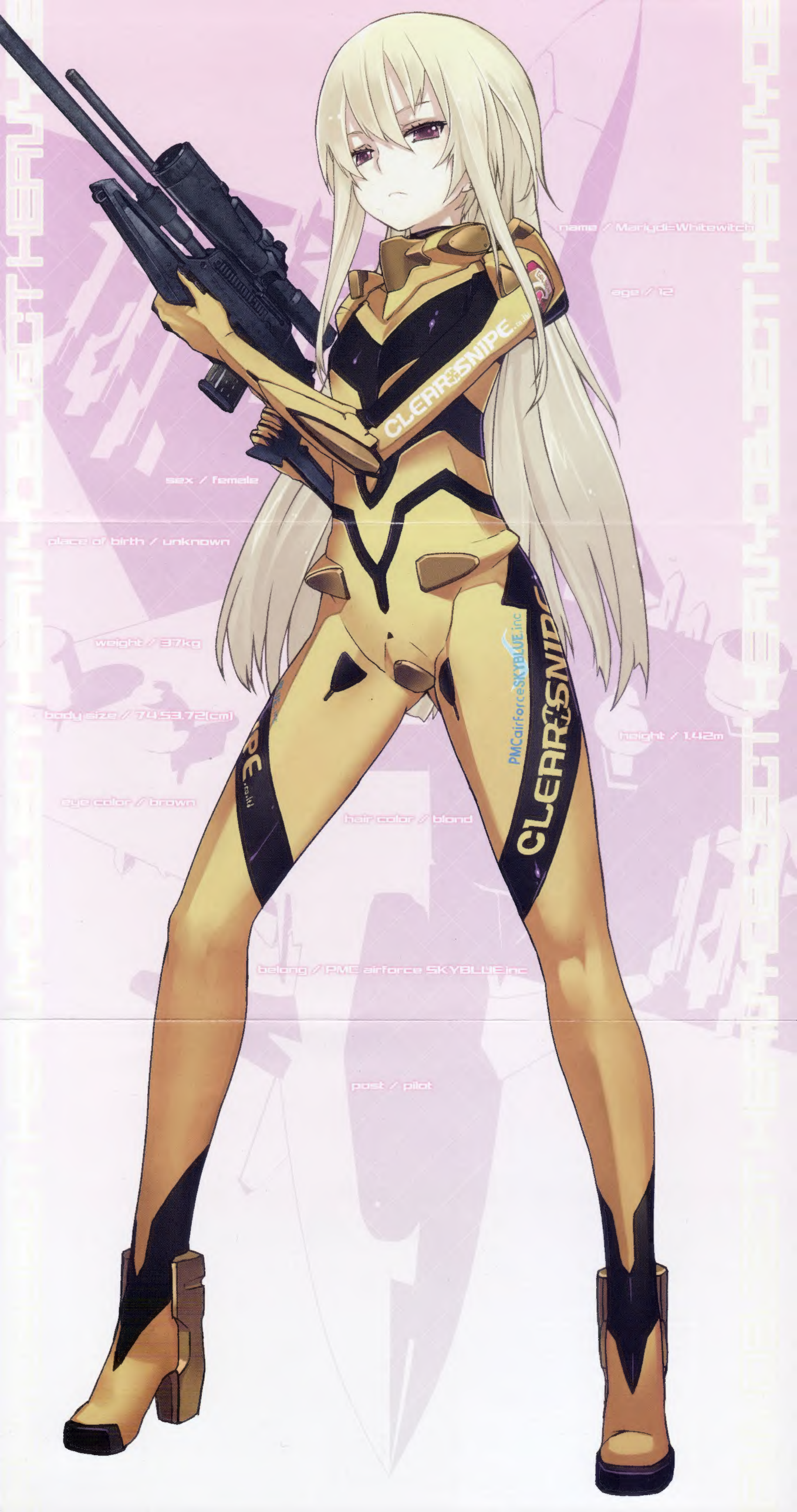
「北欧禁猟区」からやってきた
航空PMC「スカイブルー」所属の戦闘機乗り
マリーディ＝ホワイトウィッチ
「あれが敵兵だって？　本物の戦争を知らない温室育ちは気楽だな」

テクノピックに出場する
マリーディにあてがわれた身辺警護担当
護衛の男
「俺の仕事は君の護衛だ。
最低限の職務を全うする」

ドーピング専門の薬剤師
ステイシー＝パーメット
「はいはーい、こわーいお注射の時間でちゅよー。
お嬢ちゃん、「底上げ」の方はどうする？」

「資本企業」の広告代理店に雇われている
国際競技広報部門マネージャー
アリシア＝スラピージョーズ
「スポンサー様も見ています。先頭グループを目指してください」

テクノピックの裏で暗躍する謎の組織の指揮官
ラミール＝スコッフロー
「祭典に栄光あれ」


name / Mariyd=Whitewitch
age / 12
sex / female
place of birth / unknown
weight / 37kg
body size / 74.53.72(cm)
height / 1.42m
eye color / brown
hair color / blond
belong / PMC airforce SKYBLUE inc
post / pilot
CLEAR SNIPE
PMC airforce SKYBLUE inc

オブジェクトの登場で、すでに役目を終えた兵器と言われているが、
私はそんなもの信じない。
どれだけ窮屈だろうが、大空は常にそこに広がっているんだ。

――とある『北欧禁猟区』の戦闘機乗りのつぶやき

HEAVY OBJECT

PURGE OF TECHNOPICS

ヘヴィーオブジェクト
死の祭典

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

序章

歌って殺せる戦場レポーターのモニカですっ！

えっ、今回は違いますよ。クリーンな戦争なんか興味ありません。オブジェクトは出てきますけどね。開会式のパレードなんかは相当派手になると思います。

そう、全世界共通、四年に一度のスポーツの祭典、テクノピック夏季大会です!!

私は今、会場となる大西洋上の超巨大人工浮揚島（ようとう）オリンピアドームに来ております。『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』と、普段は戦場でしのぎを削（けず）っている方々が一堂に会する会場は、スポーツマンシップに溢（あふ）れた独特の空気を作っています!!

……いつもみんなこうしてりゃ良いのに。

ええ、はい、はい。それではオリンピアドームにやってきた人々へインタビューをしてみたいと思います。まずは戦時下のしかも平日に国際試合の観戦にやってきちゃうようなセレブ様からっ！　はいそこのあなた！　ちょっとお話プリーズ!!

スポーツの祭典テクノピックは今回も無事に開催（かいさい）されましたが、楽しみにしている競技など

はありますか？

……は？　あの、いや、そういう事ではなく、質問に……え？　スポーツの祭典なんて各国の選手を競わせる代理戦争でしかないし、人間工学の発達にウェアやシューズの向上で選手は鍛えるものではなく開発するものになってしまったから、結局は多数のオブジェクトを保有するレベルの世界的勢力の技術力のプレゼンテーションになってしまっただけじゃないかって？いやだから質問に答えっ……なに？　私も繊維企業の技術部に勤めていて、軍需関連の経営パートナーを探しに来たんだよ？　聞いてねえよそんなのっ!!

ごほん。

ええと、中にはあんな戦争関係者も混じっているようですが、基本的には、基本的にはっ!!テクノピックは平和の祭典でございます！　決して死の祭典なんかじゃありません!!

では気を取り直して、今度はあちらの親子連れにお話を聞いてみましょう！

おーい!!

第一話

1

ピンポンパンポーン、というお馴染みの電子音が選手控室に鳴り響く。

『シュートアスロン一日目、入場まで二〇分を切りました。該当選手は準備を済ませて待機してください。繰り返します、シュートアスロン一日目……』

柔らかい女性の声を聞き、マリーディ＝ホワイトウィッチは面倒臭そうにため息をついた。

彼女は『資本企業』に所属する一二歳の少女だ。長い金髪に白い肌が特徴的だが、それ以上に目を引くのは彼女の着ている服装の方かもしれない。首の下から足の爪先までピッチリと覆う特殊なスーツ。黄色と黒のド派手なカラーリング。『資本企業』らしく各種スポンサーの社名がプリントされているところを見ると、まるでスズメバチがレースクイーンに変身したかのようにも思えてくる。

シュートアスロン競技用のユニフォーム、というのは正しくない。

より正確には、彼女の所属する航空ＰＭＣのフライトジャケットだ。
「……ふざけやがって。前々からおかしいとは思っていたが、パフォーマンス用の衣装と並べても全く違和感がないほどとはな」
「空軍用にデザインされたものですし、墜落時以外、迷彩に気を配る必要もないのでは？」
涼しい声でそう答えたのは、携帯端末を手にした女性だ。
アリシア＝スラピージョーズ。
ウェア、シューズ、ライフル、食事制限、運動量調整、身辺警護……一つの競技に参加する選手には、上星の輪のように様々な人が関わる。アリシアはそれら数十人に及ぶ上星の輪と、上星そのものの連携を取るための、広告代理店が寄越した国際競技広報部門のマネージャーだ。
とはいえ、別にアリシアはマリーディの召使いではない。
「……落ちるぐらいなら死ねっていう、ありがたいメッセージかね」
「知りませんよ。私は軍とは関係ありませんし。メンタル調整がお望みでしたらスポーツカウンセラーにお願いします。私に世間話を求めるなら別料金をいただきますよ」
「流石は『資本企業』だな」
「お互い様です、航空ＰＭＣの傭兵さん」
チッ、とマリーディはつまらなさそうに舌打ちする。
「確認します」

一生結婚とは縁のなさそうなスーツの女は無視して続けた。
「シュートアスロンは射撃系に属する競技の一つです。あなたにはスポンサーである『クリアスナイプ社』の新型ライフルを使っていただき、この競技で好成績を叩き出してもらいます」
「ようは、トライアスロンの変形だろう？　走って撃つ、泳いで撃つ、自転車で撃つの三拍子だ。日付をまたぐ分、元より楽かもな」
「一日目は二五キロを走行し、その過程で二回の遠距離狙撃を実行していただきます。標的は人型の的とフライングディスク。スコアは全日程の平均値によって弾かれますので、気を抜かないように」
「良いさ良いさ」
マリーディはベンチに座ったまま、適当に手を振って、
「わざわざ軍人の、それもオブジェクトの使用が認められない『泥沼の戦闘』が続いている北欧禁猟区から私を呼び寄せたんだ。そういう事だろう？　平和なアスリート相手に殺しの技で大人げなく立ち向かえって訳だ」
「……テクノピックは旧来の国際試合とは異なり、実質的に世界的勢力の技術力競争の場として機能しています。競技に参加する者は等しく代理戦争の敵兵として捉えるのが適切かと」
「へっ」
マリーディは小さく笑う

「あれが敵兵だって？　本物の戦争を知らない温室育ちは気楽だな」
「知る必要はありませんから」
アリシアは表情一つ変えずに受け流し、
「競技ではウェアの空気抵抗緩和技術、シューズの衝撃吸収技術、非通電性の繊維製スプリング、民間応用限界のドーピングなどが許可されています。……敵は全て、競技専用に開発されたアスリートとなっております」
「こっちもオブジェクトを操る操縦士エリートのサバイバリティ研究被験者として体の中をいじくられているんだ。同じ程度のゲテモノだって自覚はあるよ」
「スポンサーが望む水準の成績を出せなかった場合は、違約金が発生する事も？」
「了承している」
マリーディはその小さな手を伸ばし、
「スポンサーご自慢の新型ライフルとやらをよこせよ。最後の調整をしたい。実包さえ詰めなきゃ競技場以外で構えても良いんだろう？」
アリシアは適当に視線を振った。
すると、選手の身辺警護をしていた護衛の男の一人が、銀色のケースをこちらへ回してきた。
「気をつけろよ」
「……弾詰まりで銃口を覗くような間抜けに見えるのか？」

「そういう意味じゃない」

護衛は首を横に振って、

「そちらの氷のレディが先ほど言った通り、テクノピックは技術力競争をベースにした世界的勢力の代理戦争だ。公平や平等、スポーツマンシップなどの概念はすでに存在しない。どいつもこいつも、勝利のためなら何でもするって訳だ。我々は君が競技に出るまでは料金分の安全を保障させてもらうが、流石に競技中の君の傍に張り付く訳にはいかない。好成績を叩き出し過ぎると、『対策』を講じようと思う輩の集中攻撃を浴びる恐れも出てくる」

「……特に、シュートアスロンは三日分の総合成績で順位を決めるからな」

マリーディは手慣れた操作でライフルを分解しながら、

「しかしそれは、逆に言えばこちらから仕掛けても問題はないって事だよな？」

その問いかけに、直立不動のアリシアは真顔で答えた。

「表面上は平和の祭典である事を認識し、スポンサー様から貸与していただいた新型ライフルのイメージを保持してもらえれば」

「ふん。運営のオリンピアドーム側は決して認めないが、観客の誰もがそういったトラブルも含めてテクノピックを楽しみにしているだろうさ。ついたあだ名は『死の祭典』に『殺戮パレード』だからな」

作業を続けながらマリーディは、チラリと護衛の男へ目をやった。

こんな時代でも、やはりスポーツには反則ごとというのが存在する。度を超したドーピングやスパルタ式の肉体開発法、肉体を害しかねないレベルのスプリングやモーターなどを組み込んだ特殊ウェア。そうしたものは人間の技術としては存在しつつも、日の目を見る事はまずありえない。

ところが、スポーツで禁止されているそうした条項にしても、スポーツ以外の分野に応用するのであれば禁止される事はない。

例えば、軍事。

俗に言うアスリート兵と呼ばれる連中である。

「こんな人造マッチョを三〇人四〇人と引き連れているんだ。どうせそっちもトラブルは起きるものとして護衛計画を組み込んでいるんだろう？」

「オブジェクトが今より器用になってくれれば問題はないんだがね」

アスリート兵は単体の性能もさる事ながら、パワードスーツのような兵器に搭乗した際、筋力などの限界値を突破できるところに大きな強みがある。

もっとも。

オブジェクト全盛となってしまった今では、航空ＰＭＣの戦闘機パイロットであるマリーディ同様、特殊な環境でしか使い道のない連中である。

オブジェクトを運用できない地域の防衛か、あるいはその逆か、といったところだ。

（……お互い、クリーンな時代には不要な兵隊か）

マリーディが自嘲するように心の中で呟くと、選手控室に新たな人物が入ってきた。

スポーツブランドのジャージの上から白衣を羽織った女性だ。緩くウェーブした茶色の短い髪に、フレームのないメガネが特徴と言えば特徴か。しかし彼女のカラーを示す一番分かりやすい物品は、肩に下げた大きな保冷バッグだろう。

女性の名前はステイシー＝パーメット。

世間一般ではドーピングと呼ばれる技術を専門に行う薬剤師だ。

「はいはーい、こわーいお注射の時間でちゅよー。お嬢ちゃん、『底上げ』の方はどうする？」

「そうだな、時間差輸血だけで結構だ。余計な薬剤は使わなくて良い」

時間差輸血とは、自分の血を自分に輸血する行為だ。

人間は日々血液を作る機能を持っているので、一度血液を採取してから、数日空ければ血液の量は元の一〇〇％に戻る。そこへ保存しておいた血液を輸血すれば、一〇〇％以上の量を体に入れられる訳だ。

血液は酸素を体中に送る役割を持つので、量が多ければ体の中に蓄えられる酸素の量も増す。結果として、競技のスコアを上げるのに一役買うのである。

ステイシーは唇を尖らせて、

「ちえー。筋肉増強剤とか鎮静剤とかは使わないの？　狙撃の手ブレを抑えるモノも各種揃え

ているんだけど」

「テクノピック出場アスリートの平均寿命を調べたら使う気は起きないね」

「ぶーぶー。平均寿命の件は暗殺なんかも響いていると思うけどなあ」

唇を尖らせるステイシーへ答えたのは直立不動のアリシアだった。

「今回のシュートアスロンはスポンサー様提供の新型ライフルの性能アピールのためのものです。あまり銃以外の要素で狙撃の性能を上げないようお願いします」

「……そういう事だ。それに『安全な薬』とやらがあったとしても、薬で疲労を抑え込むと、自分で自分の体の状態に気づきにくくなる。逆に狙撃時の細かい調整に影響を与えかねない」

「ケミカルなお薬を使わないから時間差輸血はカラダに優しい、とか考えてる？」

ステイシーは保冷機能のある大きなバッグの中から輸血用の血液が入ったパックやチューブなどを取り出しながら、

「本来以上に血液量を増やすという事は、血圧の上昇を意味するわ。この影響は特にスタミナを多く消耗する長距離走で大きく出る。『普段通り』のペースで走ろうとすると、血管にとんでもない負荷がかかるリスクを忘れないでね」

「難儀なものだな」

護衛を務めている男が、腕を組みながら呆れたように呟いた。

マリーディは全身を覆うフライトジャケットの一部分、肘まである手袋のようなパーツを取

り外している。

輸血用の針が幼い肌に刺さっていく様子を眺めながら、護衛の男は続ける。

「日々各種薬剤で徹底的に体を強化し、ウェアやシューズにまで手を加えているっていうのに、それらは全て試合前に整えなければならないとは。別に給水地点のドリンクに必要な成分を混ぜれば良いような気もするが」

「所詮はスポーツだからな。サッカーだって『何で手を使わない？』と質問されたら、合理性や効率では説明できないだろう。『それがルールだから』としか答えようがない」

「間もなく時間です」

アリシアが細い手首をひっくり返し、異様に小さな腕時計の文字盤を眺めて言う。

マリーディは片腕に刺さったままのチューブに目をやり、もう片方の肩でライフルを担ぎながら、息を吐いてこう言った。

「……さて、世界最大規模のコマーシャルに出かけますか」

2

テクノピックの開催地であるオリンピアドームは、大西洋のほぼ中央に浮かぶ巨大な人工浮揚島だ。

人工浮揚島とは、自然に存在する島の周囲を埋め立て等で拡大するのではなく、純粋に巨大なフロートを使って構成された陸地を指す。人工浮揚島そのものに独立権が与えられている場合は一カ所に留まる必要もなく、七つの海の公海上を、海流に沿う形でゆっくりと移動している島も多い。

地球温暖化と海面上昇に後押しされる形で、一時期この手の人工浮揚島の建設ラッシュが進められた事があった。衛星台湾、セカンドヴェニス、新制琉球諸島などが良い例だろう。ただ、意外と維持コストがかさむ、資源など大陸からの補助がなければ成立できない外交的な脆さ、平時はともかく非常事態に陥った際の都市機能の復旧速度に難がある点などが『完成した後になってから』発覚し、現在では『流行』に陰りが出ていた。

オリンピアドームの場合、メインとなる競技場は直径一〇キロ程度の巨大なドーム施設になっていて、さらに周囲一〇キロへ港湾や空港、宿泊施設、その他島の機能を維持するために必要な施設などを配置した構造になっている。その形から、『目玉焼き』などと揶揄される事もあった。

この大きな『目玉焼き』は、おおよそ一年の周期で大西洋をぐるりと周回している訳だ。

マリーディ達、シュートアスロン女子の参加選手は円形のドームのほぼ端に集められていた。壁に沿う形で二五キロほど走行し、その間にある三カ所で狙撃を行え、というのが一日目のノルマだった。

耳に引っ掛けた、ペンのキャップ程度の圧電受話器から、アリシアの角ばった声が届く。

『シュートアスロンは三日間の日程の総合評価で順位を決定しますが、一日目の結果によって、二日目のスタート地点が変化します。有り体に言えば、先頭に立った状態からスタートできる分、余裕ができるはずです』

「二〇キロだの三〇キロだの走らされるのに、スタート地点の何十メートルかなんてそうそう違いの現れるものじゃない」

呆れたようにマリーディは答える。

「そもそも、シュートアスロンは足じゃなくて射撃の競技だろう」

軽く周囲を見回すと、一〇〇人以上の女性選手が集められているのが分かる。スタート地点は、バーゲンセール開店前のデパートの前より人口密度が高そうだった。

『資本企業』『情報同盟』『正統王国』『信心組織』。

様々な勢力の人間が一ヵ所に固まっているのは、ある種異様とも言えた。

ユニフォームはマリーディのような全身を覆うスーツもあれば、上下でセパレートに分かれているランニングウェアも珍しくない。一見徒競走には不向きに見える、太股まで伸びた大きなブーツは、おそらく繊維製スプリングで徹底的に脚力を強化するためのものだろう。

……バリエーションが豊かな理由の一つとしては、やはりこれが『女子用の』ユニフォームだからだろう。倫理面の問題から隠さなければならない部位の多い女子用のユニフォームは、

男子用と違って最適解を導きにくいという点がある。

とはいえ、それが逆に見た目の華やかさを増し、設計側も広告効果のために（そう、スポンサー会社の社名はユニフォームに印刷されるのだ）、単純な運動機能の他にセックスアピールを考慮したデザインを行っているというのだから、本末が転倒どころか空回りしているような気がしないでもないが。

女性の声のアナウンスが、全員の圧電受話器に割り込んでくる。

『シュートアスロン女子、一日目。開始まで一〇分です。選手の皆様は各員配置についてください』

（……男女で部門を分けるなら、年齢でも分けてほしいものだ）

近くにいる『情報同盟』の年上の女がプレッシャーを与えるためか、マリーディに面白半分でライフルの銃口を向けてきた。マリーディは素知らぬふりをして数メートルほど左へ歩く。スコープを覗きながら移動している女は、自分がカメラのド真ん前へ歩いてしまった事に気づかなかったようだ。

スポーツの実情なんてこんなものだ。

同じチーム内で足を引っ張るレギュラー争いに、精神攻撃の名目で行われる野次の飛ばし合い。スポーツマンシップという言葉を聞くたびに、マリーディは反吐が出そうになる。黙って撃ち合う戦場の兵士の方が、まだしも真摯だ

その時、耳元の圧電受話器から味方の声が聞こえた。
薬剤師のステイシーのものだ。
『余裕があるならサインもらってきてよ。エリエ＝グリーンハット選手とかプレミアつきそうだけど』
『意外とミーハーだな。競技専門なんだから、慣れっこだと思っていたが？』
『何か自分なりに目的を作ると仕事のやり甲斐も増すものなのよ。コレクター系とかが分かりやすくて良いね』
すると、ステイシーの横で聞いていたのか、護衛の男がこんな事を言う。
『うちの主力選手様からはもらったのか？　まだだったら膨れっ面になるかもしれないぞ』
『マリーディちゃんは「結果」を出してからね』
勝手に言ってろ、とマリーディが吐き捨てると、時間がきた。
『開始まで一分』
彼女はあくびをしながらアナウンスを耳にする。
そして、号砲が鳴った。
栓を抜いた容器の中から水が流れるように、大勢が一斉に走り出す。マリーディもその流れに従った。短距離の全力疾走とはまた違う、ストップウォッチで時計を見ないで正確に一〇秒で止めようとする時のような緊張感と共に、マリーディは一定のリズムで足を動かしていく。

圧電受話器から聞こえるアリシアの声は硬い。

『スポンサー様も見ています。先頭グループを目指してください』

「馬鹿かお前は」

マリーディは一言だけ返し、それ以上の解説などしなかった。

その気になればトップに躍り出る事もできるが、それをやる事に意味はない。

（……くそ、北欧禁猟区での訓練を思い出すな。朝食の前にぐるぐるぐるぐる、基地の周りを走らせやがって）

一二歳という外見からはイメージしにくいかもしれないが、マリーディは戦闘機のパイロットだ。そしてパイロットは地球の重力の九倍以上の環境で精密に機体を操作しなければならないため、丘で銃を構える歩兵などよりも強靭な肉体を作らなくてはならないのである。

訓練と違うのは、周りのペースを参考にできないところか。

あくまでも自分のペースを守り続ける事が肝になる。先ほどのストップウォッチの例で言うと、周囲の雑音を無視して体内時計を信じ続ける事ができなければ、あっという間にスタミナを持っていかれる。

よって、周囲の選手の動きを気にしつつも、彼女達のペースに引きずられて自分の足を速めてしまわないように気を配らなくてはいけない訳だが、

『あっちもこっちもたゆんたゆんで、見ている方はイライラする、と』

「……ペースメーカーとして機能しないなら通信切るぞこの野郎」

『下世話ですが、そうした要因もまたカメラの注目を集めるためには利用できます。あなたにそれは望めませんので、別ラインで上乗せするしかありません。単純な成績の他に、ドラマを作る事を提案します』

「わざと苦しんだふりでもしろっていうのか？」

『ここはテクノピックです。放送局一つ、一〇秒間放映につき二万ドルの広告効果があるとお考えください。さらに順位が一つ上がるごとに一・二倍の補正が加わります』

「考えすぎて順位を落としたらそれこそ笑い者だな」

しゃべりながら一八分。

まるで喫茶店から電話をしているように呼吸を整えたまま、マリーディは最初の狙撃ポイントにやってきた。

場所はスタートから七キロ地点。アスファルトの上には数十メートルほどの絨毯が敷いてあって、その絨毯とは直角となる方向、二〇〇メートル先に、人の形をしたターゲットが並べられている。ターゲットは金属製のレールの上に設置されており、ランダムに移動しているようだった。

ここは給水ポイントも兼ねている。

先頭グループの選手達はすでに自分のドリンクを摑み、絨毯の上でうつ伏せになって狙撃

銃を構えていた。

マリーディはそれを横目で眺めながら、

「優雅なもんだ。バカンスでも楽しんでいるのか？」

立ったまま。

狙撃ライフルを構え、競歩程度の速度を維持したまま。

一発一発息を止めて撃つのではなく、セミオートで立て続けに引き金を引き。

マリーディ＝ホワイトウィッチは、全ての人型標的の頭と胸へ、正確に一発ずつ撃ち込んでいく。

パパパンパパン!!　と銃声が連続した。

手ブレが一切ないのは、わざと足のペースを調整し、体力を温存しておいた成果だ。

ただしそれ以外にも、根本的な狙撃の腕がものを言っているのだろう。

「お疲れさん」

周囲の選手達がギョッとする中、マリーディはドリンクも取らずに再び走り出す。

『今のは中々の集客効果でした』

アリシアがそんな事を言う。

だが、根本的に彼女はマリーディの事など褒めたりしない。

『ただし、あれではスポンサー様の新型ライフルの性能か、あなた個人の技量なのかが分かり

にくい問題が生じています。分を弁え、出しゃばりすぎないようお願いします』

「国際競技のトップに躍り出た選手にかけるエールがそれかよ」

呆れながらも、マリーディの足のペースはやはり変わらない。

背後から旧先頭グループの選手達が怒濤の勢いで迫ってくるが、マリーディは追い抜かれないようにペースを上げるような真似はしない。相手は焦れば焦るだけスタミナを失い、狙撃の精度も落ちていく。総合的な評価で蹴落とされる事はまずありえない。

むしろ。

先を行くマリーディを意識し、先頭グループが本来のペースを崩し、それに引きずられる形で大勢がスタミナを奪われるのであれば、ここはマリーディの一人勝ちとなる。

（……圧電受話器じゃトレーナーやマネージャーが金切り声を上げているんだろうが、その程度で心拍数を抑えられれば誰も苦労はしないんだよな）

「意外と馬鹿が多くて助かったな。所詮は筋肉マニアの集まりか」

呟く間にもマリーディは他の選手に追い抜かれるが、彼女は顔色一つ変化させない。

ここがベストの領域。

これ以下なら好成績へ追いすがるのが難しくなるし、これ以上ならスタミナを奪われ失速する。

見た目の順番に惑わされず、マリーディ＝ホワイトウィッチは着実にトップの数値へ歩み寄

っていく。

3

最終的な順位は四位。

一日目の結果としては上々といったところか。

旧世代の国際試合からの名残として、このテクノピックでも上位入賞者には三つのメダルが授けられる。その関係からか、三位と四位の間に大きな価値の隔たりがあるのが特徴だった。

「大きな事を言っていた割に、トップグループは逃しましたね」

選手控室に戻ってきたマリーディに、アリシアは直立不動のままそう言った。

「スポンサー様は寛大でしたので不問に付すそうですが、次回からは気をつけてください」

「わざと譲ったんだよ。一日目だしな」

「？」

「シュートアスロンは三日間の総合で順位を決めるんだろ。今の段階でメダル組をひた走ると、二日目からの妨害が集中するリスクが生じる。だったらここは一度譲って、トップが落ちてくるのを待った方が簡単だ」

「考えるね」

と笑ったのは、護衛の男だった。
「外からやってきた軍人系とは思えない。もう馴染んでる。今のは観客がテクノピックに何を求めているのかを分かっているコメントだった」
「……目的はスポンサー様の新型ライフルの宣伝広報です。あなたがどう楽をするかなど関係ありません」
直立不動のままのアリシアを、護衛の男は楽しそうに眺め、
「アンタ、笑った事ってあるのか？」
「スポンサー様を接待する時などには極上のものを提供させていただいております」
笑顔も商品か、とマリーディは適当に呟き、
「それより、話がないならさっさとシャワーを浴びたい訳だが」
「待った待ーった」
横槍を入れてきたのは、薬剤師のステイシーだった。
「だったらその前にドーピング関連のサンプル採らせてもらえるかい。特に汗は流されると面倒なんだなーこれが」
「他に必要なのは？」
「髪の毛、唾液、血液、おしっこ」
ズラズラと並べられて、マリーディは思わず片手で髪をぐしゃぐしゃとかき乱した。そうい

う面倒臭い事こそ、ベタベタした汗を洗い流してからにしてほしい。

するとステイシーは紙コップを取り出しながら含み笑いをして、

「お嬢ちゃん、後ろから両足を抱えてお手伝いしてあげましょうか？」

「やかましい」

若干顔を赤くしながら紙コップを奪い取るマリーディを、護衛の男は怪訝な目で眺めた。

「ドーピングの使用は大幅に緩和されているくせに、競技後の検査をそこまで厳密にする必要はあるのかね」

「別に取り締まるためのものではないわ。競技前に登録している物以外を使っていないかどうかを調べるための検査よ。競技中のドリンクに薬効成分を混ぜたりするのは禁止されているしね」

言いながら、ステイシーはマリーディの舌の上に付箋ほどの大きさのシートを乗せ、フライトジャケットの長い手袋のようなパーツを取り外し、肘の辺りにテープのようなものを貼り付ける。テープは汗を採取しているのではなく、毛細血管から血液を採っているのだ。

さらにピンセットで摘んだ脱脂綿を使って首回りの汗を吸い取り、金色の髪を一本だけ引き抜いていく。

作業に身を任せながら、マリーディは護衛の男へこう言った。

「とはいえ、優勝に手が届くグループに入っている以上、他の選手やその支援者から妨害を受

けるリスクは発生していると考えた方が良い。ここから先がアスリート兵の本領って訳だ」

「給料に見合う間なら全力で守ってやるさ」

護衛の男が簡単に請け負った直後だった。

ブツン!!　と。

選手控室の電源がいきなり落ち、室内が暗闇に包まれた。

マリーディ＝ホワイトウィッチは馬鹿正直に天井の照明器具へ目をやったりしない。落雷による停電とは違うのだ。護衛の男に押し倒されるまでもなく、ベンチに置いてあった長い手袋のようなパーツを摑むと即座に床へ跳んで身を伏せる。

元々薄く開いていたドアの方から、甲高い破裂音と閃光が連続した。

落雷よりは心臓に悪いもの。

「銃声……早速歓迎会が始まったか!!」

手袋のようなパーツを取り付けながらマリーディは告げた。

「だが俺達を狙ったものではなさそうだぞ」

護衛の男がそんな事を言う。

確かに停電になったし、銃声も続いている。だが、マリーディのいるこの室内に襲撃者が

飛び込んでくる事もなければ、銃弾をばら撒かれる事もなかった。

おそらくこの状況でも直立不動であろうアリシアが、暗がりの中で言う。

「選手控室の電源はブロックごとに分かれています。おそらく、他の選手を狙うとばっちりを受けたのでしょう」

「まぁ、テクノピックじゃ良くある事よ」

一番冷静なのは、この手の大会で飯を食べている薬剤師のステイシーだ。

マリーディは身を伏せたまま、唯一の出口であるドアの方へと這って近づいていく。

護衛の男が即座に言った。

「どうするつもりだ」

「この暗闇の中でも私が見えるのか？」

「ライフルについたセンサー類の恩恵でな」

「なら一緒に来い」

マリーディはドア横へ張り付いた。暗闇に目を慣らす訓練も受けているのだが、断続的に続く発砲時のマズルフラッシュのせいで思ったより時間がかかる。これならいっそ真っ暗闇の方がやりやすかった。

バタバタバタ!!　という大きな足音がドアのすぐ向こうを通り抜けていくのを確認してから、マリーディはわずかに開いていたドアから通路を覗き込む。

同じような構造の控室が並んでいる内、マリーディの部屋から三つ離れた所に数人の男達が集まっていた。部屋の中に向けて銃を発砲しているのが分かる。

暗闇の中、マズルフラッシュ時だけ襲撃者の輪郭が強く浮かび上がる。マリーディは特に、襲撃者が両手で握っている銃器に注目する。

（……セミオートのショットガンに、銃身下部には九ミリフルオートの機関拳銃を無理矢理装着している。『正統王国』式の屋内制圧装備だな。散弾で壁やドアを破壊して侵攻ルートを確保し、九ミリをばら撒いて標的を殺す、か）

「くそ、目に残像が焼きつくな」

一度顔を引っ込め、ドア横の壁に背中を預けながらマリーディは呟く。

「右側、三つ向こうは誰が使っている？」

「『情報同盟』チェサピーク方面代表のエリエ＝グリーンハット選手です」

「……シュートアスロン一日目のトップ通過選手か。『正統王国』装備の連中に襲われる理由に心当たりは？」

「一日目終了時点で一三位の位置に、『正統王国』の選手がいます。現状では二日目以降の成績に拘わらず三位入賞の可能性は絶望的ですが、仮に上位通過選手がリタイヤした場合、繰り上げによって入賞の圏内へ入れるはずです」

（……ま、他にも『繰り上げ』候補はいるんだろうが。馬鹿正直に自前の装備を使って襲撃す

るとも限らないし、ここで襲撃者の素性を探っても無駄か）

パパパンパン!!　という銃声が響いた。

今のは襲撃者側のものとは違う。もっと太い銃声だった。おそらく『情報同盟』側がアサルトライフルでも使っているのだろう。

（……だが劣勢だ）

「ドアから離れろ」

護衛の男はそんな事を言った。

「襲撃者の目的は『情報同盟』のエリエ＝グリーンハットだけだ。君の読み通り、トップ通過選手が狙われたって訳さ。下手に動かなければ俺達まで巻き込まれる事はない。見ろよ。この一角は学生向けマンションみたいに控室が並んでいて、その一つ一つに選手を護衛するための戦力があるが、誰も表に出てこようとはしない。通路の外に並べるといがみ合いになるからやめろと通達されるほどあるのにな。ここではそういうルールがあるんだ」

「……、そんな気楽に構えていられれば良いんだがな」

マリーディはもう一度ドアを細く開け、通路の様子を確認しながら、

「一番近い建物からの出口は、今襲撃されている選手控室のすぐ近くにある裏口だ。それ以外だとかなり遠回りになる。私達は、避難するための出口を塞がれているのさ。この状態で戦局に混乱が訪れれば、連中の銃撃戦に巻き込まれるリスクが発生する」

「外へ出る必要はありません」

アリシアはそんな事を言う。

「選手控室の奥には小型のシェルターが用意されています。八〇センチの複合装甲で覆われた強固なものです。戦車の滑腔砲を二、三発受けても破られる事はありません」

「本気でそんな安全神話を信じているのか？　だったら、『情報同盟』の護衛もあんなに真面目に仕事したりはしないさ」

マリーディは皮肉げに笑いながら、

「ダクトの問題があるんだよ」

「ダクトの口径は二〇センチです。襲撃者に潜り込めるとは思えません。内部は複雑に折れ曲がっているため、手榴弾などを投げ込んでもシェルターに届く事はありません」

「だが空気の通り道である以上、爆風や衝撃波は通る。船の伝声管や聴診器と同じ仕組みさ。そして入り組んだダクトを通して衝撃波がシェルター内部へ入り込むと、圧力の関係で人間の内臓がまとめてやられる。……詳しくは護衛さんにでも聞いてみろ」

話を振ると、暗闇の中で息を吐く音が聞こえた。

「まぁ、それを防ぐために『情報同盟』の護衛達は控室を死守しようとしているのだろうな。シェルターから延びているダクトは、そこにしか繋がっていないのだから」

「関係ありません」

アリシアは即答した。

「襲撃者の狙いはあくまでもエリエ＝グリーンハットのみです。その流れ弾に当たるリスクはあっても、シェルターの中に逃げ込んだ私達を執拗に狙う理由はないはずです。こんな所でモタモタしていないで、さっさとシェルターの中に入る事を推奨します」

「なら一人で引き籠もってろよ」

「あなたの指紋と網膜のデータがないと開かないんですよ。襲撃側からこじ開けられないように。忌々しい事に、ロック関連の緊急電源はシェルター内に確保されていますからね」

「アリシア、お前は生命保険には加入しているか？」

「ブルーエリア社のプラチナコースに」

「なら良かったじゃないか。国際テロで死亡した際に受け取れる支給額はお前の生涯賃金を上回ってる。『資本企業』的に言わせてもらえば、幸せな死に方ってヤツだろう」

「入院対策として加入していますが、死亡時の引き渡しとして指名できるようなパートナーはいません」

「……胸を張って言えるような事じゃないだろう、それ」

呆れたようにマリーディは呟きながら、

「それに、『情報同盟』のグリーンハットに押し付けられるとも限らない。襲撃者の目的は『繰り上げ』なんだろう？　だったらグリーンハット襲撃に手こずった場合、他の上位通過者

へ標的を変える可能性もある。……つまり、四位の私達をだ」

「建前は結構です」

直立不動のアリシアはそう遮った。

「ようは、そういう言い訳で私達を説得しておいて、内心では『情報同盟』のエリエ＝グリーンハット襲撃に憤っているだけでしょう。ある意味、あなたが回避した危機へあなたは自ら舞い戻ろうとしている。それは、グリーンハット選手が民間人出身だからですか？」

「……」

「このオリンピアドームで開催されているテクノピックは、『資本企業』『情報同盟』『正統王国』『信心組織』など世界的勢力の技術力競争の誇示と、民衆のナショナリズム的な鬱憤を晴らす代理戦争として機能しています。その大会に代表選手として参加する事は、オブジェクトに搭乗する操縦士エリート同様、戦場へ赴く事と変わりません。契約書にもそう記述されているはずですが？」

軍事を極めたエリートと、競技を極めた代表選手は、人体開発のために使われている技術は同じなのである。

オブジェクトを使うか使わないか。

両者の違いはそこにしかなく、このテクノピック自体が形を変えた戦争であるという意見も珍しくはない。

しかし、

「……選手は兵士と同じ、か」

マリーディはくだらなさそうに笑った。

「入賞数に応じて戦災者へ献金を送っている程度の人間が？　それで世界中が笑顔になれると本気で信じている程度の人間がか？　……馬鹿馬鹿しい。それは本当の『泥沼』を知らない人間の台詞だな」

「俺もアリシア嬢と同じく、反対側に立とう」

言ったのは、護衛の男だった。

「エリエ＝グリーンハットの性質がどうのこうのの問題ではない。君個人の安全を守るのが俺の職務であり、それ以外の選手には適用されないという事情からだ。有り体に言って、勝手に飛び込んで勝手に怪我をされても違約金が発生しそうでとても怖い」

「そうかい」

マリーディは手の中の拳銃を手慣れた操作でチェックし、

「なら、こいつだけでも借りておくぞ」

「んっ？　おいちょっと待て！　いつ俺のホルスターから抜き取った!?」

「私はどっちでも良いよ」

薬剤師のステイシーにとっては『経験済み』の範囲内なのか、彼女の調子だけは全く変わっ

ていない。

「ドーピングの商売ができるならね。銃火に突っ込む前に筋肉増強剤でも使っておく？　鎮痛剤とか精神安定剤もあるよん」

「普通の包帯と消毒薬を頼むよ」

適当に言いながら、マリーディは拳銃片手にドアの向こうの通路の様子を確認する。

嗅ぎ慣れた硝煙の匂いが漂っていた。

オブジェクト任せのクリーンな戦場とは違う、『泥沼』の匂い。

「……さて。それじゃあ平和の祭典の醍醐味とやらを味わってみますか」

4

通路は直線的で、問題のエリエ＝グリーンハットの選手控室は通路の角に位置する。角の近くには裏口のドアがあるが、そこへ飛び込もうとすれば、五、六人の襲撃者から蜂の巣にされるだろう。

マリーディのいるドアから襲撃者までの距離は、およそ二〇メートル前後。

（……馬鹿なヤツ。グリーンハットの控室に夢中になってて、思いっきり背中を見せてやがる）

となれば遠慮をする理由は特にない。

マリーディはドアから身を乗り出し、容赦なく拳銃の引き金を引く。

パパンパン!!　という立て続けの銃声と共に、三人ほどの襲撃者達が薙ぎ倒されていった。

残る『正統王国』兵が慌てて角を曲がって銃弾から逃れたが、マリーディは一気に攻勢へ出る。

ドアから飛び出し、通路を走る。

連中が角から再び顔を出す前に、マリーディの方から敵兵が遮蔽物に使っていた角へと到着する。

(同じように直線的な通路しかないのなら、遮蔽物に使えるものはほとんどない。連中が泡を食っている間に連射を叩き込めれば一気に制圧できる!!)

そう思った直後だった。

横合いから、ガチリという金属音が聞こえた。

エリエ＝グリーンハットの選手控室からだ。

「ッ!!」

迷わず床へ身を伏せた直後、腰ぐらいの高さをアサルトライフルの掃射が襲いかかった。砕けたドアから反対側の通路の壁へ、立て続けに弾丸が抜けて火花が散る。

一瞬、控室へ踏み込んだ『正統王国』の襲撃者が発砲してきたのかと思った。

だが違う。

(……グリーンハット側、『情報同盟』の護衛達か!!)

とはいえ、それが連中の通常業務でもあるだろう。道を踏み外しているのはマリーディであり、彼女はその事を悠長に説明していない。敵と思われても仕方がない場面ではあった。

つまり。

彼女が北欧禁猟区の泥沼でさんざん味わってきたのと同じ……やり甲斐のない仕事という訳だ。

伏せたマリーディへ改めて照準を合わせようとする『情報同盟』の男達だったが、引き金は引かれなかった。

背後からマリーディを追ってきた護衛の男が、威嚇狙いで控室の中へ短くライフル弾を撃ち込みながら鋭く叫んだからだ。

「役立たずが！　クライアントを守れないならせめて邪魔をするな!!」

「結局ついてきたのか？」

「アリシア嬢に追加報酬をねだったが一蹴されたよ」

言い合いながら、二人は次の行動に移る。

敵は角の向こうの直線的な通路にいるはずだ。遮蔽物はほとんどない今なら、パニックに陥っている襲撃者を制圧するのは難しくない。そう思い、マリーディ達は通路の角から体を最小限だけ出し、一気に銃弾を発射していく。

しかし、残った襲撃者達が血の海に沈む事はなかった。

銃弾はオレンジ色の火花と共に弾かれる。

ゴバッ!!　と。

薄い外壁を突き破って、八輪の装甲車が襲撃者達の盾となったからだ。

「チッ、またもや『正統王国』ブランドか！　何であんなものがオリンピアドームに用意されているんだ!!」

「選手の安全な移送に使うと言えば申請は通るさ。二〇ミリの機関砲が備え付けられていようとな!!」

慌てて二人が通路の角へ身を引っ込めると同時に、屋根の上に設置されていた機関砲が爆音を発した。

マリーディが護衛の男を突き飛ばして床に伏せた直後、これまで遮蔽物として機能していた通路の角そのものが粉々に砕け散った。

「一度下がるぞ！　アサルトライフル程度で撃ち抜けるような装甲じゃない!!」

事前に拳銃で射殺した『正統王国』兵から装備一式を拾い上げつつ、マリーディは直線的な通路を走る。護衛の男もその後に続いた。

選手控室の通路は格子状に広がっており、控室そのものは二×五の一〇部屋ごとにブロック

状に設置されている。マリーディ達はブロックを回り込む形で、別の角を曲がって機関砲から逃れようとした。

「追っては来ないな」

「向こうの最優先目標はエリエ＝グリーンハットだ。オリンピアドーム側から『仲裁』が入る前にケリをつけたいんじゃないか」

装甲車は戦車に比べて装甲が薄く、歩兵にも運用できるサイズの爆薬や砲弾などで貫徹されるリスクもそれだけ高い。ひょっとすると、角に逃げた敵兵を無理に追って、罠に掛けられる危険を嫌ったのかもしれない。

もちろん、それはマリーディ達が『絶対に殺さなくてはならない』標的ではないから、という事情もあるのだろうが。

護衛の男が質問する。

「どうする？　三〇ミリなんて使われたら、エリエ＝グリーンハットの控室などあっという間に制圧されるぞ」

「もちろんあの装甲車を吹き飛ばすさ。使えそうな物もある」

マリーディは死者から奪い取った装備品を床に広げて、そんな事を言う。

出てきたのは、拳銃、セミオートのショットガン、手榴弾、そして……、

「プロペラ式のロケット砲の弾頭か」

「対装甲兵器の優等生だ。あの装甲車には爆発反応装甲もついていなかった」
「だがこいつはあくまでも弾頭だけだろう？　これは先端の爆発する部分だけだ。矢のように発射するためには、別の推進剤が必要になる」
もちろん兵器によって色々方式はあるが、これは弾頭の他に、三〇センチ程度のスティック状装薬を二本接続した上で、肩に担ぐランチャーから発射するタイプのものだった。つまり、そのスティックがなければ飛んでくれない。
「飛ばなくても良い。こいつの信管は圧力感知型だ。先端に衝撃が走れば爆発する。安全ピンを抜いて手で投げたって爆発する訳だ」
「あの三〇ミリ機関砲の前に立てだって？」
護衛の男は眉をひそめた。
「手で投げて届く距離ってどんなものだ。直線の通路で天井も低いから野球の遠投みたいにはできないし、弾頭だってボールのように丸い形はしていない」
「そうだな。素手で投擲すれば三〇メートルぐらいか？」
「おいおい。そんなのじゃ角から顔を出しただけで吹き飛ばされるのがオチだ。角から出た部分を撃たれるのではなく、壁ごとバラバラにされるという意味でな。君が勝手に死ぬ分には構わないが、それで違約金が発生するようなら止めざるを得ない」
「なら、それ以外の方法を取れば良い」

（……七五〇グラムか）

マリーディはラグビーボールをスリムにしたような弾頭を摑み、重量を確認する。

「お前のライフルを借りるぞ」

「またスるのはやめてくれ」

「良いからよこせ。あと、銃弾をばらして空砲を作ってくれ」

眉をひそめる護衛の男に、マリーディは言う。

「空砲からは鉛弾は発射されないが、それ以外の部分は実包と同じだ。火薬の燃焼ガスは発生するし、鉛弾を押し出すためのエネルギーだって確保できる。……つまり、ロケット砲の弾頭をライフルの銃口に固定してから空砲を発射すれば、素手で投げるより遠くまで飛ばせるって寸法さ」

ロケット砲弾頭の底部はスティック状装薬を取り付けるため、ネジのような突起が伸びている。ここを銃口に差し込んで固定する訳だ。

この場合、実弾をそのまま使うと銃口に取り付けた弾頭を破壊してしまう事になる。そのため、空砲が必要なのだ。

「実際に、オブジェクトが登場する前の古い戦争では使われていた方法だ。ただ、銃身に高い負荷をかけるから銃器会社からは嫌われているがな」

「その場合の射程は？」

「曲射弾道……野球の遠投のようにやれば、一〜二〇〇メートルといったところか」
「ここが狭い通路だという事をもう忘れたのか？」
「この控室の建物は広い平屋だ。そして装甲車が突っ込んできた時、壁と一緒に天井の一部も破壊されている。標的の真上にはデカい穴があるのさ。だったら弾頭を、天井の穴1を通して大空へ大きく飛ばし、穴2から装甲車の真上へ落とせば直撃する。違うか？」
「穴2は装甲車が空けたものだとして、穴1はどこにある？」
護衛の男が尋ねると、マリーディは床に並べた戦利品の内、軍用のセミオートショットガンを掴み取った。銃口を上へ向け、立て続けに引き金を引く。
ドンドンドン!!　と腹に響くような轟音と共に、天井に一メートル四方の風穴が開く。
「準備完了」
「北欧禁猟区の連中のハングリー精神には頭が上がらないね。ほら、空砲だ」
護衛の男から空砲の薬莢をいくつか受け取るマリーディは、代わりにライフルから取り外したセンサー類やスコープなどを手渡し、
「スコープは電子系のセンサーのモニターとしても使えるだろう。通路の角に設置しろ。センサーやカメラだけ出して、安全に装甲車の様子を観察するんだ」
「……俺にも楽をさせてくれよ」
「私は無線機材を持っていない。ライトの点滅でやり取りするぞ」

「せめてライフルの代わりの銃器ぐらい渡してくれ」

護衛の男は先ほどマリーディが使ったショットガンを摑むと、通路の暗がりへと走っていく。

その間に、マリーディは武器として使えるロケット砲の弾頭を五発ほど足元に並べていく。

しばらくすると、奥から白い光の点滅があった。

『装甲車は先ほどの位置に停まっている』

それを確認すると、マリーディはロケット砲の弾頭を先端に取り付けたライフルを真上に構えた。弾頭先端の安全ピンを抜き、天井に大きく空いた穴を見据えて、正確に引き金を引く。

ボン!!　という普段よりくぐもった銃声と共に、野球の遠投のようにロケット砲の弾頭は夜空へ飛んでいく。

五秒ほど経って、建物全体を震わせるような振動と轟音が炸裂した。

すぐに暗闇の向こうからライトが点滅する。

『外れたぞ！　装甲車の真上の穴に落ちていない。関係ない所の天井を突き破っただけだ!!』

『曲射弾道だぞ。風向き、気温、湿度、燃焼ガスの漏れ方なんかで落下地点に誤差は生じる。最初の一発目で当たるとは思っていないさ』

マリーディはライトのスイッチを素早く切り替えて信号を送りながら、

『それより初弾はどこへ落ちた？』

『何だって？』

『初弾の落ちた場所を正確に教えろ！　それでケリがつく!!』
『装甲車から南へ五メートル!!　ここから見て装甲車の向こうだ。ヤツも動いちゃいない！　だからどうしたっていうんだ!?』
実際、こうした曲射弾道の代表格である迫撃砲などでも、一発目で正確に当てる事はほぼない。初弾は計算のための基準だ。照準で狙った場所と実際に砲弾が落ちる場所の誤差を測り、そこから誤差を修正して標的を正確に狙い撃つ訳だ。
マリーディは素早く次の弾頭をライフルに装着させ、銃口を真上へ向ける。
（南へ五メートル、か）
引き金を引き、大穴を通す形で夜空へ弾頭を発射する。
『今度は外へ落ちた。おそらく北西二メートル!!　壁の崩れた位置からの推測だ！』
さらに発射。
『ここからじゃ落下地点は見えない。粉塵の流れ方からおそらく西へ七～一〇メートル！　西へ七メートル!!　くそっ、こっちにまで粉塵が来たぞ!!　これで何とかなるのか!?』
「……なるんだよ坊ちゃん」
マリーディはライトで答えず、次の弾頭を装着させる。データが多ければ多いほど、誤差の修正は正確になっていく。その点で言えば、この失敗は無駄にならない失敗なのだ。
そして最後の一発を発射する。

夜空へと吸い込まれた弾頭は、五秒ほどの時間を置いて正確に起爆する。

ドンッ!!!!!!　という爆発音は、これまでのものとは性質が違っていた。空気を叩く音は低く、通路の向こうがオレンジ色の揺らぐ光でほのかに明るくなっている。

装甲車の燃料に引火したからだ。

護衛の男から、ライトの点滅で合図が飛んでくる。

『装甲車の爆破を確認!!』

『お前はその通路の角から銃を構えろ。私は別のルートを使う。L字に折れた通路の二方向から銃撃して、一気に片をつけるぞ』

5

装甲車が失われた事で、『正統王国』側の襲撃者の命運は決まった。

それでも抵抗しようとした兵士はマリーディのライフルで撃ち抜かれ、『賢明な判断』をした残党は崩れた外壁から建物の外へと逃げて行った。

建物の照明がようやく回復する。

白々しい光の中で、護衛の男がこう質問してきた。

「どうする」

「放っておけ。下手に深追いすると死にもの狂いの抵抗をされそうだ」
マリーディは護衛の男にライフルと拳銃を返しながらそんな事を言う。
炎上する装甲車の煙に反応したのか、ロケット砲の影響か、通路はスプリンクラーでびしょ濡れになっていたが、装甲車付近は天井が崩れているため、冷水の恩恵は受けられないようだ。今もオレンジ色の炎が揺らいでいる。
「『情報同盟』のエリエ＝グリーンハットはどうなった？」
「……無事とは言い難いな」
壊れたドアから控室の中を覗き込んだ護衛の男はそんな言葉を返した。
血まみれの女性が部屋の中央に倒れていた。
一〇代後半の少女のようだ。マリーディが着ている、全身を覆うタイプの特殊スーツではなく、上下で分かれたセパレート型の競技ウェアをまとっている。へそが見える形のものだが、そのすぐ横に赤黒い穴が空いていた。
這いずったような血の跡は、部屋の奥のシェルターから続いている。
マリーディは顔をしかめる。
「……シェルターに入る前から撃たれていたのか」
「ショットガンではないな。『正統王国』側は障害物破壊用のショットガンに対人用の機関拳銃を装着して使用していた。おそらく実際に当たったのは九ミリだ。弾頭はデビトロセラミッ

クス加工で硬度を増している」
「弾頭は柔らかくない、のか？　何でまた」
「こんな所に配備されているって事は特殊作戦用だろう。殺すだけとは限らない。ＶＩＰ捕縛用も兼ねて製造されているのかもな」
（なら、まだ助かる見込みはあるか）
マリーディは部屋の中でエリエ＝グリーンハットを介抱している『情報同盟』側の兵士達にこう声をかけた。
「弾丸は貫通しているか？」
「うるさいな。放っておいてくれ!!　今は無駄話に付き合っている暇はない。アンタ達の介入は受け取っておくが、これ以上は踏み込むな!!」
感謝の言葉も、一度は銃口をマリーディに向けた事への謝罪もない。
それで当然だとマリーディも考えていた。彼らは所属の違う兵隊、つまり『戦場でたまたま見かけた場合、特に理由がなければ殺す』間柄である。なのでマリーディはそんな事には拘泥しない。
「弾丸は貫通しているかと聞いている」
「だったら何だ!!　弾は体の中には残っていない。だが出血がひどい。傷そのものも大きいし、シェルターの中にいた間ずっと手当てもできなかったから、かなりの量が流れ出ている。これ

で分かっただろう!!　一刻の猶予もないんだ!!」
「傷口に丸めた布を押し付ける以外にもやれる事があるぞ」
「……？」
怪訝な顔をする『情報同盟』の護衛に、マリーディは控室のベンチを指差した。より正確には、ドーピング機材を収めてあるであろう、保冷機能のある大きなバッグだ。
「テクノピックに参加している選手なら、ドーピングの一環として時間差輸血の準備も整えているだろう。血液量を増やして酸素運搬量を増やすためのものだが……当然ながら、失った血液を取り戻すための本来通りの使い方もできるとは思わないか？」

6

「呆れました」
と直立不動で呟いたのは、アリシアだ。
自分の控室に戻ってきたマリーディに向けて、彼女はそんな事を言う。
「手を汚さずに上位通過者をリタイヤさせる絶好の機会でしたのに、それをみすみす自分の手を汚して潰すとは。その思考回路は理解に苦しみます」
「どのみち、あの怪我で二日目以降の競技に出る事はできないさ」

「でしたらなおの事、戦闘に参加した意味はないのでは？」

「一体何を確認しているのか、携帯端末をいじくり回しながらアリシアは告げる。

「その無意味な戦闘行動の結果、我々は『正統王国』またはその装備を利用する何者かから受ける直接的リスクが増加しました。これは、今後の競技日程に悪影響を及ぼす可能性を意味します。……くれぐれも、スポンサー様の新型ライフルへ悪いイメージを与えないよう細心の注意を払ってください」

相変わらずな言い方に、マリーディは底意地の悪い笑みを浮かべて、

「卑劣な妨害で本来の性能を発揮できなかった、悲劇の美談に仕立て上げても売り上げは伸びるんじゃないか？」

「……持ち主が次々と死ぬなどと根拠のない事を言われては困ります」

まったく冗談の通じていないであろうアリシアの言葉を聞き流し、マリーディ＝ホワイトウィッチはわずかに視線を宙に向ける。

ウェアやシューズ、身体開発技術の向上によって、本来のスポーツマンシップなど失われてしまった国際競技大会。

世界的勢力の技術力競争に、民衆のナショナリズム的な不満を解消するための代理戦争。

裏で行われる様々な妨害行為でさえ暗黙の了解を得ているエンターテイメント。

巨大人工浮揚島オリンピアドームで繰り広げられるテクノピックは、更なる血と戦火を招き寄せる。

敵軍 一

目玉焼きのような形状のオリンピアドームの、さらに一番端に近い場所に、大学の講堂を超える大きさの貸倉庫が並んでいた。港湾施設のものではなく、民間ヘリコプター用の機材を出し入れするための施設だった。もっとも、大西洋のど真ん中を航行中のオリンピアドームから、大陸へ直接向かえるほどヘリコプターの燃料容量は大きくない。ヘリコプター関連の施設は安全面の『余裕』も考え、オリンピアドームがどこかの大陸へ五〇〇キロ以内に近づいてからでしか使えないため、今のポイントにいる時点で、そういった施設はほぼ無人と言って良かった。

しかし、その用のないはずの貸倉庫の一角に、十数人の人間が集まっていた。

大型の無線装置に、数々のモニター。銃器や爆発物はおろか、装甲車なども停めてあった。単に兵器を保管しておく場所というだけではなく、弁当やレトルト食品の空きケースが散乱している事から、彼らがここに『滞在』している事が窺える。

メンバーの中の一人、イリス＝アグラベーションは、女性らしいしなやかな一〇本指でコンピュータを操作しながら背後へ振り返った。

「シュートアスロン関連で小競り合いを傍受しました。『正統王国』から『情報同盟』へ。だがそこへ『資本企業』が介入したのが引っかかります」
「今はテクノピックなんだ。それぐらい予想できていた事だろう」
イリスの背後から画面を覗き込んでいるのは、ラミール＝スコッフローと呼ばれる金髪に褐色の肌の女性だった。
せわしなく指を動かすイリスは、さらにいくつかのウィンドウを表示させながら、
「ですが、三つもの勢力が一度に矛を交えたのは大きい。この時点で必要以上に騒がれるのはまずいです。『空白化』もまだなのに」
「影響は出そうか」
「可能性は低いですが、会場全体の警備難度が上げられるかも。オリンピアドーム側と選手護衛側との間で対立構造を生ませれば、双方を足止めさせる事もできますが」
「やめろ。下手に介入すると、それこそ我々の存在が表に出かねない」
「しかし」
「『空白化』は手順の一つだ。目的そのものではない。ゴール地点を見誤るな。リスクは実働の我々が背負えば良い」
ラミールは画面を軽く睨みながら、
「今回の襲撃、『正統王国』が『情報同盟』の選手を襲い、そこへ『資本企業』が介入したの

だったな」

「ええ」

「もう少し、この構造の詳細を調べてみろ。利用できるかどうかはその後に見極める」

第二話

1

テクノピックの選手村は、ドーム状の競技場の外側のスペースに用意されている。選手村、という名前は古い時代の国際大会からの名残でしかなく、実際には高層のリゾートホテルと大して変わりはなかった。

護衛の男がマリーディに声をかけてくる。

「意外だな。テレビにかじりつくようなタイプには見えなかったんだが」

「女子五〇メートル走の結果が気になる」

ナショナリズムに目覚めたとかいう理由ではなく、彼女の手には映画のチケットのようなものが握られていた。

「賭けていたのか」

「偽造防止のためか知らないけど、一回やたら金がかかるな」

という事は、素人同然の私営賭博人を介したものではなく、オリンピアドーム側が正式に発効している賭博チケットを使ったものなのだろう。

が、スポーツニュースのダイジェストを眺めたマリーディは、不機嫌に唇を尖らせると複数のチケットをテーブルへ放り投げた。

「五〇メートルで四・七七秒超えるかね普通！」

「短距離の王者なんて予選の段階から一択だっただろう」

「順位の方だと倍率が低すぎるんでトップのタイムの方で賭けていたんだ」

金メダルの黒人選手は四・七四秒、その後も四秒台という驚異の記録が並んでいく。もちろん人間がただ走るだけでここまで速くはなれない。ウェア、シューズ、薬物投与に至るまで、ありとあらゆる手段で人間の速度を上乗せした結果がこの異常な記録の数々なのだ。

用を終えたとばかりにマリーディはテレビの前から離れると、広いホテルの室内をウロチョロ歩き回る。

いくら損したというより、無意味に金を散らせた事に苛立っているのだろう。

「窓の傍には立たない方が良いんじゃないか？」

「偏光ガラスだから、外からでは私が立っている事は分からないさ」

マリーディは夜景を眺めながら答える。

護衛の男はソファに身を沈めたまま肩をすくめて、

「落ち着かないな」
「そっちこそ。移送中よりそわそわしているようだが」
「護衛する側としては、こういう高層施設そのものが危なっかしくて仕方がない」
「妨害行為を行う者の大半は、別の選手の味方でもある。それらを一ヵ所に集めてしまえば、ビル全体を爆破して倒壊させる選択肢は失われる。言ってしまえば、全員を全員の人質にする事で安全を保っている訳だな」
「実際に、そこまで単純なら俺の給料はこんなに高くはないよ」
「というか」
マリーディはようやく振り返り、
「質問だが、お前はいつまで部屋にいるつもりなんだ。アリシアもステイシーもすでに自分の部屋に戻った。まさかと思うが、身辺警護の名目で一晩中監視するつもりじゃないだろうな」
「時間契約の問題だよ。俺としても、潜り込むならもう少しグラマラスな女性の部屋の方がありがたい」
護衛の男はソファに座ったまま肩をすくめ、
「深夜一二時まではこうしているよう依頼されている。以降は部屋の外で待機する。簡単だろう？　簡単だが、守らなければ違約金が発生するんだ。悪いが我慢してくれ」
「……その調子だと、朝もお前に起こされそうだな」

「悪いが朝食まで振る舞うつもりはない。必要なら別途メイドでも雇う事だ」
チッ、とマリーディは軽く舌打ちし、もう一度窓の外に広がる夜景へ目をやった。
「しかしまぁ、運営のオリンピアドーム側は思った以上に介入して来なかったな」
「何の話だ？」
「今日のエリエ＝グリーンハット襲撃の話さ。選手個人や所属団体が雇った護衛がいるとはいえ、本来、この手の事件を食い止めるのは運営のオリンピアドーム側のはずだろう」
実際には選手を守る名目で入ってきた護衛達が襲撃事件を起こしている訳だが、おそらくそうした内情も運営側は理解しているはずだ。
護衛の男はくつろぎながら答える。
「向こうにも向こうの事情がある。事情以外にも、必要以上に関わって命を危険にさらすのが嫌なんだろう」
「……」
「何しろ、オリンピアドーム側の兵力の大半はＵＡＶやＵＵＶ……いわゆる無人兵器だからな。生身の兵隊がどれだけ嫌がっているかが窺える」
「装備だけはご大層なものを取り揃えているのにな」
マリーディは吐き捨てながら、夜景の一角を指差した。
人工の陸地ではない。

その先に広がる漆黒の海だ。空母よりも大きな巨大船舶の明かりが、本来何もないはずの場所へ夜景の光点を侵食させている。

「見ろよ。巨大変電船舶だ。名前はオーシャンサブステーションだったか。発電自体は軌道上の衛星が行い、マイクロウェーブで船舶へ送電。さらに送られた電力をレーザーに変換してドームへ送り、各種無人兵器のエネルギーを確保する」

「発電衛星群か」

「地球外太陽光発電。一時期は地球温暖化の救世主ともてはやされていたが、広い表面積を軌道上で得ようとすると、デブリが直撃するリスクが増すだけだと分かってからは下火になった技術だ。挙げ句、デブリに吹き飛ばされた発電パネルがそのままデブリの仲間入りするから、国際法で制限しようなんて話も出ているぐらいの落ち目分野だな。まったく、『回りくどい大層さ』じゃないか」

変電施設そのものにも、作業をするための電力がいる。

オーシャンサブステーションではメタンハイドレートを採掘し、ガスタービン用の燃料として確保するための設備も備えられているという話だった。

……それを単純に『発電施設』とできないのは、つまり要求されている電力が桁違いに莫大だという事だ。

事情があるんだよ、と男は告げた。

「施設外で発電を行い、レーザー伝送で電力をオリンピアドームへ供給。さらに施設内の送電網を使ってドーム内部へ電力を送り、やはりドーム内の小型レーザー伝送技術で各種無人兵器へ電力を供給・充電させる」

護衛の男はテキストを読むように呟いてから、首を横に振った。

「……これだけで運営の面倒な事情が垣間見えるだろう？　ドーム内に自前の発電所を用意すれば良いのに、連中にはそれができない。無人兵器へ送る電力はドームの外で作る……とアピールする事で、オリンピアドームそのものにはあくまでも軍事的価値はないと示さなければ、オブジェクトから標的にされかねないって訳だ」

他にも、ダイレクトに衛星からのマイクロウェーブをオリンピアドームへ送ってしまうと、コンピュータや無人兵器へ悪影響を及ぼすリスクがある、という点もある。

人体への影響も指摘されているが、そちらについての科学的根拠はまだ証明されていない。ただオリンピアドームだってサービス業だ。観客の足が遠のく事は死活問題に直結する。余計な風評は避けたいだろう。

一度オリンピアドームからは離れた海へマイクロウェーブを落とし、そこからレーザーで電力を送電するのにはそういう意図があるのだ。

「兵力を持ちすぎるのも問題。しかし細かく調整した結果、いざ有事の際に身動きが取れなくなった」

「おかげで護衛業が衰退せずに済んでいるって訳さ」
「となると」
マリーディは呟き、巨大変電船舶を静かに睨みつける。
「……やはり、今後もトラブルは自力で乗り切らなきゃならないのか」

2

ビフレストアーチ。
このオリンピアドームの観光名所の一つだ。内陸へ引き込まれた巨大な運河へ並行的に架かる七本のアーチ状鉄橋の事を指す。夜にはライトアップされ、一本につき一色、合計七色の光を放つ事からこの名がつけられたようだ。
ビフレストというのは、北欧神話に登場する虹の橋の事である。
実際の利便性よりも、最初から夜景を構成するために作られた建造物であるため、七本の橋は異様に近い感覚で架けられている。そのライトアップの統一性とあいまって、七本の橋が架かっているというより、一本の巨大な鉄橋があるように錯覚する人間がいてもおかしくはない。
国際競技の観戦だけでは物足りなくなった男女がやってくる事で有名……ではあるのだが、オリンピアドームにやってくる客は基本的にホテル暮らし、しかも時間が夜遅いのにこんな場

所へやってきているという事は、実はここに足を運ぶカップルは自然に抱き合うほど進展はしていないのでは？　という妙なデータも週刊誌系情報サイトには掲載されている。

そんなビフレストアーチの歩行者用スペースの手すりへ上半身を預けている女性がいた。

薬剤師のステイシーである。

そんな彼女の隣には、直立不動のアリシアが立っていた。

彼女は自分の立っている堅牢な橋の足元へ、わずかに怪訝な目を向ける。

「揺れていますね。人工浮揚島だからでしょうか？」

「そんなにヤワな設計じゃないよ」

オリンピアドームに慣れているステイシーはニヤニヤと笑いながら、

「観光客が馬鹿騒ぎしてるの。数万人単位でドッタンバッタン飛び跳ねると震度計が反応示したりするものよ。前の冬季大会なんてすごくてさー」

「……この時間帯、全ての競技は終了しているはずですが」

「だから、録画・編集したダイジェストを眺めながら、ビールジョッキ片手に熱狂するとこうなるって言っているのよ？　クラブホールだと床に発電パネル敷いたりするらしいね」

すでに結果を知っている競技でさえこれだけの騒ぎ。これがライブ中継や競技場の観戦席となればどれほどの狂乱となるか。

改めてテクノピックの集客性を示すような状況だが、アリシアの本題はここではない。

彼女はあくまでも、自分が関わる金銭のやり取りにのみ執着を示す。
「どう思いますか？」
「何が？」
ステイシーの右手にはカクテルグラスがあった。中身については、足元にあるクーラーボックスの中にある材料を使って、自分で作ったものだ。
派手なライトアップの照り返しを受けて元の色が分からなくなっている酒を口に運ぶステイシーに、アリシアは無表情で問いかける。
「マリーディ＝ホワイトウィッチ選手の事です」
「ま、許容の範囲なんじゃない？」
グラスの中身を飲み干した彼女は、一度カクテルグラスを足元に置き、クーラーボックスの中身を漁り始める。
「利権と陰謀の渦巻くテクノピックじゃ妨害工作や襲撃事件なんていうのは珍しくもないし。事件がたくさん起こる以上、返り討ちだってたくさん起きてる」
「選手本人への襲撃に対処するなら分かります。ですが、あれは『情報同盟』の選手のために動いた行動でした」
「あの子は絶対にそれを認めないと思うけどね。ただサインの値段が上がりそうなエピソードではあるでしょう」

「感情移入タイプなら危険です。他の選手の事情を聞いて手を抜くような事があっては、彼女を支えるメンバー全員の不利益に直結します」

「そうかなー」

両手で掴んだシェイカーをジャカジャカと振りながら、ステイシーは笑う。

「こう言っちゃ何だけど、あの子は勝負事はかなり割り切るタイプだと推測しているよ。それはそれ、これはこれで人を殺せる種類の人間ね」

「そうでなければ困ります」

「軍人系だもんねえ」

シェイカーからグラスへ液体を移し、串に刺したパールオニオンを落として飾り付けながら、ステイシーは気軽な調子で言う。

対岸の火事を眺めるような口調だった。

「それも、オブジェクト全盛の時代にまだエースパイロットとして君臨しているような変人よ。マリーディ＝ホワイトウィッチ……『資本企業』のアイスガール1。いいや、彼女だけじゃない。『正統王国』のバーニング・アルファや『信心組織』のロケットイカロス……この時代にまだエースをやっているような連中は、多かれ少なかれ『時代に背いてでも空を飛びたがる』特殊な思想を持っている。相容れないのも当然ね」

「……」

「そっちもパートナーを事前に調べたんでしょ　アイスガール1の活動記録は当然知っているのよね？」

グラスの縁に唇をつけるステイシー。

アリシアは直立不動のまま、

「命令違反は過去多数。ですが、それらは必ず後世の歴史からは賞賛されるようなものばかりです」

「そこらへんが『可愛らしい』から、航空ＰＭＣの『スカイブルー』社も彼女を手放せないんでしょうね。……営倉に叩き込まれるのを覚悟で『安全国』の都市へ『誤射』された巡航ミサイルの迎撃を実行する、なんて『資本企業』の兵隊じゃまず考えられないでしょ」

カクテルグラスを軽く揺らしながら、ステイシーは笑う。

「ま、筋縄ではいかないのは事実だけど、単なる頭の固い筋肉バカじゃなかっただけ良かったんじゃない？　人の意見を聞く人間は長生きできる人間だけど、その分制御も利きやすい人間って事なんだし」

「ひとまず会話をして相手の考えを引き出してみましたが」

「……そんな愛想あったの？」

「要求の予測ができないのが難しいと感じました。名声に興味があるとは思えませんし、スポンサー様からいただける報酬の方にもそれほど固執しているようには見えません。目標として

いるものが分からなければ、釣り上げるのが困難になります。その点では、彼女の制御は糸口が見えない」

「簡単よ」

ステイシーは再びカクテルグラスの端に唇をつけながら、

「あれぐらいの年頃だもん。正義に対して潔癖なんじゃないかな」

「？」

「泥沼の北欧禁猟区からわざわざこんな茶番劇のためにやってきたのよ。そこでは手に入らない物を手に入れたがってるのは明白。それでいて、わざわざリスクを負ってでも他勢力の選手を助けに行ったんだから、単なる競技結果やメダルに興味があるのとは違うわね」

「でしたら何だと言うのです？」

「生産性」

ステイシーはプラスチックの串を摘み、パールオニオンをガリゴリと噛み砕きながら、

「ただ戦って殺し合うだけでは得られない物を求めようとしているなら、その辺に目的があるんじゃない？　記録も順位もメダルも、そうした生産性のある行いの一つとして捉えている。ただ残念ね。それを人を殺してまで手に入れたいとまでは思えない節がある」

「……」

「ね？　そう考えると若いって良いなぁって思うでしょう。手に入らない物を求めて戦場から

飛び出してきたのに、結局は目の前で襲撃されている人を見て『いつもの泥沼』へ飛び込んでしまう。可愛らしい成長途中の自我を感じるじゃない」

パールオニオンを食べ終わると、彼女はグラスの中身を早いペースで呷っていく。

「私もあなたと一緒で、金のためには相手を選ばないタイプの人間よ。『資本企業』だもんね。でも、同じ額なら楽しい相手と当たった方がやる気は出るのも事実。ああいう選手なら存分に腕を振るえるわ」

空になったカクテルグラスをマイク代わりにアリシアへ向け、ステイシーは尋ねる。

「あなたはどう？」

「誰であっても仕事は同じです。報酬が変動するのであれば話は変わりますが」

ふうん、とステイシーはつまらなさそうな顔でグラスを引っ込めた。

「それにしても、堅物のあなたがこんなカクテルセットを持っているなんて思っていなかったわ」

「接待の必要があれば酒類の準備もします。今夜はその機会が失われ、一部の材料は風味が損なわれつつありましたので」

「カクテルはいろんな瓶をさっさと開封する割に、小出し小出しに使うから、なかなか瓶を空っぽにできないのよね」

ステイシーは足元のクーラーボックスに目をやって、

「借りていっても良い？　部屋でも飲んじゃうから」
「飲んだ分だけ料金を払っていただけるのであれば」
「……風味がどうのこうので処分に困っているみたいな事言ってたよね？」
アリシアとステイシーの視線が激突し、熾烈な交渉合戦が始まる。

3

翌朝。ダウンロードしたハードロックを大音量で垂れ流す目覚まし時計を拳で黙らせたマリーディは、寝ぼけ眼でベッドから起き上がった。愛用の目覚まし時計にはあちこちに傷があったが、これでもマシな方だと彼女は思う。名曲だからこの程度で済んでいるが、単純な電子音などで起こされたら、そのまま時計を壁へ投げつけかねない。
ベッドの上であくびをするマリーディ。
護衛の男に揺さぶられずに済んだのは、部屋のドアにチェーンロックをしっかり掛け、さらにドアの前に椅子とマガジンラックを置いておいたおかげだろう。
マリーディはホテル備え付けであるフリーサイズのバスローブを引きずる形で室内を歩き回り、まずは冷蔵庫で冷やしていた炭酸水を口に含む。多少意識がはっきりしてくると、そのままバスルームへと向かった。ぬるめのシャワーを浴び、眠気覚ましのために備え付けのメンソ

ール入りボディソープで全身を軽く洗う。そして直後に後悔した。肌に感じる異様な寒さにガタガタ震えつつ、彼女は素っ裸のままドライヤーと格闘する。

「熱ちっ!?　くそ、温度調節はどこでやるんだ……？」

あれこれいじくり回すが、対応したスイッチのようなものは見当たらない。マリーディはドライヤーの使用を諦め、バスタオルで軽く髪を拭うに留まった。それから、いつもの黄色と黒のフライトジャケットに身を包むと、ドアを塞いでいた椅子とマガジンラックを取り外す。

ドアを開けると、大して堪えてなさそうな表情の護衛の男がこんな事を言ってきた。

「ひどいじゃないか」

「朝、最初に私の視界に入りたければ、その中途半端な無精ヒゲを剃ってこい」

生乾きの髪を軽くいじくりながら、マリーディはあくびをする。

「ところで朝食はどうなっているんだ？」

昨日の夕飯と一緒さ。競技が始まった以上、安全基準も上昇する。良からぬ妨害を受けないよう、薬剤師のステイシーパーメット嬢が腕を振るってくれるって訳だ。別料金でな」

「……あいつが持ってくる料理の方が、それこそ小細工されていそうなイメージがあるけどな」

ブツブツ言っていると、エレベーターホールの方からアリシア＝スラピージョーズが歩いてきた。時計の秒針みたいな歩幅の彼女は、今日も直立不動で口を開く。

「おはようございます」

分度器で測って形式にはめてみましたといった風に会釈をし、
「本日の予定を確認させていただいてもよろしいでしょうか」
「シュートアスロン二日目の開催は午後四時だろう？　それまでは自由だったはずだ」
「二日目は遠泳と狙撃の組み合わせとなります。水中活動用の調整が必要であるため、ウェア、ライフル、ドーピング各種の専用テストを行う必要がありますので、実質、午後からは全て拘束されるものと考えてください」
「デカい水風呂でバチャバチャ泳ぐ訳か」
「競技そのものはドーム内の設備で行いますが、それより前に競技で使う施設を利用する事はできません。最終調整はドーム外の遊泳エリア……つまり海で行っていただきます」
「了解」
「それと、テレビ局から取材のオファーが来ています」
面倒臭い、とマリーディは即座に嫌な顔をした。
「スポンサー的にはどうなんだ。新型ライフルの宣伝をしたいスポンサー的には」
「スポンサー様からの了解は得ております」
「つまり、参加はほぼ強制という訳だ」
「新型ライフルの露出を考慮した結果です。フレームに入る時は必ずライフルを手に持ってください。フライトジャケットにも社名は表記していますが、可能であれば五分、いえ三分に

度は社名もしくは商品名をさりげなく口に出してほしいものです」

マリーディは護衛の男へチラリと視線をやった。彼も彼で肩をすくめている。護衛としても、余計な仕事を増やしやがって、といった心境であるはずだ。

だが金を払ってくれるのはスポンサーだ、

そしてマリーディも護衛の男も傭兵である。

「で、どこの局なんだ？」

「キャットウォークＴＶというテレビ局です」

「……『情報同盟』系のネットＴＶだよな？」

「先日のエリエ＝グリーンハット選手に対する救援活動に、先方が歓心と興味を抱いた模様です」

「良いのか。『資本企業』代表の、それも軍人系の選手が顔を出して」

「あくまでも名目上は『世界的勢力の垣根を超えた平和の祭典のレポート』ですし、問題はないかと思われます。何より、スポンサー様の了解は得ておりますので」

「そもそも、お前達の最優先目標は新型ライフルの広報活動だろう。『資本企業』の商品を『情報同盟』で宣伝してどうするんだ……？」

「何事も話題性です。それと比較的『情報同盟』の番組はネット配信でオープンにされる傾向もありますので」

「分かったよ。細かいパワーバランスの調整はそっちに任せる」
「では、そのように」
と、そこへ今度はルームサービス用のワゴンを押すステイシーがやってきた。
彼女はわざわざ作ってきた手料理を大きく誇示して、
「じゃーん！　ザ・滋養強壮!!　ドーピングなんて使わなくても各種健康食品やら野菜や魚のエキスを抽出するだけでも結構いけるもんよ。普通の料理と思わず鼻息荒げて野獣のようにそこらを走り回りたくなっちゃう料理はどっちが良い？」
「……普通の料理で頼む」
「ハイ正直者には金のオノーっ!!」
無理矢理自信作を食べさせられそうになったマリーディは、慌てて護衛の男の背中に隠れる。

4

「はい、はい。ええ、もしもし。キャットウォークＴＶのルーカス＝ウェスタンローズです。はい、どうぞよろしく、はい」
別に電話に向かって話しかけている訳ではなく、どうやらこれが青年の素の話し方のようだった。携帯端末に送られたデジタル名刺にはディレクターとあったが、テレビ業界に詳しくな

いマリーディには、それがどれぐらいの位置にいる人物なのかピンと来ない。

（……二〇歳かそこらか？　結構な肩書きっぽくも見えるのだが、『情報同盟』のネット系事業だと、年功序列なんて存在しないのかもしれないな）

一二歳でエースパイロットをやっているマリーディに言われたくはないだろうが、目の前の男はそれぐらい、相当胡散臭そうな感じだった。率直に言って、普通の会社員として活動できるのかどうかすごく怪しい。

選手村……という名の単なるリゾートホテルの二階ラウンジで、マリーディはそんなルーカスと同じテーブルに着いていた。と言っても、これ自体がテレビの生中継ではなく、事前の打ち合わせである。

「それで、私の何を撮影したいんだ？」

「はい、それはですね。ええ、率直に申しまして、私、昨日まではエリエ＝グリーンハット選手と契約を結ばせていただいていたんですよ。汗と涙のドキュメント番組を編集するためにね、はい」

「……だから？」

「ええ、あなた様のおかげで一命は取り留めましたが、はい、流石にシュートアスロン二日目以降、あの怪我を押して競技に参加するのは難しいでしょう？　はい、ですから、リタイヤしたグリーンハット選手の再起の物語を追っても良いんですがね、それはちょっと長期戦になっ

ちゃいます、はい、はい。テレビ番組にもスポンサーがいるもんでしてね、ええ、はい、裏切れんのですよ。この大会で、短期間で、数字を取らなくちゃならない訳です」

一緒に同席していたアリシアが何やら力強く頷いていたが、マリーディにはルーカスの言いたい事が理解できない。

エリエと自分がどう繋がっているというのだ？

「もしもし、簡単に本音をぶちまけますと、グリーンハット選手の代役が欲しいのです、はい。ええ、ドキュメント番組の。ただ、今から『情報同盟』系の選手を捜したって、皆様すでに他の局との契約で満杯になっていまして、割り込むのは難しいのです、はい。……となると、はい、まだ手つかずの領域へ冒険した方が成功の見込みがありそうなのですよ、ええ」

「……」

「はい、はい、そうです。しかもすでに撮影しちゃったグリーンハット選手の映像もなるべく使い回したい。となると、ええ、彼女を助けたあなたを追いかければ、グリーンハット選手からスムーズに番組編成を移行できるかなと思いまして、はい」

「……どうするんだ？」

マリーディがアリシアに尋ねると、彼女は背筋をピンと伸ばしたままこう答えた。

「我々の第一目標はスポンサー様から貸与していただいた新型ライフルの性能アピールにあります。その宣伝材料の一つになればと話を伺ってみましたが、競技中、そしてその前後とぴっ

たりマークするようであれば、コンディションの維持に差し支える懸念が生じます。そのような事態になるぐらいでしたら、お断……」

「はい、はい、キャットウォークＴＶの番組配信は『資本企業』大手とも契約しておりますので、そちらの勢力圏への宣伝広告効果もかなりあると思いますよ、ええ、はい。あくまで『戦争』ではなく『国際競技』の番組ですので軍からの圧力もないので、はい、割と自由に平等に編成できますし。選手の他に、はい、はい、使川ライフルの解説についても最低三分は割かせていただきます」

「即刻引き受けましょう何が何でも」

「……お前も分かりやすいヤツだな会社の犬」

マリーディは呆れたように言い、

「競技中はライブ配信でも良いが、その他については一度私の目を通してから放映の許可を出す。それで構わないか？」

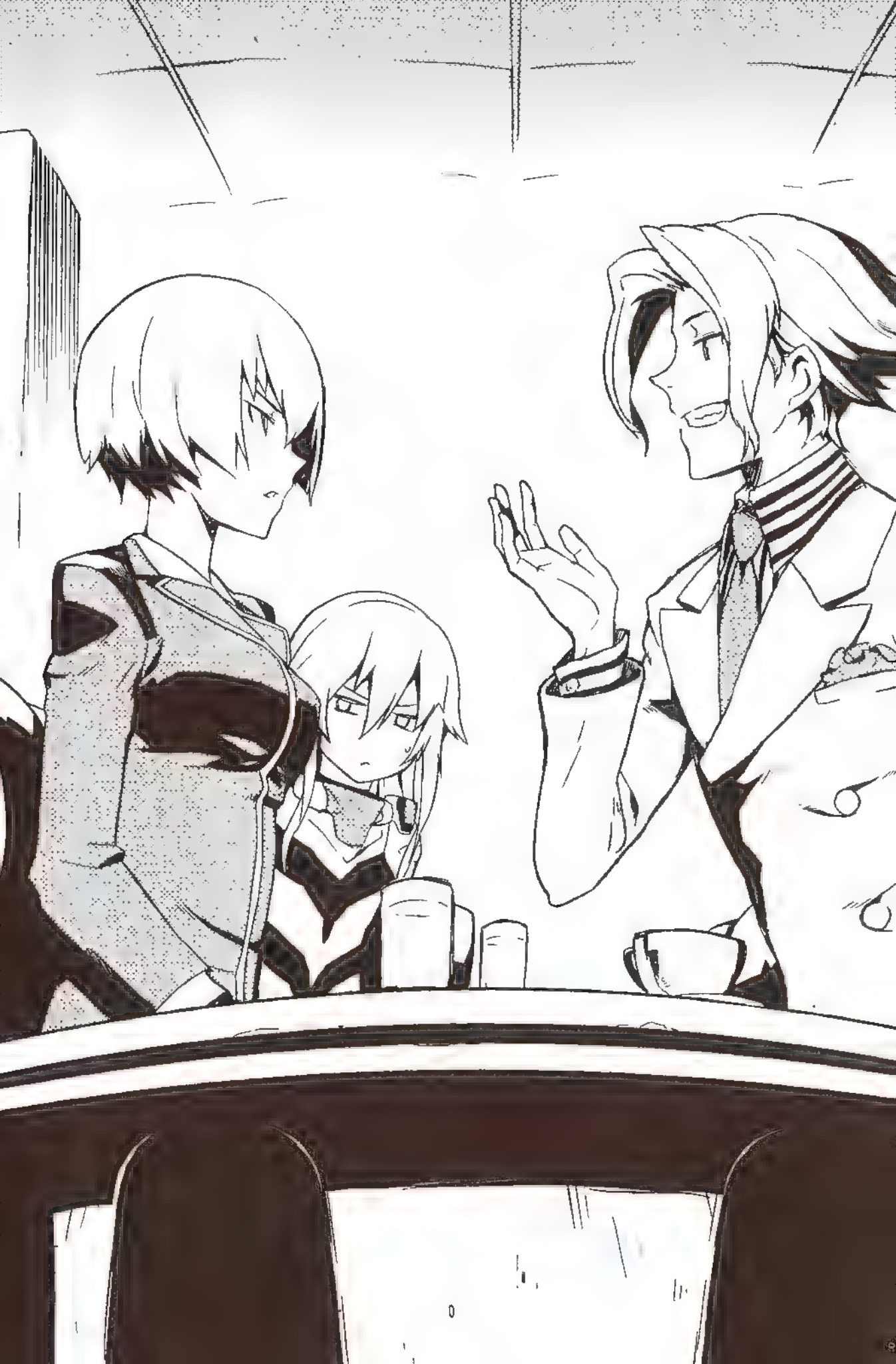
「ええ、はい、はい、もちろんです」

アリシアが割り込むように告げる。

「あと新型ライフルの解説部分に関しては、先に原稿と構成表の開示をお願いします」

「はい、はい」

「それと私はあくまで『資本企業』の人間だ。お前達『情報同盟』の逆鱗には疎い。知らない



内にそういったものに触れてしまうリスクがある事を忘れるなよ」
「はい、それは、ええ、はい、もちろん私達も気を配りますが、はい、はい、ええ、多分大丈夫だと思います、はい」
ルーカスはニコニコと微笑みながら言う。
「ええ、先日のグリーンハット選手救援の報はすでに『情報同盟』側の報道系ニュースサイトにも流れていますし、はい、『資本企業』全体に対する感情はともかく、はい、はい、マリーディ＝ホワイトウィッチ選手個人に対する民衆の感情は、はい、ええ、かなり好感触を維持していると思われますので、はい」
「なら結構だ」
「撮影クルーのＩＤ情報については、はい、護衛の方々にも送信しておきます。ええ、その人員以外は近づきません。はい、はい、キャットウォークＴＶの名を騙って接近してくる者がいた場合、ええ、妨害者である可能性を考慮して行動してください、はい」
「バスルームの中にまでは入ってくるなよ」
「……もしもし、あの、失礼ですが、はい、そちらの需要は、はい、ええ、スタイルを鑑みて、はい、はい、ユーザーニーズはほぼ皆無というか、はい、我々も商売でやってんだぞというか……」
「どこ見てコメントしやがったこの野郎」

5

テクノピックの開催地であるオリンピアドームは、大西洋のほぼ中央に浮かぶ巨大人工浮揚島だ。海水浴を楽しもうにも、陸地と違ってなだらかに海が深くなっていく訳ではない。足がつかないどころか、真下は深海魚の楽園である海溝だったりする。

そんな所で泳ぐなど自殺行為に聞こえなくもないが、一応は運営側も気を配っているらしい。

「……ようは、遊泳エリアだけなだらかな人工の陸地を造っている訳だ。海面で隠れてしまって分からないが、実際には目に見える海岸線の向こうにも、しばらく人工島が続いている訳だな」

「ただ、急な潮の流れに巻き込まれると、気に沖へ放り出されるリスクがあるぞ。やはり普通の海水浴場とは思わない事だ」

護衛の男に注意を促されながら、マリーディは深さ二メートルほどの海水へ飛び込む。とはいえ、特に水着に着替えている訳でもなく、格好はいつものフライトジャケットだった。元々は耐G用として戦闘機に乗る際に着用しているものだが、ベースとなっているのはオブジェクトのエリートの特殊スーツである。あらゆる環境に耐える機能を備えているからこそ、シュートアスロンのウェアとしても使い回せるのだ。

スリングベルトで重たいライフルを背負いながらも、そつなく立ち泳ぎをするマリーディに、護衛の男は唇を歪め、

「浮き輪でも求めてきた方が可愛げがあるのに」

「生憎、『情報同盟』のアイドルエリートじゃないんでな。私の商売に可愛げは必要ない」

すると、携帯端末を操作しながらアリシアが口を挟んできた。

「スポンサー様提供の新型ライフルはセミオート式です。基本的に防水ですが、次弾の自動装填には火薬の燃焼ガスを利用していますので、その通り道に水が入ると弾詰まりを起こすリスクがあります」

「いざとなれば空薬莢の排出口から一発ずつ弾を込めるさ」

「ドーピングはどうしちゃう？」

薬剤師のステイシーが、アイスキャンディー片手にそんな事を言う。

「遠泳ならやっぱり酸素運搬量の増加がベターかな？　一日目の疲労を取るための筋肉痛対策ってのも地味に効果が出てくると思うけど」

「……昨日時間差輸血は試したが、やっぱり高血圧で終盤は調子が狂わされたぞ。下手に手は出さない方が、かえって成績は上がるかもしれない」

「存在意義を根本から否定してくれるわねこのクソガキ」

そこへ、黄色い色の潜水艦の玩具が漂ってきた。

違う。リモコン操縦でマリーディを追いかけている、キャットウォークＴＶの水中カメラだ。

「……これで四六時中追いかけ回されるのか」

「平泳ぎでもしてやれ。水中で後ろから撮影すれば良いサービスになるぞ」

「どうせ私はそっち関係から戦力外通告されている身なのでな」

適当に言うと、マリーディは岸壁から遠ざかる形で泳ぎ始める。

ゴーグルがないので海水は目に染みるが、瞼を開けられないほどではない。周囲に工業地帯などがない大西洋のど真ん中であるためか、人工物に囲まれた外観とは不釣り合いなほどに水の透明度は高い。

オリンピアドームの遊泳エリアは底を人工的に造られたもので、砂浜などはない。あくまでもツルリとした建材だ。マリーディが今泳いでいるところは水深二メートルほどだが、遠ざかるにつれ、段差状に水深が深くなっていくようにできている。

さらに、

（底から突き出ている直方体のブロックは不審船の上陸防止用……？　いや、海流のコントローラーか）

八〇センチ四方、高さ一メートルほどの四角い柱が、海底には等間隔で設置されていた。それらは不規則に上下し、海水の流れをリアルタイムで操っている。

護衛の男は、油断していると急な海流に呑まれて遠泳に放り出される、と言っていた。おそ

らくそれを防止するためなのだろう。

（あっちのは海流調節のためじゃないな、可動式の防波堤か？）

遊泳エリアは段差状に水深を変えられているが、その段差のラインに沿って、太い切れ目のようなものが走っていた。こちらは強化ウレタンでできた防波堤が飛び出す仕組みになっているのだと、マリーディは適当に予測する。

と、そんな事を考えているマリーディに、圧電受話器からアリシアの言葉が聞こえてきた。

『そろそろ射撃演習水域となります』

（ＧＰＳで位置を探っているんだったか）

ＶＩＰもしくは性犯罪者待遇なのを思い出し、マリーディは前進のための足の動きを、その場に留まるための立ち泳ぎへと変更させる。黄色い潜水艦型の水中カメラがマリーディの周囲を旋回しているが、映像的に何が正解なのか、マリーディには判断できない。

（というか、水中だから声は聞こえても返事ができないんだよな）

海面に顔を出し、周囲を見回す。

二隻のゴムボートの間に金属製のレールが渡してあり、その上を人型の標的がスライドしていた。距離はおよそ三〇〇メートル。狙撃としては近距離に入る程度のものだが、立ち泳ぎで踏ん張りが利かない事、波でゴムボートが不規則に揺られる事を考えると、決して簡単なものではない。

マリーディはスリングベルトを使って背負っていたライフルを両手で持ち直しながら、
「練習するのは良いんだが、沖で日向ぼっこしている化け物に妙な勘違いされたりしないだろうな」
『海上警備をしているオブジェクトの事ですか？　ここから見えるのは「情報同盟」のアンリエッタ……正式にはガトリング０３３などと呼ばれている第二世代ですね』
「あの馬鹿デカいガトリング砲で誤射されるのはごめんだぞ」
『事前申請してありますから向こうもこちらの練習については承知しているはずですし、対人用の狙撃ライフル程度では、どこに当たってもオブジェクトに傷をつける事はありません。勘違いのされようはないかと思われますが』
（そういう建前で、有力選手を潰しに来ないかが心配なんだ）
と心の中だけで思ったが、冷静に考えれば、その『情報同盟』のテレビカメラが常時張り付いている。仮に『情報同盟』側が工作を行うにしても、自国民にその様を見せるような真似はしないだろう。
「じゃ、始めるか」
『今回の練習では実包の使用許可は下りませんでした。従って、空砲と低出力レーザーを使った模擬戦となります。標的にはレーザーを感知するセンサーがついていますので、水上射撃の感覚、空砲による実弾同様の反動、レーザーを使った照準の確認などをお願いします』

『ウェアに空気入れるのは反則だけどさー、浮力の高い素材でプロテクター作っちゃうってのはどうよ？』

「遠泳は楽になるかもな。だが立ち泳ぎの時にバランスが崩れるようでは、結局メインの射撃で足を引っ張られるのがオチさ。何よりそれは薬剤師の仕事じゃない」

『ちえー。そうそう、今日の水泳でメダルが狙える途中順位をキープしたらサインもらえる？』

「それも薬剤師の仕事じゃないな」

マリーディは海上に上半身だけを出したままピタリと静止し、小さな両手で狙撃ライフルを構える。スコープを覗き込み、迷わず引き金を引く。

炸裂する発砲音に、肩へ響く反動。そして圧電受話器に一定の電子音が鳴った。

「命中、か。……やはり玩具じゃ実感が湧かないな」

『理論上は、ほぼ実技と変わらない環境のはずですが』

「風の影響とかが測れないんだよ。それにしても、他の選手は練習に出てこないのか？　てっきり、シーズン中の海水浴場みたいになるものかと思っていたが」

マリーディがそんな事を言うと、護衛の男が切り返してきた。

『その辺は考えるさ。他の選手とかち合わせたら、その時点で妨害や戦闘が発生するリスクもある訳だしな。細かく時間を区切って水中行動の調整を行うようになっているんだ。一番早い選手なら一週間ぐらい前に終えているはずだぞ』

「……何で私だけ土壇場かな？」

『アリシア嬢が抽選クジでしくじった』

舌打ちするマリーディに、護衛の男はわずかな笑い声を漏らす。

『まあ、競技前に疲労を溜めるのは良くないが、練習中に刺されるよりはマシだろう』

「……そういうエンターテイメントを望んでいるカメラが周りをうろちょろしているが？」

『そこでサービス精神を発揮するぐらいなら、牛乳でも飲んでもう少しセクシーな体つきになってみろ。そっちの方が客は喜ぶ』

『必要ならホルモン関係のお薬処方するよー？』

『違いますよ。貧乳が不毛な努力をしているところが視聴者にウケるのです。いわゆる体を張ったギャグですね』

「お前ら全員失明しろ」

マリーディは無表情で岸に向かってレーザー銃を発砲する。

護衛の男は無視して、

『そろそろお時間だ。ライフルの感触を確かめたら、すぐに戻って来い。ドーピングを好まなくても、整体師に体をほぐしてもらう程度なら構わないだろう。競技が始まるまでに少しでも疲労を取った方が良い』

「……私よりマッサージが必要そうなババァに勧めた方が良いんじゃないか？」

アリシアとステイシーが予備のライフルを抱えてこちらへレーザー照射をしてきた。マリーディは無視して海水に顔をつけ、岸壁に向けて泳ぎ出す。

その時だった。

真横を併走していた黄色い水中カメラが、唐突に動きを止めた。バッテリーでも切れたかと思ったが、どうも違うらしい。推進力を生み出しているスクリューや、旋回時に使う舵などが死にかけの魚のように痙攣している。

同時に、圧電受話器から聞こえてきていたアリシア達の声も途切れてしまった。

考えられるのは、

（電波障害……人為的なジャミング……!?）

マリーディがそう判断した、数秒後の事だった。

水中銃の弾丸が、海水を引き裂いて襲いかかってきた。

6

水中銃。

文字通り、水中で発砲する事を目的に開発された銃器を示す。発射用の装薬が剝き出しだっ

た火縄銃やフリントロック銃の頃はまず不可能な代物だったが、銃弾の薬莢そのものの気密性が増した現代では、それほど難しいものでもない。率直に言って、水に入れた程度で火薬が濡れる事はないのだから、そのまま発砲できてしまうのだ。

それでも水中銃の実現を困難にさせているのは、火薬の燃焼ガスの取り扱いだろう。セミオートやフルオートの銃器には、火薬の燃焼ガスを使って内部パーツを動かす事で、自動的に次弾を装填する機能がある。この燃焼ガスの通り道を水で塞がれてしまうと、弾詰まりを起こしてしまうのだ。

この問題に対処する方法は極めて簡単だ。

銃器からそうした便利な機能を排除する。一発一発手動で弾丸を装填し、空薬莢を排出するボルトアクション式なら、燃焼ガスの問題は丸ごと取り除ける。

当然、自動装填はできないのだから連射はできない。

しかし、水中では標的の移動速度も大幅に落ちる。わざわざ連射しなくてもじっくり狙って撃てる環境にあるのだから、一発ずつでも十分な脅威となる。

丸腰のマリーディには反撃の機会はない。

ただ泳ぐだけで、海水を引き裂く弾丸から逃れられるはずもない。

（くそ……!!）

それでも彼女が死ななかったのは、海面ではなく海底に向かって急いで身を翻したからだ。

より正確には、海流コントロールのために等間隔で立っている、直方体の柱の陰に隠れるためだ。

初撃で死ななかった最大の要因は、やはりここが水中だからか。水の抵抗や海流などでほんのわずかに弾道に誤差が生まれる上、照準関係もクリアとはいかない。今時のライフルは複数のセンサーで補正されているものだが、そのセンサー系の赤外線などが海水の影響を受けるのである。

よって、すんでのところで弾丸はマリーディのすぐ近くを突き抜け、その間に彼女は直方体の柱の陰へと隠れる事に成功した。

しかし、いつまでも相手のミスに頼ってはいられない。

今の『失敗』を参考にセンサー系の修正をすれば、即座に完璧な命中精度が整えられる。

マリーディはわずかに直方体の柱から顔を出し、すぐに引っ込めて、

(有力選手に対する妨害……？　いや、連中の水中銃は『正統王国』のライフルの亜種だ。エリエ＝グリーンハットに介入した事への報復か!?)

身を丸めて直方体の柱を盾にするマリーディだが、こうしている今も海水を引き裂き、複数の弾丸が柱の左右を突き抜けていく。ただのボルトアクションでできる連射速度ではない。おそらく、数名の刺客が水中銃を手に発砲してきている。

まずい、とマリーディは思う。

彼女は酸素ボンベを持っていない。このままでは数分と息がもたないだろう。だが直方体の柱は高さが一メートルぐらいしかないため、海面に出ようとすれば途中で体をさらけ出す事になる。それを見逃すほど向こうも馬鹿ではないだろう。

もしも刺客達が勝利を焦らず、じっくり溺死するのを待つタイプだった場合、マリーディは手も足も出なくなる。

しかし。

運はマリーディに味方した。直方体の柱に銃弾を遮られた事に苛立った刺客の一人が、柱の向こうに回り込むために前へ出てきたのだ。

マリーディの持っているライフルが練習用のものである、という情報をどこかで摑んでいたからこその大胆な動きだったのだろう。

だが甘い。

（それならやりようはあるんだよ、馬鹿が!!）

柱を回り込もうとした黒い潜水服の刺客へ、マリーディの方から飛びかかった。片手でボルトアクションの水中銃の銃身を摑み、もう片方の手で刺客の肩に固定してあった鞘から刃渡り二〇センチほどのナイフを抜いて奪う。

潜水服の刺客がゴーグルの向こうの目を見開いた時には、すでにマリーディは奪ったナイフを刺客の顔面目がけて思い切り突き出している。

水の抵抗があるため、水平に振って切るより、真っ直ぐ突き出して刺す方が効果的なのだ。

「っ!?」

刺客はとっさに首を横に振って刃を回避したが、代わりに背負ったボンベから伸びるゴムチューブが切断された。マリーディはほとんど刺客に抱き着くような格好で、切れたチューブを口で咥える。久方ぶりの酸素を貪る。

彼女と引き換えに酸欠にあえぐのは、チューブから流れ込んだ海水でマスク内を満たされつつある刺客の方だ。

刺客は慌てて水中銃でマリーディを引き剝がそうとするが、

(ライフルの銃身を私が腋で抱えているんだ。当たる訳がないだろう)

何より、

(ナイフを持った人間がこの距離に接近している事を、もう少し正しく理解するべきだったな)

トスッ、という小さな音が響く。

刺客の胸に迷わずナイフを突き立てた音だ。

噴水のような出血はなく、海中に赤い靄のようなものが広がっていく。

完全に握力を失った刺客から水中銃をもぎ取ったマリーディだったが、そこで別の刺客が動いた。

一〇メートルの距離から、水中銃でこちらを狙ってくる。

「っ!!」

マリーディはすでに絶命した刺客を盾にしてやり過ごす。狙ってやったものではなく、とっさに体が動いただけだったが、どうやら盾として有効に機能はしたらしい。

（水の抵抗で貫通力が低くなるのを承知で、ライフル弾のくせにホロウポイントを採用した訳か。体の中に残る事でダメージを与える弾丸だったから、死体を貫通する事もなかったんだ）

しかし死体が背負っていたボンベに当たっていれば大爆発していたはずだ。そう考えると、やはり運に助けられた部分は大きい。

そこまで考えたマリーディは、

（……その弱点は私も利用できるよな）

コッキングレバーを引いて水中銃の機関部に銃弾を装填し、マリーディは死体に抱き着いたまま構える。血の赤が広がるのは邪魔だが、酸素の供給源がボンベから千切れたチューブしかないので我慢するしかない。

迷わず撃つ。

銃弾は刺客の一人が背負っているボンベに直撃した。

バム!!!!!!　という鈍い爆音が海中を伝播していく。背負っていた本人はもちろん、近くに固まっていた二、三人も巻き込まれて原形を失っていった。

それでも全滅には遠い。

さらに増援もあった。

透き通った海とはいえ、やはり一キロ向こうは見えない。その奥から浮かび上がるように、五、六人の潜水服の刺客達が泳いでくるのが分かる。その全員が水中銃を持っていた。

（くそっ!!　うちの護衛は何をやっているんだ!!）

死体を抱えたまま、マリーディは直方体の柱の陰へ再び隠れる。いい加減に邪魔なので穴だらけの潜水服を弄り回し、ボンベを留めている金具を取り外した。用済みの死体を放り捨て、マリーディは千切れたチューブから酸素を吸い込む。

（キラキラ光る海面を観察しているだけだから、中で何が起きているかは感知できないとでも言うつもりか、ちくしょう!!）

状況的に、マリーディが不利なのは変わらない。

今は直方体の柱に隠れているが、複数の刺客達が距離を取ったまま、全方位から柱を取り囲んでしまえば、後は水中銃の餌食になる。その過程で刺客達も何人かやられるはずだが、向こうが損耗を気にせず仕掛けてくれれば、マリーディはまず助からない。

（いっそ海面に向けて撃って、護衛連中に異常を知らせるか？　いや、ボルトアクションの水中銃は、一〇発も弾は入らない。あの平和ボケどもが水柱に気づかなければ寿命を縮めるだけだ）

敵を全員射殺する事より、まずは安全にこの場を離れるための努力に専念するべきだ。

それを具体的にどういう手順で行うかを考え始めた、その時だった。

ドガドガドガドガッ!!!!!!　と。

唐突に海面から降り注いだ大量の機関砲弾が、迫る『正統王国』兵をバラバラにした。

（なん、だ!?）

急速に赤い濁りが増して状況が摑みにくくなる。直方体のブロックの陰に身を隠しつつ必死に情報を取得しようとするマリーディは、真上から降り注ぐ日光が一瞬だけ遮られるのを感じた。

海中から頭上を見上げる。

全長二〇メートル程度のモーターボートが突っ切っていた。

一隻だけではない。

分かるだけで三隻はある。

ここからでは細部までは分からないが、モーターボートはほとんどウィリーするような格好で海面を移動しているようだ。水中翼船などにも言える事だが、基本的に船を速く動かしたいなら、とにかく水中に沈む体積を少なくするものだ。水の抵抗力さえなければ、船だって時速八〇〜一五〇キロぐらいは簡単に出せる。

再びモーターボートが海上を直進し、ボートの側面へ親指より大きな砲弾を連続して海中へ叩き込んでくる。

（『正統王国』の装備じゃない。オリンピアドーム側の無人兵器……UUVか!?）

だとすれば、千載一遇のチャンスだ。

いつまでも直方体の柱に隠れているだけでは『正統王国』の刺客に取り囲まれる。今の内にモーターボートの上に上がった方が良い。モーターボートが複数あるなら、援護射撃で足止めをしてもらい、その間にマリーディを乗せた一隻をさっさと岸に返す、といった方法も取れるはずだ。

「……、」

マリーディは直方体の柱から、わずかに顔を覗かせる。

UUVのモーターボートから攻撃を受けている『正統王国』の刺客達だが、まだ全滅した訳ではない。水面へ向かうのにはやはりリスクがつきまとう。

（だが水面に出ない限り、モーターボートに拾われる事もない。連中が態勢を整え直したら、ますますチャンスは失われる。泡を食っている今動くべきだ!!）

マリーディはそう判断し、一気に直方体の陰から真上へ飛び出す。体を大きく伸ばし、酸素ボンベを両手で抱え、両足の動きだけで海面を目指す。たった数メートルの距離が、マリーディの心臓を確実に締め付ける。

それでも水中銃で銃撃されずに済んだ。
マリーディはようやく海面に顔を覗かせる。
「ぷはっ!!　くそ……うちの護衛連中は全員減給だ!!」
悪態をつき、モーターボートへ片手を大きく振るマリーディ。UUVは無人兵器だが、それを操っている人間にはカメラ越しに合図が届くはずだ。
二隻あるモーターボートの内の一隻が、マリーディの目の前で大きく旋回した。
だが、
「っ!?　馬鹿野郎!!」
マリーディは叫び、思わず海中に頭を引っ込めた。直後に、モーターボートの甲板に設置されていた機関砲が爆音を発した。海面ではいくつもの水柱が上がり、マリーディのいる海中では気泡の尾を引きながら大量の砲弾が突っ切っていく。
再び酸素ボンベのチューブを口に咥え直すマリーディは、
（くっ、私も攻撃対象の仲間入りか!!　『情報同盟』のテレビ局が入っている事を見越して、とりあえず運営のオリンピアドーム側も治安維持はしてますよってアピールをしたかっただけか？　それで取材対象の選手を射殺したら元も子もないだろうに!!）
どこの誰にとって幸か不幸かは知らないが、キャットウォークTVの黄色い水中カメラはジャミングで使い物にならなくなっている。

UUVも遠隔操縦のはずだが、どうやら信号を送受信する仕組みが違うため、無事なのだろう。こうした事態に備えて複数の方式を使えるようにしてあるはずだ。

しかし、そのモーターボートが見境なしに砲弾をばら撒くようでは何の安心にもならない。

（これじゃ援護射撃もクソもない。ただ面倒なリスクが増えただけだ!!）

新たな気泡の尾が、海面から突っ込んできた。

数は五から一〇。

これまでの親指大の機関砲とも違う。消火器よりも大きな金属筒だった。その正体を知ったマリーディは、酸素ボンベを手放してでも両手で耳を覆った。

直後に爆発があった。

それは『正統王国』の刺客達を狙ったものだっただろうが、離れた所にいたマリーディの腹にまで重たい衝撃が伝播してきた。

その痛みで、マリーディは決断した。

（全部ぶっ壊してやる）

一度海底へ向かって泳ぎ、手放した酸素ボンベを回収したマリーディは、周囲を観察する。

マリーディは刺客から奪った水中銃を所持しているが、これでモーターボートを沈めるのは

難しいだろう。おそらく複合装甲の防護板で補強されている。刺客達も散発的に反撃しているようだが、そのたびに、逆に居場所を察知されて機関砲を撃ち込まれているらしい。

（もっと大きな爆発……そうか、こいつがあったな）

マリーディは自分の命を預けている酸素ボンベに目をやる。

先ほど、このボンベを爆発させて刺客を巻き込んだばかりである。これを使わない手はない。

（……とはいえ、こいつを手放すのは避けたいぞ）

そう判断したマリーディは、直方体の柱の陰に縛られず、海底を大きく進んだ。赤い濁りを発生させている刺客達の死体に取り付き、用済みとなった酸素ボンベを取り外す。

（酸素の塊なのに、勝手に浮かんでくれないのは不思議だな）

死体からツーピースのウェットスーツの上半身を脱がし、首元や手首などを縛って『大きな袋』を作ると、マリーディは酸素ボンベのチューブをその中にねじ込む。

『大きな袋』がパンパンに膨らむと、これまでとは違う浮力が発生した。

バルーンとボンベが海面へ移動していくのを確認してから、マリーディはその場を離れる。

海面を縦横無尽に突っ切っていくモーターボートがボンベの間近へやってきたのを確認し、水中銃でボンベの中央を貫いた。

バム!!!!!!　というくぐもった爆音が炸裂する。

船体がわずかに浮かびあがったが、

（駄目か！　船底に亀裂さえ入っていない……。やはり特化した爆薬を使わなくては必要な破壊力は得られない!!）

歯噛みするマリーディ。そうしている間にも、モーターボートは見当違いの海底へ大量の機関砲弾を撃ち込んでいる。

水中銃も酸素ボンベも、モーターボートを沈めるには至らない。

だが撃破しなければマリーディの命も危ない。

彼女は少し考え、再び海底を泳ぎ始める。目的はやはり、死亡した『正統王国』の刺客が未だに身に着けている酸素ボンベだ。

三本、四本とボンベをかき集め、それだけの人間が一方的に叩き潰されている（引き千切るや風穴を空けるといった表現はすでに適切ではない）事実をわずかに考え、なおもマリーディは生き残るために行動を続ける。

今度は機雷としては使わない。従って、水面に上げるためのバルーンのようなものは作らなかった。人工的なツルリとした海底へ、ボンベをゴロゴロと置いていく。設置が終わると、マリーディは十分な距離を稼ぐため、再び両足を大きく動かして海底付近を泳いでいく。

五〇メートルほど離れると、マリーディはチューブを咥えたまま水中銃を抱え、頭上を見上げる。

無人操縦のモーターボートは今も行き交っていた。撤退の構えを見せる『正統王国』の刺客

の背中にさえ、馬鹿みたいに大きな機関砲弾を叩き込んでいくのが分かる。

やめろ、とマリーディが叫ぶ事はなかった。

彼女自身、自分が生き残るために『刺客』の命を奪っている。モーターボートがズタズタにした『刺客』から奪った酸素ボンベを設置したばかりだ。

民間人と軍人の違い。

敵と味方の線引き。

それを自分の中で設定し、その設定に基づいて人命の平等さすら排除できるマリーディは、やはりスポーツマンシップを主張するアスリートとは人種が違うのだろう。

彼女は人工的な海底に腰を下ろすと、ボルトアクションの水中銃を両手で構え、コッキングレバーを引いて機関部へライフル弾を送り込む。

タイミングを待つ。

モーターボートの一隻が大きく旋回し、それからマリーディのいる方向へと突っ込んできた。機関砲で狙われている、という自覚がある。今から両手を振って自分の位置や所属をアピールしても無駄だろう。モーターボートは、とにかくこの場にいる全員の生命反応を消そうとしている。

だからマリーディ＝ホワイトウィッチは何も示さなかった。

警告さえ。

モーターボートが目的の圏内まで辿り着いたところで、彼女は迷わず水中銃を発射した。
海底に沈めた、大量の酸素ボンベに。
一発の弾丸はボンベに吸い込まれ、分厚い金属の外殻を破られたところで勢い良く爆発した。
一回の爆発が周囲のボンベを巻き込み、さらに大きな爆発へと膨れ上がっていく。
とはいえ、爆発が起きたのは海底だ。
海面の、それも船体のほとんどを海上へ押し上げてしまっているモーターボートには、爆風や衝撃波は届かない。
そしてマリーディの目的もそこではない。

狙ったのは、人工的な海底に収められていた可動式の防波堤。
固定具を破壊された強化ウレタンの分厚い壁は、自身の浮力によってトースターから飛び出す食パンのように真上へ突き出されていく。

突然海上に出現した厚さ三メートル、高さ一〇メートルの壁に、UUVのモーターボートは対処できなかった。慌てたように急旋回するが、船体の右側面から防波堤に衝突し、そのままバラバラに大破する。
連携を取って一方的な攻撃を行っていた他のモーターボートも、似たような末路を辿らされ

る。

浸水し、海底まで沈んできたモーターボートにマリーディは日をやる。無人操縦を補助するカメラのレンズに向けて中指で下品なジェスチャーを見せつける。

分厚い防波堤に遮られているため、『正統王国』側の『刺客』は撤退したのか、全滅したのかは分からなかった。ただ、しばらく周囲を観察し続けたが、新たな動きはない。どうやら脅威は消えたようだった。

マリーディは慎重に海面へ向かう。

やっと水の上へ顔を出して空気を吸い込んだ時、ジャミングが解除されている事に気づいた。最初に聞こえたのは護衛の声だった。

『通信は途絶されるしオリンピアドーム側のＵＵＶはビュンビュン突っ切っているしでどうした？　何かやらかしたか？』

「……平和ボケが。まぁ良い。代わりに運営側からの抗議の窓口はお前達に任せるよ」

敵軍 二

オリンピアドームの端にある民間ヘリコプター用の貸倉庫で、ラミール＝スコッフローは不自然に置かれたテレビを眺めていた。現在は部下の作業待ちで、やる事がないためである。

金髪の毛先をいじる褐色の指先の動きを見るだけでも、彼女が不機嫌なのは見て取れた。

当然テレビで流れているのはテクノピックの中継だが、選手達の活躍以上にスポンサー会社の広告名が毒々しく彩られ、叩き出した記録のすぐ横には賭け事の倍率が並べられている。いつ観ても胸糞悪い構成だ。競技という枠組みの中でしか活躍できないのがスポーツ選手の性ではあるが、それ以上に禍々しい物の中に生身の人間が組み込まれていく様子がありありと伝わる。

（……まるで、衣服を売るために着ている者まで販売するような冒瀆だ）

その時、部下のイリス＝アグラベーションから声をかけられた。

「出てきました。確かにシュートアスロン、日日で『資本企業』が『情報同盟』の選手を助けています。その後、『正統王国』は矛先を『資本企業』へ転換。おそらく報復行動だと思われ

ます」

「それで？」

ラミールは先を促す。

「二日目開始前に、『正統王国』から『資本企業』への攻撃を確認。ただしオリンピアドーム側のＵＵＶモーターボートが介入した事で、大きな被害は出ていません。その後、『正統王国』が『資本企業』へ継続的な攻撃の意思を維持し続けているかどうかは不明です」

「なら良い。非正規の襲撃に、停戦の宣言などする訳がない。つまり公式には『続行の可能性がある』だ。これを使って『空白化』を行うぞ」

空白化。

明確な作戦名をラミールは告げる。

わざわざエアコンもついていない倉庫に籠って作業を続けてきたのは、これの準備を行うためである。

ラミールが辺りへ目配せすると、作業服を着た整備兵が親指を立てた。

彼らが準備を整えているのは、『信心組織』製の無反動砲だ。肩で担いで砲弾を発射し、戦車などの装甲兵器を爆破するための兵器である。ただし弾頭は『正統王国』製のものが揃えられている。

元々、『信心組織』では戦場で鹵獲した兵器の再利用を盛り込む計画があった。

砲身はわざと他勢力と同じ口径に整えてあるし、若干の加工を施せば『正統王国』製の弾頭をそのまま使えるようになっているのだ。

『信心組織』カラーを隠す事が目的なのではない。

複数の勢力のカラーを混在させる事で、『真の襲撃勢力』がどこなのかを分からなくさせるための加工だった。

「念のため、装甲車や戦闘機なども外装を『正統王国』カラーに変更させているところです」

「『空白化』は手順の一つで、目的そのものではない。実際にこの時点でそれほど大きく展開する事はないだろう」

ラミールはイリスの後ろからコンピュータの画面を覗き込みつつ、こう尋ねる。

「移送ルートを確認しろ」

「『正統王国』に襲撃される可能性のある『資本企業』側の選手を絞りました」

地図上にいくつか追加されたラインを眺め、ラミールは口元を緩ませた。

「使えるな」

「ええ」

「では準備だ。この手順で『空白化』を行うには、最低でも無反動砲は二基、砲弾は二五発以上欲しい。さらに各々の無反動砲をサポートするために二人ずつ。そいつらに持たせるアサルトライフルや拳銃などの装備一式、全てカラーを混在させろ。『信心組織』のカラーも意図的

に混ぜろ。時間は長いように見えて、過ぎてからでは短く見える。夜明けまでに終わらせろ」

「了解しました」

「襲撃チームを編成したら、言語や指サインも複数混在させるように指示を出せ。翻訳ソフトなど使わなくても混乱するような馬鹿はいないと信じている」

一通り命令を飛ばすと、ラミールは貸倉庫の中にある冷蔵庫の中から、ぶどう酒の入った小さな瓶を取り出した。

キャップを外すと、誰にという事ではなく、何もない空間へ軽く瓶を当てるような仕草をしてから、彼女はアルコールを一口含む。

「祭典に栄光あれ」

第三話

1

午後八時。

シュートアスロン二日目を終え、マリーディは選手村という名のリゾートホテルのラウンジでくつろいでいた（ただしコーヒーとケーキは薬剤師のステイシーが用意したものだ）。向かいに座るアリシアは、表情を変えずにこんな事を質問してくる。

「あそこまでやる必要はあったのですか？」

「まだ言っているのか」

「運営のオリンピアドーム側から四三度目の抗議が来ています。我々は妨害行為を受けていたマリーディ＝ホワイトウィッチ選手を救援するためにＵＵＶモーターボートを送り込んだのに、何故（なぜ）あなたの方からＵＵＶを破壊したのか、といった内容です」

「選手の安全を守るために必要な自衛行動は認められていたはずだ。護衛であれ、選手本人の

行動であれな。そいつに抵触したＵＵＶの雑さが悪い」
「ＵＵＶモーターボートは一隻七〇万ドルするそうです。それを三隻。運営側はこの補塡に加え、撃沈時に利用した可動式防波堤の固定具の修理費用を請求してきています」
「悔しかったら保険に加入しろと伝えておけ。うちの航空ＰＭＣと提携している会社でも紹介してやったらどうだ？」
「……それは悪くない提案です。確か私の加入しているブルーエリア社は新規加入者の紹介で特典がついたはず」
冗談に真顔で応えたアリシアに、横から口を挟んだのはキャットウォークＴＶのディレクター、ルーカス＝ウェスタンローズだ。
「もしもし、ええ、邪魔が入ったのは残念です、はい」
彼は練習中、妨害電波によって全く使い物にならなかった黄色い潜水型カメラを膝の上に置き、軽く撫で回しながら、
「せっかくのエピソードでしたのに、ええ、ノイズが激しすぎて放映に足るものじゃありませんでしたからね、はい。記録がしっかりしていれば、はい、はい、ええ、競技中の映像と妨害時の映像を掛け合わせ、効果的なＢＧＭと共にお涙頂戴の番組編成に仕上げられたのに……」
「……襲われた事自体はチャンスに分類されるんだな」
「これでもドキュメント部門のはしくれですので、はい。ええ、何も起こらないでは番組の作

りようがありません、はい」

ルーカスの言葉を聞きながら、マリーディは面倒臭そうに首を横に振り、アリシアへと声をかけた。

話を本題に戻す。

「UUVはオマケだ。本命の襲撃者は一体何だった？」

「『正統王国』で決まりでしょう。あなたが用意した死体から指紋や血液など各種情報を採取しています。現在、これを基に会場内『正統王国』陣営の施設へ探りを入れている最中ですが、ほとんど確認作業に過ぎません」

警察の犯罪捜査ではないので、明確に個人を特定する必要はない。

ようは、『どこの勢力が敵なのか』を、大雑把な枠組みで理解できればそれで良いので、マリーディにそれほど緊張感はない。

彼女にしてみれば、元々敵対関係にあった人間を『明確に殺しても良いレベル』にクラスチェンジさせただけなのだから。

一度は『情報同盟』の敵対選手を助けたマリーディだが、だからと言って全ての選手全ての兵士を平等に救おうと思うほど聖女ぶったりはしない。

助けられる分は助ける。だが必要な分は殺す。

それがマリーディの本来の戦場である、北欧禁猟区の泥沼のセオリーである。

一方で、そんな強気なターゲット以上に疲労困憊しているのは護衛の男だった。
「まったく、君が一人で大暴れしてくれたせいで、本社の上司がひどくお怒りだ。高血圧が心配なレベルに達しているよ。せめてやり合うなら俺も招待してくれると助かるんだがな。それなら大義名分は守れたのに」
「自業自得だ」
「二日目で総合順位は三位に浮上したんだろう？　それも一位の後ろをピッタリついて回ってペースをかき乱して、翌日も残る筋肉疲労を与えまくる形で」
「はい、はい、正直、冷徹に競技展開をコントロールしすぎていて、はい、感動面が足りないと思うほどの好成績でした、はい。やはりスポーツの感動にはハプニングがなくては、はい」
「そんな上り調子なら、そのケーキ一口くらい分けてくれ」
「残念ながら、こいつはステイシーのヤツが持ってきたものだ。料金はチーム持ちだから、資金管理をしているアリシアに尋ねてくれ」
「……」
アリシアにジロリと睨まれ、護衛の男は軽く両手を挙げて首を横に振った。疲れているのに冗談の通じない女とやり合うつもりはないらしい。
プログラム女は気にせず、
「二日目までのスポンサー様からの評価は上々です。ウェスタンローズ氏の指摘した通り、多

少ドラマが足りない気もしますが、順当に好成績をキープするのが何より、との事で」

「……装甲車吹き飛ばしたり水中銃構えたフロッグマンの一団とやり合ったり、実際はドラマに事欠かない展開だったがな」

「カメラに映っていないもの、映せないものに関しては論じても仕方がありません。我々はあくまでも『実際にそこで起きた事』ではなく『宣伝広告に使える事』を提示するだけですから」

はい、はい、とルーカス＝ウェスタンローズもしきりに頷く。

映像が使えていれば数字は取れたと思っている分、未練が強く残っているのだろう。

マリーディが競技途中で死亡すれば、新型ライフルの広報を担当するアリシアもそれなりに困るはずだが、彼女は表情一つ変えない。

「明日の最終日は自転車です」

「今までに比べれば、一番簡単に思えるがな」

「もしもし、はい、競技用とはいえ、水着的な側面があっただけ、ええ、はい、観客の注目度も二日目の水泳がピークになっていたはずです、はい、はい。……ええ、まぁ、あなたは一貫してそのフライトジャケットですし、需要的なものも乏しいとは思われますが、はい」

「まだそのネタ引っ張り続ける気があるならそれなりの覚悟を決めてもらおうか！　しかも競技の総合結果が確定する決勝より水着の方が数字を取れるだなんて、ホントにショービジネスだなこの大会は!!」

「ええ、はい、我々も、最終種目は水泳にしましょうと打診はしているんですが、はい」
「自転車も簡単ではありません。何より第一に距離があります。一二〇キロほど走破する必要があるので、スタミナの消耗は激しくなります。これまでの筋肉疲労などが重なると、肉離れなどのリスクも出てくるでしょう」
　また、とアリシアは付け加え、
「メインとなる射撃が最も難しい事でも知られています。何しろ、自転車に乗ったまま両手で狙撃銃を構えて標的を狙わなくてはなりませんから」
「……実戦では完璧に必要のない技術だな」
「競技ですから」
　世界で一番つまらない返答で応じるアリシア。
　そういうエクササイズなのかと思ってしまうほど背筋をピンと伸ばしたまま、彼女はこう言った。
「ともあれ、明日でシュートアスロンも最終日です。スポーツマンシップなどどうでも良いので、スポンサー様から貸与していただいた新型ライフルの広告効果を達成するため、くれぐれも些細なミスで順位を落とさないようにしてください」

2

リゾートホテルの部屋に戻る前に、マリーディは薬剤師のステイシーのところへ向かった。マリーディの泊まる建物は『選手村』なので、それ以外のサポートメンバーは別のホテルを利用する事になる。一人の選手に対し、数十人の態勢で支えているのだから、当然と言えば当然なのだが。

小さな来客に、ミーハーなステイシーは顔を輝かせ、

「何よー。サインでもしにきてくれた？」

「おい、夜食とかないか。ホットドッグ程度のもので良い」

「あれー？　ついさっき晩ご飯食べたばかりじゃなかったっけ？」

「今じゃない。夜中に腹が減った時に叩き起こされたいか。一般の店で飲み食いするのは禁止なんだろう？」

「ふーん。育ち盛りじゃねー」

「……どこ見て言っている？」

「ただ狙った通りの場所に狙った通りの栄養が届けられるかにゃー？」

「だからどこ見て言っているんだ!!」

マリーディは激昂するが、ステイシーの方は気にしない。ホテルの部屋の奥に引っ込むと、備え付けのものとは違う、明らかに巨大すぎる冷蔵庫の中身を確認し始める。

「ホットドッグとかで良いんだっけ？」

「空腹で眠れなくなる事態を避けられれば良い。あまり量があってもな」

「睡眠薬をオススメする方が簡単なんだけど……ありゃ？」

冷蔵庫の中に首を突っ込んでゴソゴソと調べていたステイシーが、妙な声を上げた。

マリーディは眉をひそめ、

「どうした？」

「レタスがない」

「別になくても良いだろう。ホットドッグなんて、パンとソーセージがあれば」

「ノー!!」

とステイシーは夜の一〇時なのにスタジアム観戦並の絶叫を発した。

「レタスは重要よ。超重要！　パンとバターとソーセージだけじゃメチャクチャ脂っこくなるでしょう!!　そこにケチャップとマスタードを載せて御覧なさい。もうそんなのは食べ物じゃない!!」

「いや私がホットドッグに求めているのは大雑把な」

「水気のあるレタスがあってこそのホットドッグ!!　キャベツとかでも代用不可！　いけない、

これはチームの本拠地へ向かって備品を確保しなくてはならないわッッッ!!」

「もうソーセージだけくれよ!!　それで結構だから!!」

マリーディは絶叫したが、ステイシーは無視した。マリーディの手を掴み、半ば引きずる形でホテルの部屋を出る。

部屋の前の通路で待機していた護衛の男が尋ねてきた。

「どうなったんだ？」

「ステイシーの家庭的な趣味が判明したところだ、くそっ!!」

「……どうせなら俺の分も作ってほしいんだがな。夜間警備は腹が減るんだ」

ステイシーはそんな二人の会話など聞いていないので、今もマリーディを引っ張りながらホテル内を移動している。

どうやらホテルの地下スペースが各選手チームの備品を収める倉庫として貸し出されているらしい。そちらにも『資本企業』の警備用人員が配置されていた。

業務用冷蔵庫……というか、もはや小型の冷蔵室のようなスケールの設備の中をゴソゴソと漁り、目的のレタスを見つけると、ようやくステイシーの目の色が元に戻った。

「……ふっ。これで完璧なホットドッグを作れるわ」

「お前、もう最初の目的を忘れているだろう？」

呆れながらも、マリーディはエレベーターへ向かう。

ステイシーの部屋は二〇階だが、それより前の階でエレベーターが停まった。どうやらラウンジのある階のようだ。防弾ジャケットをまとった護衛の男がわずかに身構えるが、マリーディは襲撃の可能性は低いと考えていた。スケジュール外の行動の場合、待ち伏せをするための情報はほぼ得られないからだ。

が、開いたエレベーターのドアの向こうには、そんなマリーディの予想を覆す光景が広がっていた。

「だ・め・で・す・よう。テクノピックは様々な思惑や妨害があるんですからあ。私がしっかりエスコートして差し上げますう」

と、ニッコニコの笑顔でスポンサー会社の広報担当者の腕に絡み付いて体重を預けるアリシアがエレベーターに入ろうとしていたのだ。

その瞬間。

オブジェクトの運用を封じられ、今も泥沼の戦争を繰り返す北欧禁猟区で、敵兵の上へ馬乗りになって大きな石で頭を叩き潰した時も表情を変えなかったマリーディ＝ホワイトウィッチは、確かに頭の中が真っ白になるのを自覚した。

アリシアの方も、口をパクパクさせるマリーディと目が合い、それから護衛の男やステイシ

ーまでエレベーターに乗っているのを確認し、一瞬だが確実にその笑顔が凍りついた。
揺れ動くのはプライドかビジネスか。
だがアリシアは『資本企業』の人間らしく、あくまでも金を選択した。
誰も『閉じる』のボタンを押していないのに勝手に閉まろうとするエレベーターのドアを、アリシアはガッ!!　と掴んでもう一度開かせる。
その時には、彼女は完璧な笑顔を取り戻し、再びスポンサー会社の若い広報担当者へ理想の角度と力加減でしなだれかかっていた。
「バーだけじゃ飲み足りないんじゃありません？　私、こう見えてカクテルには多少詳しいので、もしよろしければお部屋でも作って差し上げられますけどお？」
「す、すまない。ちょっとすまない！　君、確か我が社の支援を受けているホワイトウィッチ選手でしたよね!?」
広報担当者はアリシアに体を摺り寄せられながらも、マリーディに声をかけてくる。
彼女は怪訝な顔で、
「何だ？」
「先ほどから二時間ほど褒め倒され続けているのだが、正直、自分の中のバランスが崩れそうで怖い。すまないがちょっと再調整のために罵ってくれませんか」
……何だ、黙っていれば美人のアリシアに密着される事自体はまんざらでもないのか、と思

ったマリーディは思い切り冷えきった視線を投げかけ、
「巨大な銃を摑んでいる女を見ないと勃起もできない○○の精神的×××野郎が。ジメジメした家に帰ってお人形でも舐め回してろ」
すると広報担当者は、エレベーターの隅に向かったまま屈み込んで小さくなってしまった。
「……すまない、そこまでは受け止められないんです」
「スポンサーからの依頼だからな。手を抜いても仕方がない」
「あらあ？　そういうのがお好みでしたら私も遠慮なく罵りまくりますけど？」
エレベーターは途中の階で停まり、アリシアと広報担当者は通路へ出ていく。と、ほんのわずかに彼女はエレベーターの方を振り返り、親指を使ってとてつもなく下品なジェスチャーを行ってマリーディ達を威嚇した。
扉が再び閉まると、エレベーターの中に気まずい沈黙が訪れた。
「……楽して儲けられる商売なんてないんだな」
『資本企業』の真理のようなものを、マリーディはポツリと呟いた。

3

翌日。マリーディ＝ホワイトウィッチはいつものようにハードロックを炸裂させる目覚まし

時計を拳で黙らせ、炭酸水を口に含み、ぬるめのシャワーを浴びて、ドライヤーと格闘する事を諦め、黄色と黒のフライトジャケットを身にまとうと、ドアの前の椅子とマガジンラックをどかして外へ出た。

やはりちっとも堪えていない表情で、護衛の男はこんな事を言う。

「いい加減に信頼の姿勢を見せてくれると仕事のやりがいも出るんだがね。もうすぐこの仕事も終わりだし、少しは良い思い出ができるとありがたい」

「ありがとうお兄ちゃんとでも言ってほしいのか変態め」

「ッ!?」

「……おい」

「い、いや、何でもないぞ。ともあれこっちは仕事をするだけだ。残りの日程も安心して背中を預けてくれ」

「……何だ。第六感が身の危険を訴えているんだが……」

マリーディは適当に言いながら、通路の左右を見渡した。

「……今日の朝食もステイシー製だろう？　ここで待っていれば良いのか？」

「栄養ブロックで良いならここにあるぞ」

「腹は溜まらないのに栄養だけ摂取するって、損した気分にならないか？　まして、戦場でもない、そこらじゅうに食糧の溢れた『安全国』で」

「ま、軍のレーションよりはマシな味付けさ。あと、オリンピアドームを『安全国』と呼ぶのはいささか抵抗があるね」

「寝坊したー」

と呟きながらやってきたのは、ルームサービス用のワゴンを押しているステイシーだ。見れば、あちこちに寝癖が立っている。

「という訳で今日の朝食はトーストとサラダを中心にしたちょーテキトーメニューでーす。だが必須栄養素は無理矢理確保してあるから安心せよ」

「……無理矢理という点が気になるな……」

「ふむ。俺は市販の栄養ブロックに感謝しておくよ」

護衛の男に摑みかかって栄養ブロックを奪い取ろうとするマリーディの首根っこを、さらに薬剤師のステイシーが笑顔で鷲摑みにする。

諦めたマリーディは、せめてもの抵抗でステイシーを軽く睨む。

「最低限、何を混ぜたかだけでも言え」

「んんむ、お嬢ちゃんはアスコルビン酸って言って分かるかなー？」

「ううっ!?」

怯むところを見ると、マリーディの博識はやはり戦争関連に尖っているようだ。

ステイシーは笑いながら、

「あはは、単なるビタミンCよ。説明義務なんて言葉の選び方次第でいくらでも印象を変えられるものなの」

そんな風にマリーディが翻弄されていると、エレベーターホールの方からアリシアが歩いてきた。

昨日のあれの後である。

その場の全員がアリシアからのコメントに密かな注目を集めていたのだが、

「おはようございます。本日のスケジュールを確認させていただいてもよろしいでしょうか」

「そのまんまかよ!!」

「……ま、つまらない女に可愛げを期待する方が間違っていたか」

「うーん、アリシアちゃんは順調に婚期を逃がしているわねえ」

各々、散々な感想を漏らしたが、アリシアの直立不動は崩れなかった。

4

一通り朝食を食べ終えると、マリーディは日玉焼きのような形のオリンピアドームの外周部分を散歩する。観光名所の一つである、七本の橋が架かったビフレストアーチの歩行者用スペースまで彼女は歩いていった。

主立った競技が始まる前だからか、こんな時間でも観光客達は競技場ではなく、土産物屋などに散らばっていた。ヘリウムの入った風船を振り回す子供や、団体競技のユニフォームらしきTシャツを買い込んでいるカップルなどが行き交っている。マリーディの方にカメラを向けている若者は、シュートアスロン関係の競技を楽しみにしていたのかもしれない。単なる変態ではない事を祈るばかりだ。

「観光地を巡るような人間とは思っていなかったんだけどな」

護衛の男がそんな事を言うが、マリーディは気に留めなかった。

「何が楽しいのかを知っておきたかった」

彼女は手すりの向こうに広がる、キラキラと光る運河を眺めながら素直に答えた。

「何かのサービスがある訳でもない、ただの場所だ。そこへ行くために金を払ってまでやってくる連中がいる。私はそういった金の動きによって発生する戦争に参加し、北欧禁猟区で殺し合っていた。多分、オリンピアドームにかき集められる金の総額は、北欧禁猟区の経済活動全体よりも多いだろう。この場所というヤツにどれほどの価値があるか、目で見ておきたかったのさ」

「答えは見つかったかね」

「私とは違う価値観があるんだろうなという事が分かったぐらいだ」

マリーディの目には、特に感慨は浮かんでいなかった。

それでいて、理解不能なものに対する嫌悪感のようなものもなかった。
興味が湧かない。
感情の起伏の少ない瞳の色には、そんな意見が込められていた。
「この一部分として、選手の自分が組み込まれているという事実には多少の違和感がある。価値観を分かっていない自分が、経済活動の一部分を担ってしまって良いのだろうか、とな。だが現に私の活躍で視聴率は変動し、放映権を巡る交渉は激化しているのだろう。ここは種類が違うだけで、やはり経済活動を主軸とした戦場だ。だったら少しでも大会の本質を理解して、真剣に取り組むべきだという意識がないと言えば嘘になる」
真面目くさった顔で言うマリーディ。
彼女の言い分は、戦う相手は完璧に叩き潰すが、一〇〇%の全力で叩き潰す事が敗者に対する礼儀だとでも言っているようなものだった。
以前、このビフレストアーチで薬剤師のステイシーは『あのぐらいの年頃だもの』と揶揄していた。
護衛の男も、偶然にも同じ意見を頭に思い浮かべる。
（……競技選手の商品価値なんて選手の切り取り方一つで変わる訳で、実際にはグラビアアイドルのイメージビデオと似たような視点でカメラを向けている業者もある訳だし、そういう撮影法を意識したユニフォームの意匠も珍しくないのだが……この年頃の潔癖症には言わぬが華

だな）

それをひっそりと胸にしまえるのが大人だ、という言い訳で弱い自分を丸め込めるのが本当の大人だ、と二段構えで達観したふりをする護衛の男は口には出さない。

面倒事の解決を請け負う護衛ＰＭＣだが、わざわざ面倒事を起こす主義ではないのだ。

5

一通り自由時間を消化したマリーディは、『選手村』のリゾートホテルの外へ出た。目的はシュートアスロン三日目に使う、競技用自転車の調整である。

ただし、

「……今回のキャットウォークＴＶはえらく重装備だな。私よりそっちの方が目立ちそうだぞ」

「ええ、はい、はい。前回は妨害電波にやられて貴重な素材を撮り逃しましたからね。ええ、今回はその辺りも踏まえて完璧にしたいと思っているんです、はい」

戦車でも撃ち抜けそうな大型機材を肩で担ぐ複数のカメラマン達に身振りで指示を出しながら、ルーカス＝ウェスタンローズはそんな事を言う。

一見すると仕事熱心でさわやかな言葉に聞こえなくもないのだが、

「私が撃たれる瞬間をそんなに撮りたい訳か？」

「もしもし、ライオンを撮るために芸人を餌にするほど不謹慎じゃありませんよ。ええ、ただしギリギリ喰われそうだというラインを維持しないと番組になりませんが、ええ、はい」

そんなやり取りを容赦なくスッパリ切り、アリシアが携帯端末を操作しながら機械のように言った。

「基本的にはロードレース用の自転車を利用します。センサーやジャイロなどの電子機器の接続はNG。ただし手動操作のウェイトについては許可が下りていますので、普通の自転車と比べればかなり転倒する可能性は低いものと思われます」

マリーディはハンドルのグリップがJの字に曲がった、前傾姿勢を基本とする特殊な形状の自転車をしげしげと見回す。

「ギヤについては後輪に七段、ペダル軸に五段の計三五段編成となります。ただし極端なギヤチェンジを短時間で繰り返すと、チェーンそのものが外れるリスクが生じます。限界値については肌で覚えてください」

「オーケー。練習期間にわざと失敗しろって事だろう？」

マリーディは右足を大きく上げて後輪の上を通し、自転車のフレームをまたいでいく。

「派手にやるが、こいつについてもスポンサーがついているのか？」

「出資は受けていますが、ランクは低めです。あなたのフライトジャケットに記載されているスポンサー名のサイズがそのまま優先度になっていますので目安にどうぞ。無理して自転車の

性能をアピールする必要はありませんので、新型ライフルの方にだけ集中していただければ結構です」

「……結局、顔色を窺う必要はあるんだな」

うんざりしたように呟きながら、マリーディは一万ドル以上する高級な自転車のペダルを漕ぎ始める。

電動の一輪車のような物に乗ったキャットウォークTVのカメラマンは、マリーディの後についてきながら、その様子を撮影していく。

場所はオリンピアドームの、ドーム状施設のすぐ外側。大きな円状のサイクリングコースだ。多くの利権が交差し、代理戦争というきな臭い側面まで持つテクノピックの会場だが、体を包む潮風だけは事情に拘わらず心地良い。

（くそー……。もうこのまま逃げてしまおうかなー……）

指名手配にされかねないような事を少々真剣に検討し始めていたマリーディだったが、やはり現実的ではないと引き返す程度の常識は残っていたらしい。ガチャガチャとギヤチェンジを繰り返してわざとチェーンを外したり、チェーンの迅速な修理手順を確認したり、両手放しでライフルを構えるジェスチャーをしながら自転車を漕いだりと、競技に必要な情報を実地で学んでいく。これにどんなナレーションをつければ換金性のある番組映像になるんだ？　と自分で疑問に思ってしまうほど退屈な作業である。

ゴルフ用のカートにも似た電動マシンを併走させる、護衛の男が尋ねてくる。
「調子はどうだ？」
「えらく格好悪い乗り物を乗り回しているものだな」
「サイクリングコースだからな。使える車種も限られている。それとも二人乗りでもしてくれるのか？」
「……ロードレース用の自転車だから荷台はないぞ。後輪に股間をすり潰されたいなら止めないがな」
「自転車を漕ぎながらの狙撃という事だが、正直どうだ？　俺にはサッパリ感覚が想像できん」
「スコープを覗きながらだと、バランスを取るのに手間取りそうだ」
「まぁ、人間は視覚でバランスの補正をするものだからな。普通の片足立ちと目を閉じて行うのとでは難易度が変わるのと同じか」
「分かったような事を言うなよ。目を閉じるのは情報がなくなるだけだ。だがスコープを覗くと、別の情報が流れ込んでくる。進行方向の側面にあるターゲットを狙いながら自転車を漕ぐとなると、相当面倒臭い事になりそうだ」
「……ま、苦労するのは俺じゃないからな」
銃があったら撃っているレベルの他人事台詞だったが、生憎とマリーディの手元には火器がない。

シャカシャカとペダルを漕ぎ続けるマリーディに、耳の圧電受話器からアリシアの言葉が届けられた。

『シュートアスロン最終日は、午後二時から行われます。直射日光の一番強い時間帯ですね。気をつけてください』

「UVケアでもしろって言うのか？」

『スタミナの問題ですよ』

アリシアに言われ、マリーディは鼻で笑った。

整えられたサイクリングコースを、自転車で二〇キロ。オブジェクトに守られた『安全国』では重労働に入るのだろうか。

そういった安全を保障されていない北欧禁猟区では、未舗装の山道を二〇〇キロ以上徒歩で走破しろと言われる事も珍しくないのに。

通信と違ってその表情が見える護衛の男は、マリーディの顔を見てこう言った。

「余裕だな」

彼女の顔色が魅力的にでも見えたのか、キャットウォークTVのカメラレンズが軋んだ音を立てて拡縮する。

マリーディは無視して答える。

「単なるスペックに不安材料はない。懸念があるとすれば、競技中の妨害行為ぐらいさ」

「始まってしまえば、大規模な妨害は起こらないものだよ。やるのは簡単だが、多数のカメラで中継されている中でボロを出してしまえば国際的な恥になる。しかも、妨害する側も自分達の選手には好成績を出してほしいはずだ。あまりにもやりすぎて競技そのものが中止になってしまえばどうしようもない」

護衛の男はカートのハンドルを片手で操りながら、口笛でも吹きそうな気軽さで言う。

「シュートアスロンは今日で終わりだ。妨害する側としては結果が出る前に手を出さなければ意味がない。しかも競技中にはなかなか手が出せない」

「つまり？」

「危ないのは今だ。この地点さえ無事に乗り切れれば、もうリスクはほとんどなくなったも同然さ」

その言葉を待っていたかのように、大型カメラがぐっと近づいてきた。

6

そして、非正規の妨害さえなければ結果は火を見るより明らかだった。

表彰式を通り一遍終え、純金のメダルと地球儀を模したトロフィーを入手したマリーディは、しばらくカメラとマイクの前に立たされた。そういう面倒臭いのはアリシアに食い止めてもら

おうかと思ったが、直立不動の女は『何のための大会ですか。死ぬほど新型ライフルの宣伝を行ってください』と言って立ち去ってしまったのだ。

おかげで競技そのものより猛烈な疲労感に襲われたマリーディは、ストロボの連射にすっかりやられた目を擦りながら、移送用のオフロードカーの後部座席へと乗り込んだ。

マリーディは重たいトロフィーを隣に座る護衛の男へ押し付け、耳につけたままの圧電受話器へ話しかける。

相手は一足先にホテルへ帰ったアリシアだ。

「これで満足か？」

『ええ。シュートアスロン女子、総合で一位。悪くない展開です』

「そこはご苦労様と言うべき場面だろう」

『まだ尚早かと。あなたには専門誌の広告を作るための写真撮影、ミリタリー系ウェブサイト用のインタビュー、選手団の中でのメダル獲得者を集合させた懇談会など、様々なところでにこやかに微笑んでもらう必要がありますので。ええ、とにかく三分に一度はスポンサー様の社名を出していただき、常にカメラのフレームに新型ライフルが映るように気を配ってください』

「やれやれ。顔面の筋肉を鍛える訓練はＰＭＣでも学んでこなかったな。明日は筋肉痛が心配だ」

そんなこんなで、マリーディを乗せたオフロードカーが発進する。

一台だけではない。合計六台並べた車列である。ルーフから上半身を出し、備え付けの軽機関銃を摑んでいる兵士などを見ると、とても平和の祭典の選手が移動しているようには見えない。

車内の容積的に大型カメラを持ち込めないキャットウォークTV側は、ディレクターのルーカス＝ウェスタンローズ自身が小型のCCDを構えてマリーディの横顔を撮影していた。

後部座席にいる護衛の男は、マリーディから放り投げられた、地球儀を模したトロフィーをいじくり回しながらこんな事を言ってくる。

「これで当面の安全は確保できたようなものだな」

「ええ、はい、はい、尺を埋めるための貧乏くじかと諦めていましたが、ええ、はい、まさかここまでやってくれるとは！　事前に『情報同盟』のエリエ＝グリーンハット選手を救出している事もあり、ええ、視聴者からの感触もかなりのものですよ、はい!!」

腕を組んだマリーディは護衛の男をジロリと見ながら、

「……まだ契約期間内だ。油断はするなよ」

「もちろんベストは尽くすが、シュートアスロンの結果は出た。今から妨害をしたって誰も得はしない。だから妨害を行う者は出てこない。十中八九、もう護衛任務は終わったも同然さ」

「競技は終わり、か」

マリーディは窓の外の風景を眺めながら、そんな事を呟く。

護衛の男はニヤリと笑い、
「離れるのが寂しくなったか？」
「休暇の残り日数を数えて哀しくなったんだ」
「少なくとも、閉会式まではオリンピアドームにいるんだろう。だったらそれまでは純粋なバカンスだ。せいぜい美味いものでも食べて日光浴でも楽しんでいる事だ。競技が終わった今ならステイシー嬢の食事制限もなくなるだろうし、どうせ経費は全てスポンサーが持ってくれるはずだ。金メダルで向こうも相当浮かれているだろうしな」
「……世界三大珍味でも一度に制覇してみるかな」
「高いからそれだけで珍味は美味いと思っている時点で、意外と子供だなエースパイロット」
「もしもし、今のはいただきです、はい。完璧人間と意外な天然の組み合わせは高得点ですから、ええ、はい、はい」
「泥沼に慣れているから、贅沢の仕方に心当たりがないだけさ」
適当な調子でマリーディは答えた。
まぁ、金メダルを獲った以上、残りの日程は英雄としてちやほやされるだろう。必要以上に注目を浴びるのは気疲れするが、特に愛想やチップがなくてもサービスを提供してくれると考えれば、悪い事ばかりではない。
（……カメラのフレームの中で、ズリネタ以上の偶像化を施された『好感度』マスコットにさ

れているんだ。せめてそれぐらいの恩恵はなくてはな）

マリーディは両手を上げて背筋を伸ばし、

「それじゃまあ、とりあえず『選手村』に着いたらレストランでも見て回るか」

「それだけの元気があれば健康面も問題なさそうだな」

「……どうせ全部スポンサーの経費持ちなら、カジノとか探した方が良いかもな」

「ルーレットなら俺を呼べ。取り分一割で幸運を授けてやるぜ」

なんだかんだで『資本企業』の人間らしく、少々真剣な眼光で視線のやり取りを交わす二人。

んー、カジノの内部は撮影制限があるんですけど、もしもしー……と呻いているルーカス＝ウエスタンローズの事など気にしていない。

後は財布の紐を握っているアリシアをどうかわすかだ、と具体的な作戦の説明に入ろうとしたところで、異変があった。

ゴッ!!!!!　と。

車列を構成するオフロードカーの内、マリーディの目の前の車両が横殴りに吹き飛ばされたのだ。

まず最初にオレンジ色の光が彼女の目に焼き付いた。

直後に巻き起こった爆発音が、防弾加工が施されているはずのフロントガラスに無数の亀裂を走らせる。胸に受けた圧迫感に、彼女の呼吸がわずかに止まった。

爆発した前方のオフロードカーは、そのまま横転して道路脇のヤシの木へ激突する。

自分の乗るオフロードカーが急停止した事に、体の感覚が追い着かなかった。

あれだけ刺激を欲していたはずのルーカス＝ウェスタンローズは、いざ実際に『自分がその場にいて、いつでも巻き込まれる状況』に陥った途端、すっかり泡を食ってカメラを落としてしまっていた。

マリーディはただ目の前で起きた……いや現在進行形で起きている現象を口に出す。

「無反動砲!?　襲撃か!!」

護衛の男は片手でマリーディの口を制し、無線に向けて強い口調で話しかける。

「セカンドはやられた。ファースト、サードは襲撃位置を割り出して弾幕を張れ！　フォース、フィフスは俺の乗るゼロを挟んでこの場を離れる!!　聞こえるか、ファースト、サード!?　くそっ!!」

続けて細い発射煙が空気を一直線に切り裂き、先頭の車両の側面へと突き刺さった。禍々しい爆炎と共に、オフロードカーのフレームと人命が散っていく。

マリーディは即決した。

「降りるぞ」

「正気か？　今乗っているのはこう見えて最低限の防弾加工ぐらい施されている。外へ飛び出すのがどれだけ危険かは北欧禁猟区の泥沼を経験している君なら分かると思うが!?」
「その防弾加工で対戦車用の無反動砲を防げるか!?　中途半端な盾なんてただの拘束具だ。おまけに向こうはターゲットの私が乗っている車両を探ろうとしている。このままだと先制攻撃で混乱に陥ったお前の部下は全員やられるぞ!!」
「お涙頂戴でありがたいがね、給金をいただいたのにターゲットを囮に使って逃げ切りましたなんて話になってみろ。それこそ生き恥だ」
「職務全うの精神には頭が下がるが、そのこだわりに民間人の命まで巻き込むのはいただけないな。他人の不幸に舌なめずりするようなヤツだが、キャットウォークＴＶの男は一応『安全国』の人間だぞ。私が外へ出なければ全ての車両が爆破される。この車も例外じゃない！」
「生憎と、俺達の仕事は君の命を料金分だけ守る事だ。プロアマの線引きで方針に揺さぶりをかけたいなら諦めた方が良い」
「そうか」
マリーディは拳銃の安全装置を外しながら、
「なら私が勝手にやらせてもらう。護衛部隊は最善の行動を取ったが、ターゲットが余計なパニックを起こしたせいで失敗した事にすれば良い」
「くそっ!?　またか、いつの間にホルスターから盗みやがった!?」

護衛の男を無視してマリーディは防弾の扉を開けた。身を低くし、単独で車両団から素早く離れていく。

即座に反応があった。

無反動砲の発射煙は今も空中に漂っているが、その根本の辺りの茂みからアサルトライフルを構えた男が顔を覗かせた。だが発砲される前にマリーディは拳銃を立て続けに連射していく。

「撃ったら離れるが基本だ、馬鹿」

複数の物陰で何かが動く気配があった。マリーディはそれが具体的な凶弾を生む前に、急いで手近なビルへと飛び込んでいく。

この拳銃だけで全員を倒せるとは思っていない。

選択肢は二つ。

敵を倒す事に拘らず、逃走に徹するか。

どこかでもっと火力の高い武器を手に入れ、反撃に移るか。

……面倒なのは、この選択がマリーディ自身の行動によって選べる類のものではないという点だ。『島国』と違って民間人も銃の所持が認められているため難易度は決して高くはないが、この周辺に銃がなければ、そもそもどうにもならない。

その時だった。

バカバカバカッッッ!!　と太い射撃音の連続が、マリーディの耳を叩いた。襲撃者側が軽機

関銃でも持ち出したかと思ったが、実際には違った。

マリーディを追うため、護衛の男がオフロードカーを降りてこちらへ走ってきたのだ。ルーフに取り付けられていた軽機関銃を取り外し、腰だめで連射する事で襲撃者を牽制しながら移動していたのである。

ビルの入り口へと飛び込んできた護衛の男は、自分が肩に下げていたアサルトライフルをマリーディへ放り投げながら顔の汗を拭う。

「方針には従う。チップは弾んでくれよ」

「……こんな時まで稼ぐ気か」

うんざりしたようにマリーディは言って、黄色と黒のぴったりとしたフライトジャケットのファスナーを引き下げて白い肌をさらし、ジャケットの内側へ手を伸ばす。基本的にカードか電子マネーしか使わないマリーディだが、例外的にチップ用の小銭入れだけは常備していた。『資本企業』では、チップを出さない客には店の出口も教えてもらえないというのが一般常識だった。

ところが、護衛の男は軽く首を横に振ると、

「正直こいつは通常営業の外だ。小銭程度で納得するほど甘い環境じゃないぞ」

「なら何が欲しいんだ」

「魔法の呪文を頼む」

「？」

「チチンプイプイみたいなものだ。起動用のパスワードと思ってもらえれば良い」

護衛の男に魔法の呪文を耳打ちされ、マリーディはますます怪訝な顔になった。

が、ここで拘泥していると襲撃者に取り囲まれかねない。

彼女は右手を軽く握ってグーを作ると、それを口元へ寄せ、上目遣いで護衛の男を見上げながら、か細い声でこう告げた。

「……お兄ちゃんは、最後まで私の味方でいてくれるよね……？」

「がってん。地獄に片足突っ込むぜ……!!」

マリーディは小さく息を吐くと地声に戻って、

「はあ。ここに来てまさかの変態かよ」

「いや、そうではなくてな。実を言うと俺には歳の離れた妹がいるんだが、両親の離婚のせいで離れ離れになったというか、どことなく君と面影が似ているというかなのだよ」

「……変態とは違う種類で難儀だな。正直コメントに困るぞ……」

ともあれ、やる気は注入されたようなので、ここから先は馬車馬のように働いてもらおう、とマリーディは適当に考える。

「それより、お前の部下はどうなった？」

「弾幕ばら撒いて時間を稼ぎつつ後退しろと伝えてある。後はヤツらの運と実力次第だ」

冷たいようだが、戦場に根性論は通じない。各々の判断で勝手に下がれと命令されただけ、不利な状況に立たされた部下達には救いがあっただろう。そのチャンスを活かせるかどうかは、文字通り運と実力次第なのだ。

「キャットウォークＴＶの男は？」

「ウチの部下は意外とカスタマーサービスの精神に優れているらしい。もちろん有料だがね」

「……あの爆破の中でキャッチセールスでもやったのか？」

「こんな状況じゃないと稼げない商売だからな」

護衛の男は入り口から外へ軽機関銃を短く連射しながらも、

「それより問題なのは君だ。そもそもどういう事なんだ。競技はすでに終わっている。今から君を妨害したところで、順位が変わる訳ではないはずだ」

すると、マリーディの耳につけた圧電受話器から聞き慣れた声が飛んできた。

一足先にホテルへ帰ってしまったアリシアのものだ。

『情報は聞いています。使用している兵器や突撃の手順などから、襲撃者の素性は摑めましたか？』

「無反動砲は『正統王国』ベースのように見えた。だが『信心組織』辺りなら鹵獲兵器の流用を前提に火器を設計しているから信用はできない。確か『正統王国』と口径をわざと合わせた対戦車兵器もあったはずだ」

『「正統王国」なのですか？　「信心組織」なのですか？』

「それが分からないと言っているんだ！　逆に『信心組織』の兵器を使った『正統王国』だという可能性もある!!」

『……それでは割り出しは難しそうですね』

「何故私がこのタイミングで狙われる？　すでに競技の結果は出ているはずだろう！」

『そちらについては、ある程度の推測でしたら』

向こうにも銃声や爆音は聞こえているはずなのに、アリシアは完璧に他人事の調子で受け答えを続ける。

『基本的にシュートアスロンは総合得点が出てしまえば結果は覆りませんが、いくつかの例外があります。競技後のドーピング検査の結果であったり、授賞式で侮辱的な言動を取ったり、といったものですが』

「メダルの、はく奪？」

『実際にそれが可能かどうかは不明ですが、いちかばちかで狙ってくる馬鹿が出てくる可能性までは否定できません。あなたをさらってカメラの前で拷問にかけて無様な命乞いを世界中に公開する、とか』

「……マジか」

『まぁ実際にそれではく奪があるとは思えませんが、万に一つという事もあります。ですから

捕まったりしないでください。命乞いとか勘弁してください。せめて国家の代表らしく雄々しく散ってください。それで最低限、競技の結果だけは保持されます。間違ってスポンサー名や新型ライフルを表に出した場合、我々はあなたの臓器や遺伝情報をくり抜いてでもその損失分を補塡させていただきます』

「ふざけやがって!!　どこまでイカれた大会なんだ！　これなら北欧禁猟区の泥沼の中に身を投じていた方がまだマシだ!!」

「どうするんだ？」

護衛の男が軽機関銃のボックスマガジンを交換しながら尋ねてくる。

マリーディは険しい顔で周囲を見回しながら、

「……妨害が競技中だけなら、その日数を凌げば良いと思っていた。だが競技後のメダルはく奪が狙いなら、この先何ヶ月リスクが生じ続けるか分かったものではない。だからリスクが見える内に潰しておく」

「率直に言ってさっさと逃げたいというのが俺の本音だが、まぁ契約期間中なら無茶ぶりにも付き合おう」

ふっ、とマリーディは小さく笑って、アサルトライフルのコッキングレバーを引く。

「まぁ、せっかく武器が手に入ったんだ。となれば、ここの選択は片方へ寄るべきだろう」

7

さて。

追う者と追われる者は、果たしてどちらが有利だろうか？

答えを言わせてもらえば、この時点では五分五分。どちらが有利でどちらが不利かなど決められるものではない。

では、それを左右するのはどの時点か。

これについては簡単。

相手側の動きを読めているか読めていないか、といった点だ。

マリーディと護衛の男は、ビルの中にある地下へ繋がる階段を駆け下りながら言葉を交わす。

「周辺の図面は呼び出せるか!?」

「今まさにその電波が届かなくなる地下へ向かっている最中だ」

護衛の男は携帯端末を片手で操作しながら、

「だが巨大人工浮揚島であるオリンピアドームは、地表部分の下に大規模な地下構造……いや厳密には内部構造を有し、水道やネット網などのインフラを集中させている。中は相当入り組んでいるし、壁は銃弾の遮蔽物になる程度の強度を持っているはずだ」

護衛の男はマリーディに携帯端末の画面を見せた。
かろうじて、電波が届かなくなる前に図面はダウンロードできたようだ。
マリーディは眉間に皺を寄せ、
「出入り口」
「まぁ基本だな」
マリーディ達は自分達が通ってきた出入り口から直線の通路を通り、角を曲がったところで立ち止まった。最低限だけ体を通路に出すと、銃口を出入り口の方へ向ける。
追っ手の襲撃者が階段を下りてきたのを見計らって、一気に火力を集中させた。
相手が泡を食って後退したところで、マリーディ達は深追いせずにさっさと通路の奥へと移動していく。
次の角。
また次の角。
そのまた次の角……と見せかけてそこには爆発物。
相手がこちらを追うために絶対必要な通路でのみマリーディ達は待ち伏せし、散発的な銃撃で襲撃者の数を確実に減らしていく。向こうがパターンを読み始めたタイミングでトラップを設置し、襲撃者側の『勘』をその都度鈍らせていくのも忘れない。
慌てず後退を続けながら、護衛の男は尋ねてくる。

「どう思う？」

「『信心組織』」

「使っているライフルの弾丸は『正統王国』っぽいが？」

「連中は基本的に暗闇で光は出さない。攻撃的にライトを使い、こちらの目を潰してくるのは『信心組織』のやり方だ」

銃器やゴーグルなどのセンサー類の発達したこの時代なら、懐中電灯はもはや必要ない。それでもわざわざ好んで利用するのは、『闇を拭う』というより『強力な光で目を潰す』意味の方が強い。

護衛の男はやや感心したようにマリーディへ目をやり、

「連中、いつ気づくかね？」

「自分達が追い詰めている側だという意識が働いている内は、反撃を受ければ受けるほど頭に血が上る。ようは、焚き火に枝を放り続ければ、後は無限に時間を引き延ばせるさ」

だからこそ、マリーディ達は『下がり続ける』のだ。

クレーンゲームでひたすら硬貨を投入し続けるのと同じように、カジノでポーカーをやめられないのと同じように。

あと少し、もう少しで目的に届くと思わせる事ができれば、相手はいくらでも浪費を続ける。財布の中身がなくなるまで、その間違いには気づけない。

なまじ、小さな損害が繰り返されるからこそ、元を取りたいという気持ちが強く働く。
「結局、どれだけ訓練を積んだって人間は人間だ」
「何だ。もう終わりか」
通路の角から、最後の数人へ軽機関銃を向ける護衛の男。
マリーディはそれをジェスチャーで制し、白分のアサルトライフルで通路の向こうへ発砲した。
これまでとは『法則』が違う。
一人を残して他のメンバーを派手に吹き飛ばし、さらに生き残りの一人のすぐ近くの壁へ弾丸を当て、オレンジ色の火花を散らせる。
明確に『恐怖』を与えるアクション。
泡を食って、今度こそ完璧な逃走を始めてしまった『信心組織』の襲撃者を眺め、護衛の男は戸惑ったような声を出した。
「良かったのか？　全滅させないと襲撃のリスクに脅えて暮らす事になるぞ」
「だからそのための対策だ」
マリーディは慎重に通路の向こうを観察しながら、
「襲撃している組織の規模が見えない。他にも部隊をいくつも擁していたら、この一団だけを皆殺しにしても脅威はなくならない。だから一人だけ逃がしたのさ。……連中の本拠地へ案

内してもらうためにな」

やれやれ、と護衛の男は首を横に振った。

民間人や護衛部隊の中から犠牲を出さないために自ら銃弾の前に体をさらすほどの行動を取っておきながら、同時に敵とみなした者を叩き潰す事には全く容赦をしない。血を好んでいるのか嫌っているのかも判断できない有り様だ。

マリーディはジロリと護衛の男へ目をやり、

「それより気をつけろ。逃げる襲撃者を追うって事は、今まで私達が仕掛けてきた通路を引き返す事を意味している。つまらない意趣返しを喰らいたくないだろう？」

8

マリーディと護衛の男は、地下から地上へ上がる階段を上り、ビルから屋外へと出た。すでに護衛ＰＭＣの応援はやってきていたので、彼らの車の一台を借りる。本格的な軍用のオフロードカーではなく、市街地を走っていてもおかしくない一般の４ドアだ。

味方を片っ端から殺され、自分自身も生存本能に心臓を鷲摑みにされている『信心組織』の襲撃者は、周りを確認している余裕もなくなっているらしい。

一〇キロほど車を走らせ、中心部から離れたところにある貸倉庫まで辿り着く。

襲撃者が車から降り、倉庫の扉へ取りつく前に、マリーディが行動に出た。
音もなく背後へ近づき、膝の裏を蹴飛ばして体勢を崩す。相手が振り向いたり絶叫したりする前に首へ両腕を回し、そのまま容赦なくへし折った。
「ご苦労さん」
「これが犯罪行為にならないのがテクノピックの恐ろしいところだよな」
「自衛の範囲は相当広く設けられているからな。そもそもこんな仕組みさえなければ私が襲撃される事もなかったんだ」
全身の力を失った死体のポケットを探り、鍵を取り出したマリーディは慎重に貸倉庫へ近づき、巨大なシャッターの脇にある小さな人員用の出入り口の錠前を外す。
アサルトライフルを構えて内部を見渡すが、誰かがいるような雰囲気ではなかった。
（……つい最近まで出入りしていた痕跡はある）
護衛の男と二人で貸倉庫の中を調べていくが、やはり隠れている人間もいない。全員出払っているのか、逃げ込んできた仲間が余計な者を案内してくると踏んで逃走したのか。
「置き土産もないみたいだな」
護衛の男が軽機関銃を下ろしながらそんな事を言う。
爆発物の事だろう。
相手がマリーディ達の動きを察知して逃走したのなら、そういうトラップを残しておく可能

性は高い。となると、やはり元々ここにいなかっただけか。

「あれで全員なのか。他にも仲間がいるのか。これだけでは確証は持てないな」

「ここで張っていれば良い。俺の部下を周囲に置いておこう」

護衛の男の言葉を聞きながら、マリーディは貸倉庫の中を見回す。分厚いビニールシートを被せられた機材のようなものがいくつも並んでいた。『置き土産』の調査の際に、一度中は覗き込んでいる。

改めて紐を外し、ビニールシートの覆いを取り除いていく。

中から出てきたのは、

「……VTOL性のある戦闘機？　『正統王国』のS/G-31か」

「外装だけ見ればな」

エースパイロットのマリーディは慎重に意見を述べる。

「だが基本的なフレームは『信心組織』のHarpuiaiも同じものを使っている。『正統王国』から亡命した技師が設計したものだからな」

後ろへ回ってみると、ジェットエンジンのベクタースラストノズルに特徴的なパドルがついていた。『正統王国』のものとは違う。

元々、このパドルの形状を巡る特許上の問題で技師は亡命したのだ。

「つまり、こいつらは『信心組織』なのか？」

「この戦闘機にしたって、身元を隠すために外装を改造しているんだ。同じ理由で中身も改造している可能性だって否定はできない。これだけでは『正統王国』も『信心組織』もない」

マリーディは戦闘機の胴体を軽く握った拳で叩きながら、

「ようは、どこの勢力によるものか、それが分からなくなってしまえばそれで良いんだ。一〇〇%の確証さえ得られなければ、後は各勢力の上がお得意の政治的判断の応酬でお茶を濁してしまうさ」

「前に潰した連中を、君は『信心組織』と断言しただろう」

「やり方はな。確かにヤツらの動きは『信心組織』のものだったが……退役軍人、訓練指導を受けた人間、訓練法を分析した諜報部の協力を得て攪乱用に『動き』をマスターした別組織の兵隊という可能性などは捨てきれない」

他のビニールシートに覆われていた装甲車や潜水艇にしても、『資本企業』や『情報同盟』に外装が整えられていた。その外装で騙すのではなく、『複数の勢力の改造の痕跡があるから、どこの勢力のものか判断できなくさせる』細工が施されているのだ。

護衛の男は呆れたように、

「これじゃあ分からないな」

「そうでもない」

マリーディは整備用の工具類に目をやった。

「表に出てくる戦闘機や装甲車には複数混合で身元を分からなくさせているが、逆に言えば、表に出てこない機材であればそうした細工を施す必要はない。有り体に言えば、軍用の工具がどこの勢力によるものか調べれば母体が分かる」

「で、結論は？」

「……十中八九『信心組織』。それもギリシア神話圏式だ」

圧電受話器を使ってアリシアに尋ねるマリーディだったが、アリシアの方は怪訝な調子でこう返した。

『ギリシア神話圏の中で、シュートアスロンの結果が芳しい選手はいません。たとえメダリスト全員を退場させたとしても、「繰り上げ」はないでしょう』

「どういう事だ？」

『犯行グループではないので分かりません。が、推測させていただきますと、メダルはく奪狙いの襲撃とは毛色が違うのかもしれません』

「……」

マリーディはもう一度辺りを見回し、改めて貸倉庫の中を捜索していく。

すると、あるはずの物がない事が分かった。

「コンピュータがない。今時の戦闘機や装甲車両には高度な精密機器が搭載されているから、メンテナンスにもコンピュータが必要なはずなのに」

「全部持っていったって訳か」

「……可能性があるとすれば、あそこぐらいか」

呟き、マリーディは一度貸倉庫から外へ出た。入り口近辺に倒れていた襲撃者の死体を改めて漁ると、上着の内ポケットから携帯端末が見つかる。

パスワードロックがかかっていたが、あくまでフリーソフト程度のものだ。特殊な手段でセキュリティに必要な機能を『固めて』しまうと、マリーディはパスワードロックのモードそのものをオフにしてから再起動してしまう。

「パイロットに必要な技術なのか？」

「フライバイワイヤ関連の調整にこの手の携帯端末を使う。が、調子が悪くて聞き分けのない時にはソフトリセットもするんだよ」

携帯端末の中には大したデータは入っていないが、いくつかの特殊なリンクに繋がるアドレスと、認証用コードのリストが出てきた。どうやら主要な情報は全て、ネット上のサーバーに収めてあるらしい。いつまでアクセスできるか分からないので、片っ端からダウンロードしていく。

『空白化はどうしても目立つ。あくまでも空白化は本計画の下準備だ。この段階で警戒されてはならない』

『空白化には進行中の問題を利用する』

『「正統王国」が「資本企業」の競技選手を襲撃している情報は摑んでいる。これを空白化に利用する』

『必要な火器、装甲車両などの偽装は時間内に終わる。空白化へ投入を決定』

頭頂部を覗き込むような形で、護衛の男はマリーディの真上から画面の文字を追う。

「これは俺達の事だよな」

「メダルはく奪が狙いではないようだ。だが、この文章を見る限り、そもそも私を狙ったものですらないようだぞ」

空白化。

しばらくファイルを調べていくと、そちらについての情報も出てきた。

『オリンピアドーム側は警備の大多数をＵＡＶ、ＵＧＶ、ＵＵＶなどの無人兵器に依存している』

『これを先に潰さなくては本作戦の実行は難しくなる』

『無人兵器は完全な自律プログラムで動くのではなく、常に中央のコントロールルームで手動操縦されている』

『アンテナは施設の至る所にある』
『出力も強く、通常のジャミングではおそらく完全には遮断できない』
『だが無数のアンテナからの情報を統合するためには、信号機のように情報の経路を操るハブが必要になる』
『ハブを破壊すれば、かなり大きなブロックで無人兵器が使用不能になる』

マリーディは目を細めた。
「……私達の車列が最初に襲撃された時、無反動砲は何発発射された？」
「覚えていない。身を守るので必死だった」
「つまり、そういう事か。どさくさに紛れて別の施設へ撃ち込んでいたとしても、車列襲撃のとばっちりと判断される訳だ」
「だが、この空白化も本来の目的ではないのだろう？　下準備とあった。本作戦とは一体何なのだ？」
「出てきた。出てきたぞ……」
マリーディは携帯端末の画面をスクロールさせていく。
『テクノピックに本来のスポーツの祭典としての面影はない』

『腐敗と代理戦争のみを肥大化させていく残骸に、終止符を打つ』
『我々アスレティカは、母体ギリシアの祖先から発祥したオリンピックを、元の形へ戻す』

アスレティカ。
それが今回の騒動の中心にいる組織の名前らしい。

『そのために、まず莫大な利権を生み出しているテクノピックと、その運営を行うオリンピアドームを完全な形で破壊しなければならない』
『オリンピアドームは「信心組織」「正統王国」「情報同盟」「資本企業」など、世界的勢力のオブジェクトが警備を行う難攻不落の施設だ。真正面からの攻撃で落とせるとは思えない』
『この巨大人工浮揚島を落とすには、システムそのものを逆手に取る必要がある』

「……いよいよきな臭くなってきたぞ」
「オリンピックの精神の……復活？　テクノピックの体制そのものを敵に回している連中……その、アスレティカとかいうのが俺達の戦う相手なのか」
「でも、どうやって沈めるつもりなんだ。第二世代のオブジェクトが四機も常駐しているような厳重区域だぞ」

『世界的勢力のオブジェクトは表向き共同でオリンピアドームを警備しているという事になっているが、実際には互いが互いを牽制し合う事で、抑止効果を狙っている意味が強い』
『どこかに強い刺激があれば、互いが互いを殺し合う状況が生まれる』
『最初の一発目を撃つのは難しい』
『同じ大きな勢力とはいえ、「信心組織」のオブジェクトは我々アスレティカの同胞ではない』
『オブジェクト以外で最初の一発目を放つ必要がある』
『完全に大破させるほどの火力はなくても良い。ただ、オブジェクトを操るエリートに脅威を感じさせれば良い。オブジェクトによる砲撃だと勘違いさせるほどの。あるいは、オブジェクトの砲撃を使わなければ解決できないと思わせるほどの』

それほどの出力を持つ兵器などあるのだろうか。
オブジェクトは核兵器の直撃すら耐えるほどの装甲を持つというのに。
携帯端末を操るマリーディは、そこでアスレティカの狙いを見つけ出した。
そこにはこうあったのだ。

『オリンピアドームは表向き大規模な兵力を持っていないとアピールするため、無人兵器の電

力を外部から供給する形を取っている』

『三隻の巨大変電船舶、オーシャンサブステーション』

『五〇〇〇機以上の無人兵器を完全に運用するほどの大電力は、レーザーによって送電されている』

『その施設を応用すれば、オブジェクトにダメージを与える程度の出力の光学攻撃を実行できる』

『空白化によって無人兵器を阻害し、警備の隙を突いてオーシャンサブステーションを乗っ取る』

『オーシャンサブステーションから高出力のレーザーをオブジェクトに向ければ、後は世界的勢力同士の怪物が勝手に殺し合ってくれるだろう』

『間に挟む、オリンピアドームを巻き込む形で』

敵軍　三

民間ヘリコプター用の貸倉庫から外へ出たラミール＝スコッフローの後を、小型のコンピュータを抱えたイリス＝アグラベーションが小走りで追い駆ける。

振り返らない彼女の背中に、イリスは言葉を投げかける。

「スコッフロー中佐！　『空白化』の際に襲撃メンバーが軒並みダウン、彼らが使っていたモーテルBも『資本企業』側に制圧されました!!」

「ハブの破壊で『空白化』そのものは成功している。オリンピアドーム側の無人兵器は、広範囲にわたって運用不能エリアが生み出された。今ならオーシャンサブステーションを乗っ取る事は難しくない。作戦を続行するぞアグラベーション准尉。モーテルも、私達のいるAと別地点のCがまだ残っている。再分配すれば、戦力としては十分だ」

貸倉庫の前にあるコンクリートの大きな広場には、ＶＴＯＬ性を持った戦闘機が三機も引っ張り出されていた。

無人兵器が万全の状態であれば、空を飛ばしても対空ミサイルと航空戦力であっという間に

落とされていただろう。

だが今は違う。

「まず三機のHarpuiaiでオーシャンサブステーション甲板上の防御システムを片っ端から潰す。それが終わったらヘリとエアクッション船で一気に乗り込む。……先制攻撃はやりすぎるなよ。オーシャンサブステーションが沈んでしまえば意味はない」

ラミールの声に力が入るのは、計画が大詰めに入ったからか。

あるいは、単純に彼女が航空機のパイロットであり、自分のフィールドの話になってきたからか。

ラミールはイリスの小型コンピュータの画面へ指を差しながら、

「先制攻撃から二〇分が勝負だ。それ以上は引き延ばせられない。『空白化』でオリンピアドーム側が混乱し、情報が錯綜している間にオブジェクトへの『決定打』を浴びせて戦争の引き金を引く」

「はい」

「オーシャンサブステーションの制圧は私達で担当するが、送電用レーザーの兵器化には君の力とそのコンピュータの中にあるプログラムが必要になる。分かるな准尉？」

「もちろんです。私達の文化から生まれた平和の祭典に、これ以上泥を塗らせる訳にはいきません」

かつてあったオリンピックという競技はすでに失われた。

後に残されたのはスポーツウェアなどの繊維材料工学やドーピングなどの薬学の技術開発競争と、人体実験で生み出されたモルモットの見本市だ。そこには健全なスポーツマンシップなど存在しないし、世界全体が一つの集団となって湧き上がった、あの高揚感はどこにもない。

金メダルと引き換えに寿命を縮めるような選手開発に何の感動がある？

代表選手として精一杯努力したのに、一〇位以下だったという理由だけで国に帰った途端に『お前のせいで賭博に負けた』と民衆から暴行を受けるような競技大会に、一体どんな健全性が宿っている？

「……取り戻すぞ」

ポツリと。

だがしかし、人間の精神に突き刺すような威圧感を込め、ラミールは呟く。

「この腐りきった死の祭典を叩き潰し、かつてあったはずの平和の祭典を。束の間とはいえ、言語も宗教も民族も人種も、それら全ての壁を忘れさせてくれたはずの、あの大会を。必ずだ」

その日的のために、オリンピアドーム全体を、そこに滞在している数千人の選手達や数百万の観戦客を巻き込む羽目になる事を……さらに悲劇の派生として世界各地でオブジェクトを使った戦争が巻き起こる事も全て理解していたが、それでもラミール達の意思は変わらなかった。

腐りきった大会で利権を貪る者、賭け事のチケット片手にそうした汚れた競技に熱狂する者の命まで守る義理はない。

ラミールの周りに、多くの人が集まっていた。

戦闘機のパイロット、ヘリコプターやエアクッション船を用いた乗船用襲撃人員、コンピュータの前で情報を束ねる分析官に、兵器の整備員まで。皆がラミールに注目していた。

鼓舞するための一言は、すでに決まっている。

ラミールは杯を掲げるように宙へ手を伸ばし、そして言った。

アスレティカの存在意義を象徴する言葉を。

「祭典に栄光あれ」

第四話

1

面倒な事になってきた。

アスレティカの最終的な狙いは、このオリンピアドームを警護する複数の勢力のオブジェクトに混乱をもたらし、オブジェクト同士の戦争を誘発させる事。その戦火に巻き込ませる形でオリンピアドームを沈める事にある。

最大級の戦力はいくらでもあるのに、そこに助けを求める事も、今起きている事件の概要を説明する事すらも許されない。

数千人の選手達、数百万人の観客達、そしてマリーディ達自身の命を守るためには、時代遅れと呼ばれる旧式の兵力のみで事態の収拾をしなくてはならない。

（……今時の戦争ってのは突発的に起こるものじゃない。利益と損害を天秤にかけて、世界的勢力の『上』が厳密な計算の元に仕掛けるはずだ。そのセオリーから外れたオリンピアドーム

の混乱は、これまでの対応では収拾がつけられなくなる可能性が出てくる）

マリーディは倉庫の外へ飛び出しながら、心の中で思う。

（上は上で様々な政治的工作を行って混乱を最小限に留めようとするだろう。全面的な戦争には発展せずに済むかもしれない。だがその下にいる民衆は違う。テクノピックの選手団は、演出されたものとはいえ民衆の代表だ。それをあっさり殺されて、すごすごと引き下がるような真似はしない）

歯噛みする彼女の想像は、どんどん悪い方向へと向かっていく。

最悪なのは、それが単なる根も葉もない空想では済ませられない事だ。

（数千人の選手達がまとめて殺害された場合、『安全国』でテロ事件が爆発的に増加する。ただでさえ、テクノピック中の『アクシデント』は『安全国』の事件発生率に関わると指摘されているのに。いいや、戦場と『安全国』の区分が崩壊するような事態に発展する。それは、今までオブジェクトを使って積み上げてきた『クリーンな戦争を行うクリーンな時代』というシステム自体の崩壊を示す。あらゆる経済活動が循環不全を起こし、社会全体が崩れ去るぞ!!）

夕暮れのオレンジに染まる貸倉庫の前に、護衛ＰＭＣのチームの車両が集まっていた。ガタガタと震えているキャットウォークＴＶのルーカス＝ウェスタンローズは、しかし途中から『ちくしょうっ！　また撮り忘れた!!』と気づいて自分自身に憤っているようだった。

マリーディは護衛の男を捕まえて、

「オリンピアドーム運営側はなんて言っている!?　オーシャンサブステーションの警備態勢は変更したのか!?」

「どうもこうもない」

護衛の男は肩をすくめて、

「向こうも空白化やその他諸々の影響で相当混乱しているらしい。緊急の回線なのに全く繋がらない。どこもかしこも混雑しています、だ」

「くそっ！」

マリーディは護衛の男が持っていた双眼鏡を摑み、海の向こうへ目をやる。

数キロ先に、全長五〇〇メートルを超える巨大な船が停まっていた。形状そのものはそれほど特殊なものではない。基本的にはタンカーだが、平べったい甲板の上に、直径数十メートルのパラボラアンテナが四基ほど並べられていた。マイクロウェーブを受け取るためのものだろう。

「アリシア嬢とも繋がらなくなった。オリンピアドーム系の通信網が途絶えたせいで、民間、軍事問わず一斉に自前の無線通信を使い始めたせいだな。似たような周波数帯で電波が錯綜し過ぎているせいでノイズだらけになってる」

護衛の男は舌打ちし、

「つまりスポンサーの意向が見えない、話が聞けるかどうかはかなり怪しい」

「今はインテリ系の出番じゃない。重役どものサインを待っていたらオリンピアドームが沈められるぞ!!」

その時だった。

マリーディの頭上を爆音が突き抜けた。

双眼鏡から目を離して見上げると、細長い飛行機雲をなびかせながら、二機の戦闘機がオーシャンサブステーションへ向かっていくところだった。

『正統王国』のS/G-31に偽装した、VTOL性を持った戦闘機だ。

「動き出したぞ！　アスレティカだ!!」

もう撮れれば何でも良いのか、ルーカス＝ウェスタンローズはスマートフォンの動画撮影アプリを起動して小さなレンズを空へ向けている。彼は通信ではなく、直接ここまで駆けつけた部下の話を聞きながら、

「もしもし、はい、はい、他の撮影班からの報告によりますと、ええ、はい、観客側はまだ大きな混乱はないようです、はい。ええ、放送が遮断され競技も止まっていますが多くの観客はドームで復旧を待っていますし、戦闘機が飛び交っているのも、はい、はい、シュートアスロン女子競技後のアクロバット飛行か何かと勘違いされているかもしれません、はい。……仮に戦闘行為と認識されたとしても、ええ、はい、選手間のトラブルの絶えないこの場所なら、歓声と共に迎え入れられそうではありますけど、はい」

護衛の男も飛行機雲の先端に目をやりながら呟く。

「周辺のUUV護衛船舶は使い物にならない。オーシャンサブステーション本体が持っている防御システムは手動で動かせるだろうが……」

「そんなものあてになるか！　空と船とじゃ近づかれた時点で勝負は決まる!!」

甲板上からオレンジ色の曳光弾のラインがばら撒かれ、白い噴射煙と共に対空ミサイルが発射されていく。

だが戦闘機にさしたるダメージは与えられない。

アスレティカの三機がオーシャンサブステーションの真上を通過した時には、防御システムの半分以上が機銃掃射で吹き飛ばされた。一度距離を取ってから大きく旋回し、再び接近していくと、今度は携行型対空ミサイルを肩で担いだ兵士達を撃ち抜いていく。

護衛の男は呻くように言った。

「……虐殺だ」

「だがあれで終わりじゃない。甲板上の防御システムを破壊したら、今度は乗船のためにアスレティカの本隊が動くはずだ。あれを乗っ取られたら、連中はレーザー送電システムを逆手に取ってオブジェクトへ攻撃を仕掛ける。オブジェクト同士の戦争が始まってしまう。そうなったらオリンピアドームは崩壊するぞ」

マリーディは自分が殺した〝信心組織〟アスレティカの兵士の携帯端末を操作する。

一体どこで入手したのか、機密事項であるはずのオーシャンサブステーションの図面まで揃えられていた。

「オーシャンサブステーションはあくまで変電施設。発電自体は軌道上の衛星が行う。マイクロウェーブで送られた電力を一度船で受け止め、レーザーに変換してからオリンピアドームへ送電する……」

「電源の衛星を止めてしまえば、高出力のレーザーを生み出すための基盤は失われるんじゃないのか？」

「その衛星の管制を行っているのもオーシャンサブステーションなんだ」

「どうやって？　あれは常に大量のマイクロウェーブを受け止めているんだろう。管制用に送受信する信号を潰してしまいそうなものだが」

「船は全部で二隻ある。その全てが常にマイクロウェーブを受け止めている訳じゃない。二隻が変電を行い、一隻が管制を行う。交互に分担を変えて休ませたり、メンテナンスを行ったりしているんだ」

護衛の男は軽く首を横に振り、それから言う。

「……だがアスレティカはオーシャンサブステーションのレーザーを必要としている。つまりマイクロウェーブを受け取らなくてはならない。管制と同時に行う事ができないなら、他の船が停止信号を出してしまえば衛星を止められるかもしれない」

「そうだな。ジャミングを仕掛けられなければの話だが。発電衛星は停止信号さえなければ通常営業でマイクロウェーブを流し続ける。しばらく信号がなくても問題はない」

くそ、と護衛の男は呟いた。

そんな彼に、携帯端末を操作しながらマリーディは言う。

「どうする？」

「どうすると言われたところで、俺達にはどうにもできない」

護衛の男はそう呟いた。

「俺達は火器を持ち、準軍事行動を取る権限を与えられている。だがそれは代表選手である君に命の危機が迫った時のみだ。今回はオリンピアドームそのものが狙われている。残念ながら、俺達の銃は使えない」

「あれが乗っ取られれば、最後はこの巨大人工浮揚島そのものが大西洋に沈むんだ!!　私だって死ぬ。だったら護衛を動かしても問題はないだろう!?」

「権限外で発砲すればそれは犯罪になるんだ!!」

護衛の男は言葉を被せるように叫んだ。

「今まで君を襲ってきた連中は、そうした捜査の手をかいくぐるよう準備を進めてから実行したプロの工作員達だ。そうした恩恵に守られていない俺達がそれをやれば、まず間違いなく逮捕される。そしてここは〝資本企業〟じゃない。俺はどんな風に刑法が機能しているかも分か

らない土地で、自分の使っているものとは違う言語で進められる裁判で争うなんてごめんだ。あまりにも不利すぎる!!」

「……」

「それは君にも当てはめられる。オーシャンサブステーションを助けるために乗り込むのは、おそらく後世の歴史からは褒められる行いだ。だが、今この段階ではただの犯罪なんだ。下手をすれば、メダルのはく奪だってありえる。選手チームは元より、スポンサー会社も『資本企業』全体も君の命を狙いかねない。単純なリスクで言えば、俺なんかの比じゃないんだぞ!!」

違約の代償。

ただ好成績を達成できなかっただけでも人生に関わるリスクを背負うかもしれないのに、ましてそれが不名誉や犯罪が絡むメダルのはく奪となれば、数百万ドルの広告効果を期待していたスポンサー会社はまず間違いなく激怒するだろう。

経済が人命より尊ばれる『資本企業』では、それは報復的な軍事作戦が実行されてもおかしくないほどの事態だ。

「ならどうする？」

「俺の仕事は君の護衛だ。最低限の職務を全うする」

「……ここから逃げ出すっていうのか？」

「幸い、君はすでにシュートアスロンで金メダルという結果を出している。ドーピングの副作

用で調子が悪くなったと言えば、閉会式に出席する必要もなくなる。今すぐチャーター機に乗れば、オリンピアドーム崩壊前に脱出できるはずだ」

「今まさにその崩壊は進行しているんだ!!」

「俺達はそのチャーター機には乗れないんだ!!」

護衛の男は噛みつくように叫んだ。

キャットウォークTVのルーカス＝ウェスタンローズもギョッとしたようだが、彼はやがてスマートフォンのレンズをこちらに向けてこう言った。

「もしもし、はい、はい、まぁ、私達クルーの力で動かせるのはせいぜいヘリぐらいでしょう。ええ、オリンピアドームの位置から考えて、陸地に辿り着くほどの航続距離は確保できません、はい。もっとも、はい、これだけの『真実』を前に尻尾を巻いて逃げ出すというのも、ええ、『情報同盟』の一員として許せる行為じゃありませんがね、はい」

彼は彼なりのロジックで、この場に留まる覚悟を決めたようだ。

ここから唯一離れる事のできるチケットを持ったマリーディの方が、逆に置いてきぼりにされる格好で。

どう言って良いか分からないマリーディの目を見て、護衛の男はこう告げた。

「それでも乗れと言っている。チャンスがあるなら生き残れ。そのメダルは、君が自分の実力で手に入れたものだ。少しぐらい、そいつを自慢するような生き方をしたって誰も責めたりは

しない」

「……お前達はどうするつもりなんだ」

「どうにかしてオリンピアドーム側と連絡を取る。火器の使用条件に穴があれば良いがな。どんな屁理屈でも良いから戦える条件を作って、それからオーシャンサブステーションへ向かってみる。何もしないよりはマシだ」

護衛の男は一つ一つ条件を確認するように、

「後は、そうだな。アリシア嬢とも連絡が取れればスポンサーの意向を確認できる。巨大会社の方からオリンピアドームに戦闘許可の便宜を図ってもらえれば大分楽になりそうだが……中立のテクノピックの事情を考えると壁も多そうだ」

そもそもアスレティカを純粋な撃ち合いで排除できるかも分からない。

挙げ句に政治や法律の問題が彼らの動きを阻害する。

護衛の男もそれぐらいは分かっているだろう。手順を踏んだやり方で進めていけば、まず間違いなく崩壊に間に合わない。

金や契約に対してだけはとことん真摯だったアリシアも。

有名人のサインを集める事を密かな楽しみにしていたステイシーも。

戦える者、戦えない者など拘わらず、このオリンピアドームにいるというだけで、間もなくその全てが死亡する。

超大型兵器オブジェクトの、凄まじい火力が片っ端から吹き飛ばす。
唯一、戦えるのにそこから逃げ出す権利を得た、マリーディだけを除いて。
「……、」
さあ、と促され、マリーディは近くに停めてあった乗用車へと歩いていく。
その車の陰になり、彼女達の体が周囲の兵士達から見えなくなったところで、マリーディは軍用のナイフを護衛の男の脇腹に突き付けた。
「銃と車のキーを貸せ」
「くそっ、またか!!　いつの間に俺のナイフを盗みやがった!?」
ルーカス＝ウェスタンローズはスマートフォンのレンズを思わず彼女達二人に向けるが、マリーディは無視してこう要求した。
「良いから早く。お前の方法じゃ間に合わない。分かっているはずだ。だから早く銃と車のキーを出すんだ」
「本当にメダルをはく奪されるかもしれないんだぞ」
「これしか方法はない」
「スポンサー会社から何十年命を狙われ続けるか分かったものじゃない！　君はそれで良いのか!?」
「なら、またメダルを獲って帳消しにしてもらうさ」

ナイフの先端をわずかに動かすと、護衛の男は両目を瞑って、苦痛に耐えるような格好で拳銃と車のキーをマリーディに渡した。

乗用車の運転席のドアを開けるマリーディに、ルーカス＝ウェスタンローズはこう叫んだ。

「もしもし！　私が足手まといになるなら、ええ、はい、せめてこのスマートフォンを持っていってください！　はい、はい、ええ、おそらくあなたが一番『真実』に近い!!」

「残念だが、流血が多すぎてレーティングに引っかかるだけさ」

にべもなく断るマリーディに、今度は護衛の男が言う。

「俺はついていけない」

「チップは出せない。身の安全も保障できない。それでついて来いと言うほど厚かましくはないさ」

「……回り道になるが、必ず追い着く。だから先にオーシャンサブステーションへ向かってくれ。頼んだ」

マリーディは小さく頷き、それから車のキーを差し込んだ。

2

オーシャンサブステーションは数キロ先の海に停まっている。

マリーディが向かったのは港湾施設だった。遊泳エリアと違って、こちらの海には人工的な床などは用意されていない。海はそのまま数千メートルの深さを持つ。

あらかじめアスレティカのデータをダウンロードしていた携帯端末で情報を確認したマリーディは、停車した乗用車から降りる。

耳に取り付けた圧電受話器から、護衛の男の声が飛んできた。

(……使える周波数帯を見つけたのか？　いつまで使えるか知らないが、ネット系とはいえテレビ局を味方につけていたのは大きかったかもな)

『具体的にどうオーシャンサブステーションへ乗船するつもりだ？　モーターボートでも拝借するのか』

「今まさにヘリコプターやエアクッション船でオーシャンサブステーションにアスレティカの襲撃者達が乗り込もうとしている最中だぞ。それを押し留めるために甲板上からアサルトライフルを連射している乗組員もいる。ここで船なんか使ったら銃撃戦に巻き込まれるのがオチだ」

ここには比較的小さなクルーザーが多く停泊していた。それらはオリンピアドームと大陸の間を行き来するためのものではない。ダイバー達がオリンピアドームの真下で作業を行うための装備と、そのダイバー達の中継・休憩ポイントとしてのクルーザーを保管してある場所だ。

施設の出入り口には初老の警備員がいたが、マリーディはその手首を掴み、ひねって、アスファルトの上へ投げ落とした。

意識を奪った警備員からカードキーを抜き取り、コンテナを改造した建物の中に入る。
「オーシャンサブステーションは変電施設だが、その作業をするためにも電力がいる」
ダイビング用のウェットスーツを無視して、マリーディは酸素ボンベを掴んだ。
「船自体の電力はマイクロウェーブを使っていない。海底のメタンハイドレートを採掘し、それを燃料にするガスタービンを使って電力を作っているはずだ。なら、採掘用の小型潜水艇が出入りするためのゲートがある」
『下から入るっていうのか!?』
「今も小型潜水艇が出入りしているなら、ここを使って入るのが一番安全だ。銃撃戦に巻き込まれずに済む」
酸素ボンベを背負ったマリーディは、アクアスクーターを手に取った。モーターのついたビート板のような機材で、足ヒレよりも格段に早く海の中を進む事ができる。
（ここは大西洋の中央。本来なら水深数千メートルの深い遠洋か）
何かしらの機材トラブルがあれば、まず助からない。
銃撃戦とは別種の悪寒が背筋を襲うが、立ち止まっている訳にはいかない。
マリーディはアクアスクーターを脇に抱えたまま、コンテナ状の建物の外へ出た。クルーザーを停めてある岸壁までやってくると、彼女は海面へ向けて飛び込んだ。
目的のオーシャンサブステーションまでは距離がある。

アクアスクーターを使って海水の中を進むマリーディの耳に、アリシアの声が届く。

『話は聞きました』

『今から文句を言ってももう遅い。止めたければ銃を握るんだな』

『文句を言うのは私ではありません。スポンサー様からの貴重なご意見を、私の口を経由して述べさせていただいているのです』

……自分もオリンピアドームの崩壊に巻き込まれるかもしれない事を知っているはずなのに、それでもこの態度を貫き通すのは、それはそれで大したものなのかもしれない。

『……で、スポンサーはなんて言っている？　メダルはく奪なら報復行動か、それとも強制労働所送りか』

『メダルのはく奪は確かに憂慮すべき事態です。新型ライフルの宣伝効果は天から地に落ちます。ゼロよりも低い位置まで』

ですが、とアリシアはこう付け加えた。

『……たとえメダルをはく奪されてでも民衆を守るために戦った、という事実を美談として再構成できるのであれば、あるいはメダル獲得よりも高い宣伝効果が期待できるのでは、というご意見をいただいております』

『……、なるほど』

それが彼女なりの気遣いなのかもしれない。

経済活動の権化である大会社との間でこの折り合いをつけるために、水面下でどれほどの労力が費やされたか、それをアリシアは一切話さない。

『よって、行動を起こすのであれば必ず成功させてください。メダルをはく奪され、なおかつオリンピアドームの防衛もできないのであれば最悪です。その場合はもう弁明の余地はないでしょう』

『了解。生きて帰れたら何か美味いものでも食おう』

『経費で落ちるのであればお供します』

そうこうしている内に、オーシャンサブステーションに近づいてきた。

ゴーグル越しのクリアな海域へ日をやれば、巨大な船底のさらに下に、全長二メートルほどの探査艇のようなものが移動している。

携帯端末の図面にあった通り、オーシャンサブステーションの船底の一部分は開閉し、小型潜水艇を出し入れするための機能があるようだ。

あの潜水艇に張り付けば、巨大な船の内部へ踏み込む事ができる。

おそらく、中はすでに銃撃戦の真っ最中だろう。

ここから先が本番だ。

3

マリーディは小型潜水艇の側面に張り付く形でオーシャンサブステーション内部へ潜り込んだ。

そこは海底から人手したメタンハイドレートを燃料ガスへ変換するためのブロックらしく、周囲には作業服を着た男達が二〇人ほどいた。彼らは侵入者を見て体を強張らせたが、ゴーグルを外したその素顔がマリーディ＝ホワイトウィッチ『選手』である事を知ると、途端に全身の力を抜いて安堵の息を吐いた。

（……顔をそのまま名刺代わりに使えるとはな。まぁ、メダルを獲っておいて損はなかったという事か）

「このオーシャンサブステーションが襲撃を受けている事は知っているな？　この場の責任者は」

「わ、私です」

と答えたのは、三〇代の女性作業員だった。

マリーディは周囲の太い配管や車庫より巨大な鋼鉄の機材に目をやりながら、

「ここはどんな設備だ？　具体的に何を担っている」

「固形化したメタンハイドレートを安全に溶かし、ガスタービンに使用できる気体燃料へ変換するためのものです。隣のブロックが発電用のタービンになっています」
「タービンまでの経路は？」
「ドア一つ。通路に出る必要もありません」
「オーシャンサブステーションは大規模な変電施設だが、その作業を行うためにも電力がいる。それを確保しているのがここだ。つまり、このブロックが使えなくなればオーシャンサブステーションの機能は止められる。そうだな？」
「え、ええ。でもそれが……？　襲撃者はここを狙ってくるのですか。オリンピアドームを守る無人兵器の動力を奪うために」
「それとはちょっと違う。連中は送電用のレーザーを悪用し、兵器化を企んでいる。おそらくこの船が乗っ取られるのは止められない。その前に、変電施設の機能を完全に奪っておきたい」
マリーディは小型潜水艇の数を確かめながら、
「だからここの作業員に頼みたい。発電用のタービンを動かすのに必要なパーツを取り外してほしい。スペアも含めて。その必須パーツを小型潜水艇に乗せて、アンタ達は脱出しろ。そうすれば、連中がオーシャンサブステーションを乗っ取っても兵器化レーザーを運用する事はできなくなる」
「必須パーツはかなりの重量があります。クレーンで運ばないと……。それにスペアが四つあ

るから、作業には三〇分はかかると思います」
「その時間はこっちで稼ぐさ」
マリーディは拳銃を取り出しながら言う。
彼女が通路へ繋がるドアへ向かったのを見て、女性作業員は慌てて話しかけた。
「ちょっ、あなたはどうするんですかっ？」
「乗組員はこの船を死守しようとしているようだが、タービンの必須パーツさえ抜ければ無理をする必要はない。無駄死にさせないために、連中に状況を説明して逃げてもらう。ついでに敵の注意を引いて制圧までの時間を稼ぐ」
「拳銃一丁で……？　冗談でしょう」
「だから勝つつもりはない。頃合いを見計らって私も逃げるさ。私は正義のヒーローじゃない。アンタ達も死にたくなければ早く動くんだ。自分の命を守るものは自分しかいないぞ」
マリーディは扉のすぐ横の壁に張り付き、
「私が出たら、まずクレーンでこのドアの前に何か重たい物を置け。私はここには戻ってこない。ノックも無視しろ、悲鳴や懇願があっても全てアンタ達を騙そうとする罠だ。誰も入れるな。分かったな？」
作業員達が小さく頷くのを確認してから、マリーディは鋼鉄製のドアをわずかに開ける。通路に人はいない。滑り込むように外へ出て、彼女は後ろ手でドアを閉める。

（くそっ。一体どれぐらいの敵が入り込んでいるんだ……？）

居住性を考慮して設計されている豪華客船などとは違うため、通路は狭く、入り組んでいて、配管も剝き出しだった。通路の角そのものが遮蔽物に使えるが、直線的な部分になると隠れられる場所がほとんどなくなる。率直に言って、心臓に悪い構造だった。

目的地はない。

勝利条件もない。

できるだけ多くの人間を拾って、速やかに撤退する事。すでに負け始めている戦いの被害を抑えるための戦いなのだ。

ただし、やられっ放しでは終わらない。

オーシャンサブステーションの機能を奪った上で逃走すれば、アスレティカの計画を潰す事はできる。

4

ラミール＝スコッフローは指を使って部下へサインを出す。

無反動砲の砲弾が発射され、乗組員を遮蔽物ごと吹き飛ばすと、彼女達は速やかに移動を再開させる。

『衛星管制施設の制圧を確認』

『ブリッジの制圧を確認』

『マイクロウェーブ受電制御施設の制圧を確認』

別働隊から入ってくる特殊な周波数帯の無線を聞きながら、ラミールはカービン銃を使って抵抗する乗組員へ発砲する。わざと外れたところへ弾丸を放ち、相手が反撃のタイミングと判断したところで、部下が着実に急所へ弾丸を叩き込んでいった。

「残りはレーザー送電制御施設と、最下層の機関室か」

無人兵器を主体にしているとされていたオリンピアドーム側だが、実際にオーシャンサブステーションの制圧に乗り出してみると、意外なほどに生身の戦力が多い。

ただし、

「大半は専門の訓練を受けている訳ではない、作業や整備の人員か」

「これなら問題なくいけます」

無反動砲の砲を肩に下げる部下の兵士が言うが、ラミールは簡単に笑ったりはしない。

「……これで、戦闘、非戦闘要員を問わず、皆殺しにする必要が出てきた訳だ。広い船内の全てをくまなく捜索してな。それはそれで面倒な作業だぞ」

「主要施設を押さえたら、後の捜索は我々で行います。中佐達は主要ブロックにバリケードを築き、計画通りレーザーの兵器化作業を実行してください」

「獅子身中の虫に怯えるのは避けたい。徹底的にやれよ」

ラミールがそう告げた時だった。

パパパン!!　というライフル弾の短い連射と共に、つい先ほどまで会話していた部下が真後ろへ薙ぎ倒された。

慌てて通路の角へ身を潜めるラミールは、しかし怪訝な顔になった。

（……銃声は同じだと？　誰かが私達の部下から火器を奪ったか）

ここは俗にいうクランク型と呼ばれる形状の通路だ。

紙に書いてみれば分かりやすいだろうが、真っ直ぐ進み、直角に右へ折れ、次の角で左へ曲がる。『二つの角』を持った通路だと思ってもらえば良い。

その双方の角を二つの勢力が遮蔽物に使っており、間にある通路は弾丸の飛び交う死の道と化している。

お互い、角から撃ち合うだけでは決定打は与えられないだろう。

この死の道をどうクリアするか。

それを成し遂げた者に勝利は訪れる。

ラミールは通路の角から胃カメラに似たファイバースコープのレンズを伸ばしたが、通路の様子を観察する前にライフル弾で撃ち抜かれた。

（くそっ。通路を見渡す力は向こうが上を行っているか）

迂闊に顔を出せる状況ではない。

カービン銃に取り付けた索敵マイクを使って音声情報を拾っていると、クランクの向こうから少女の話し声が聞こえてきた。

『死守する必要はない。オーシャンサブステーションは連中に差し出す。レーザーの兵器化さえできなければ連中の計画はここで頓挫するはずだ』

『しかし……』

『どれだけマイクロウェーブが降り注いできても、変電作業そのものには別口の電源が必要になる。そっちが使えなくなれば問題はない。オーシャンサブステーションは三隻ある。使い物にならなくなった一隻を、外から吹き飛ばして沈めたってオリンピアドームの態勢は維持できる。だからお前達は一刻も早くここから離れろ。分かったな？』

（まずい……!!）

ラミールは背筋に嫌な感覚が走るのを確かに感じた。慌てて無線機を摑み、部下へと命令を飛ばす。

「アルファ、チャーリーは現行のルートを変更し機関室へ向かえ！　最優先だ!!　メタンハイドレート関連の設備を破壊させるな!!」

（くそ、相手は何者だ？　単に襲撃に居合わせただけじゃない。明らかにこちらの計画について知っているふりだぞ!!）

指で残った部下にサインを出し、攻撃の手順を伝えるラミール。
どこの誰だか知らないが、あいつの存在は計画全体に悪影響を及ぼす。
合理性以外の何かに突き動かされるのは、ラミールがやはり『信心組織』の人間だからか。
その直感がインスピレーション以上の後押しを受けていると判断し、ラミールは即座に襲撃を再開させる。
通路の角から腕だけを出し、部下達が立て続けに反動の少ない拳銃を乱射していく。その間にラミールは通路の角から顔を覗かせ、通路の幅や長さ、壁の材質などを正確に観察する。
「うわっ!!」
通路の角の向こうから少女の声が聞こえた。さらにキュキュッと靴底を床に擦らせる音も。
(怯んだ?)
ラミールが訝しんだ直後、牽制役の部下の一人が相手を追うように大きく踏み出そうとした。
彼女は部下の肩を摑んで押し留め、
「『撃って下がる』だ。空白化の時もこれで反撃したのか?」
呟き、あくまでも冷静に五〇ミリのグレネードを片手で撃つ。
真っ直ぐに、通路の奥の壁を狙うのではない。
相手は直角に折れた角の向こうにいる。そこでラミールは一度グレネードの砲弾を側面の壁に当てたのだ。

バウンドさせ、折れ曲がった角の向こうへ爆発物を送り込むために。

5

マリーディもすぐにグレネードに気づいた。

「くそっ!?」

つい先ほどまで脱出のための情報を伝えていた乗組員を突き飛ばし、マリーディは慌てて床へ伏せる。

バムッ!!　という爆発音が炸裂した。

効果範囲は半径一〇メートル。だがグレネードは少しでもその範囲を広げるため、床から斜め上へ向けて大量の鋭い破片をばら撒くように設計されていた。つまり正確には『円』状の破壊ではなく、『円錐』状の破壊をもたらすのである。

グレネード砲弾のすぐ近くで伏せれば、その『円錐』状の範囲から逃れられる。

（空中で撒き散らすタイプじゃなくて助かった……）

マリーディは男の乗組員へ話しかける。

「生きているか!?」

「返事はできる程度には。だが、くそっ！　足音が聞こえて来やがった!!」

向こうもグレネード一発でケリがつくとは思っていないのだろう。クランク型通路の中心である『死の通路』を駆け抜けるための時間を作ろうとしていたのだ。
今から銃撃戦に持ち込んでも態勢は取り戻せない。
ガンマンのような早撃ちに持ち込むつもりもない。
「こっちだ、来い!!」
マリーディは乗組員を引きずり上げ、通路の奥へ向かう。

6

ラミール達は『死の通路』を一気に駆け抜ける。角の向こうは直線の通路だ。遮蔽物はない。
カービン銃の連射でとどめを刺せるはずだ。
だが実際には、角を曲がる直前で爆発音が炸裂した。
通路の角から顔を覗かせると、その先には粉塵が漂っていた。
再び顔を引っ込めるラミールに、部下が話しかけてくる。
「爆発物まで……？」
「我々から火器を奪っているんだ。こちらが持っている物は全て揃えていると見た方が良い。
無反動砲の信管に手を加えて壁に設置したんだろうさ」

向こうからの反撃はない。

逃げるのに夢中か、傷でも負ったか。

ラミールは即断し、部下に指でサインを出す。一気に通路を走り、壁に空いた大穴へ向かう。

爆破時の粉塵のせいで、奥は覗き込めなかった。ラミールは大穴の内部へ向けてグレネードを発射する。隠れている者がいないかどうか探るため、そして周囲の粉塵を吹き散らすためだ。

だが。

ガツン、という硬い音が予想よりも近くで響いた。火薬の燃焼ガスの力を借りて遠くまで飛ぶはずだった砲弾が、わずか二メートルの位置に落ちる。そこで彼女たちはようやく気づいた。粉塵で隠れた奥、すぐ目と鼻の先に荷物を運ぶための手押し車が置かれていた事に。

グレネードの砲弾はその手すりにぶつかって落ちたのだ。

ラミール達を効果範囲に収めたまま。

「ちくしょう……!!」

彼女達は慌てて回避行動に移る。

バム!!　という爆発音が炸裂した。

7

爆発音を合図に、マリーディは両手で構えたカービン銃で反撃に出た。
短い連射を断続的に行い、グレネードで傷を負ったアスレティカの兵士達を速やかに黙らせていく。たとえ傷を負った相手でも、腕を上げて引き金を引くだけの力と、それを行うだけの戦意が残っていれば敵兵として機能する。その辺りの無力化に、マリーディは容赦をしない。
「チッ!!」
舌打ちと共に逃げる影があった。
深追いするかどうか迷ったマリーディだったが、
（……何だ。さっきの影を逃がすために、周りの人間が妙に分厚い弾幕を張ってくるな）
状況から彼女は即断する。
（重要人物か。あいつを潰せれば『信心組織』に混乱を与える事ができる!!）
前述の通り、マリーディはすでにこの戦いは負けを前提にしている。オーシャンサブステーションが乗っ取られる事は止められないと知った上で、できる限りの乗組員を助け出し、同時に大型変電施設の機能を奪ってレーザー送電施設の兵器化を妨げる、というのがここでの目的だ。
つまり、今回の一件はここがゴールなのではない。
戦闘はおそらく続く。
なら、次の戦闘のためにも『信心組織』に組織的なダメージを与えておきたい。

（くそっ、今から追えるか!?）

直線的に逃げた影を追うだけでは、おそらく足止めのための弾幕にやられてしまう。マリーディは携帯端末でオーシャンサブステーションの図面を呼び出し、相手の予想ルートへ割り込む事のできる迂回路を探し出す。

急ぐが、注意を怠ってはならない。

十字状に交差する通路の角で、マリーディは相手を待つ。

向こうから話し声のようなものが聞こえてきた。どうやら通信のようだ。

『駄目です、メタンハイドレート関連の施設はもぬけの殻になっています！　変電作業で使うためのタービンの部品もいくつか取り除かれています。どうしますか中佐!?』

「やられたか……!!　イリス＝アグラベーション准尉へ繋げ!!」

マリーディは意識的に呼吸を整え、カービン銃のグリップを改めて握り直す。

相手の足音は近づいてくる。

「准尉か。話は聞いているな？」

『中佐は急いでそこから脱出してください。作業はこちらで行います。中佐の作戦立案能力は今後も必ず必要になります。ですから早く！』

「すまない。任せたぞ」

マリーディは通路の角から半身を出してカービン銃を構えた。

躊躇なく発砲する。

「っ!?」

タタタタン!!　と立て続けに放たれる銃声。だが直前で相手は気づいたらしい。別の通路へと飛び込んだ事で難を逃れたようだ。

慌てて後を追うマリーディ。

だが影が逃げた通路へ飛び込もうとしたところで、慌てて角へ逆戻りした。

改めて顔を出して確認する。

通路の真ん中に、無反動砲の砲弾が無造作に転がっていた。無線式信管や赤外線センサーなどが取り付けられているかはここからでは見えない。だが可能性がある以上、爆発するかもしれないと考えて行動するしかない。

（くそっ。いちいち足止めされている暇はないのに）

カービン銃のセンサーのスイッチに手を伸ばしたところで、さらに通路の向こうから短い連射が何度か飛んできた。マリーディはわずかに身をすくませる。砲弾の足止め。信管の無力化を試みようとすれば銃撃が待っている。そういう構図を作って、『砲弾には手が出せない』状況を向こうは作ろうとしている。

マリーディは諦め、別の通路から迂回する事にした。

目的地は分かっている。

影が向かった先に重要な施設はない。あるのは甲板へと繋がる出口だけだ。マリーディは影が使ったものとは違う扉を開け放ち、外へと飛び出す。

平たく広大な甲板。

四基の巨大なパラボラアンテナに、それを支えるために設計された、複雑な柱の数々。まるで鋼鉄でできた森だった。遮蔽物は腐るほどある。

お椀のような形状のアンテナの真下を進みながら、マリーディはあちこちにカービン銃の銃口を向ける。

（どこだ……？）

マリーディは鋼鉄の柱から柱へと移動しながら、周囲を観察していく。

（あいつは部下の支援を受けて逃走を図っていた。逃げるとしたら何を使う？　エアクッション船か、ヘリコプターか……）

だが違う。

パラボラアンテナやその柱に埋め尽くされていない開けた空間に、巨大な金属の塊があった。

ＶＴＯＬ性を持った『正統王国』の戦闘機であるS/G-31。

厳密には、そういう風に外装を整えられた『信心組織』の戦闘機Harpuiaiだ。

専用の梯子の代わりにワイヤーを使って機首へよじ登った人影は、すでにコックピットへ乗り込もうとしていた。

「くそっ!!」

マリーディは慌ててカービン銃で発砲しようとしたが、横合いから敵兵の銃弾が飛んできた。すぐ近くの鋼鉄の柱に火花が散り、マリーディは慌ててその柱の陰へ飛び込む。そうしている間に、人影を乗せた戦闘機のジェットエンジンが唸りを上げ、垂直へゆっくりと上昇していく。

形成は逆転した。

戦闘機の持つミサイルや機銃の掃射が行われれば、生身のマリーディなど手も足も出せなくなる。カービン銃のライフル弾では、戦闘機の装甲を撃ち抜く事はできないだろう。

（まずい……）

マリーディは自分に向けて発砲してくる敵兵へライフル弾をばら撒いて牽制しつつ、さらにパラボラアンテナの真下へ向けて移動していく。

戦闘機がその気になれば、アンテナぐらい吹き飛ばせるだろう。

だがマイクロウェーブを受け止めるパラボラアンテナを破壊する行為は、向こうも望んでいないはずだ。

ここは凌ぐ。

船と一緒に心中する事がマリーディの目的ではない。

幸い、変電作業に必要な電力を作るタービンの必須パーツは取り外してある。このままオー

シャンサブステーションを明け渡しても、すぐには兵器化レーザーが使われる事はない。なら、一度ここは安全に撤退し、改めて大規模な火力を用意して、このオーシャンサブステーションごとアスレティカ勢力の大半を吹き飛ばした方が賢明だ。

そんな風に思っていたマリーディだったが、

『マリーディ。マリーディ＝ホワイトウィッチ!!　今すぐそこから離れるんだ!!』

護衛の男からの通信が、彼女の耳を叩いた。

『オーシャンサブステーションの兵器化レーザーが起動している。そこにいると狙い撃ちにされるぞ!!』

「何を言っている……？」

マリーディは甲板の上で訝しんだ。

変電作業に使うタービンは使い物にならない。今この状況でオーシャンサブステーションが乗っ取られても兵器化レーザーは使えないはずだ。さらに、マリーディがいるのはマイクロウエーブを受け止めるパラボラアンテナの真下である。仮に兵器化レーザーを自由に撃てる状態だったとしても、ここへ照射するとはとても思えない。

だが状況は彼女の予想の上を行った。

彼女は失念していたのだ。

オリンピアドームの無人兵器群を支えるオーシャンサブステーションは、全部で三隻ある事

を。

複数同時に襲撃を受ける可能性もゼロではない事を。

そして。

別のオーシャンサブステーションが、マリーディの乗る船を狙っている可能性を。

水平線の辺りを航行する巨大な船舶の影を見て、マリーディはようやく事態を悟った。

「くそ……」

もはや脱出手段など考えている暇もない。とにかくカービン銃を連射し、甲板に残る敵兵達を牽制しながらマリーディは船の手すりへと向かって走る。

「くそっ!!」

無線通信で、あの人影はイリス准尉という人物と会話していた。思えば、あれもこの船の中にいる人間同士のやり取りではなかったのかもしれない。

何とか手すりの向こうへ飛び込む事はできた。

だが数十メートル下の海面へ落ちるより前に、莫大な一撃がやってきた。

ボッ!!!!　と。

凄まじい純白の光がマリーディの網膜を焼いた。全長五〇〇メートルもの巨体を持つオーシ

ヤンサブステーションが、中央から吹き飛ばされた。鋼鉄で作られた船がオレンジ色に輝き、飴細工のように溶けたのだ。その灼熱の金塊は海水とぶつかり合い、中華料理を作るような音を周囲へ響かせていく。

自分がどのような体勢で着水したのか、マリーディには自覚できなかった。

水の上に叩きつけられ、さらに本来の波ではありえない、無茶苦茶な水の渦に翻弄されていく。それは破壊され、沈みゆく巨大な船の残骸が巻き起こした不自然な水流だった。

「がはっ!!　げほ!!　ごほごほ!!」

どうにかして海面に顔を出し、咳き込みながら摑む物を探すマリーディ。おそらく船の内壁に使われていた物の残骸だろう、薄い板にしがみついて浮力を確保する。

「……イカれてやがる……」

垂直に立った巨大構造物は、まるでバベルの塔のようでもあった。それがずぶずぶと水の底へと沈んでいく。たったの一発で、島のように巨大だった鋼鉄の塊が。

真上を爆音が通過した。

レーザー照射の直前に飛び立った、ＶＴＯＬ性を持った『信心組織』の戦闘機 Harpuiai だ。それはもはや逃げていない。悠々と、勝者の威風を備えて戦闘機は帰還していく。

新たな本拠地。

兵器化レーザーを備えたオーシャンサブステーションへと。

敵軍　四

ＶＴＯＬ性を持った戦闘機Harpuiaiを甲板へ着陸させたラミール＝スコッフロー中佐は、移動式の梯子を使って戦闘機から降りていく。

迎えに来たのはイリス＝アグラベーション准尉だった。

「お疲れ様でした」

「結局、入手できたのはこの一隻だけか」

本来であれば三隻全てを制圧しているはずだった。発電衛星の管制センターも兼ねるオーシャンサブステーションを一つ残らず制御下に置き、その全てから自在に兵器化レーザーを放って戦争の引き金を引く。それが彼女達の計画だったのだ。

「オーシャンサブステーションⅠは先ほどの兵器化レーザーの照射で破壊しました。オーシャンサブステーションⅢの制圧には失敗しましたが、発電衛星管制用のアンテナ施設は破壊し、マイクロウェーブ受電用のパラボラも叩き割っています。我々の乗るこの船だけが、全機能を維持しているのです。実質、莫大な電力を自在に操れるのは我々だけです。妨害は入らない」

「……照射のタイミングは、もう少し遅らせられなかったのか？」
「残念ですが。オーシャンサブステーションⅠについては、『資本企業』のＰＭＣが介入の機会を窺っていました。あれには発電衛星の管制機能が残っていましたから、何としても制圧を阻止する必要があったんです」
「分かった」
兵器化レーザーに巻き込まれた兵士達の事を少しだけ考えたが、ラミールは思考を切り替えた。こうして計画が続いている以上、彼らの死はその礎として機能しているはずだ。
「オリンピアドーム運営側の対応は？」
「傍受しましたが、大した動きはありません。我々に対する具体的対応よりも、観客が真の恐怖を知って暴徒と化さないよう情報統制を行う方へ重点を置いているようです。……いざとなれば、オブジェクトが片をつけてくれるという無根拠な自信もあるのでしょう」
それこそ、彼女達アスレティカにとっては都合が良い。
空腹の迷子の前で七面鳥を振る舞ってくれるようなものだ。
「で、そのオブジェクト連中は？」
「こちらの情報網は強固で傍受も困難です。ですが遠方から観察する限り、まだ動く気配はありません。ただの内輪揉めで終わるレベルか、本格的に戦争をやるレベルか、判断しかねているのでしょう。……このオリンピアドームでは、複数の勢力間で常に大小無数の国際的紛争が

起こっているのですからね」

さっさと動いてくれれば助かるのだが、その前に確かめておくべき事がある。

「兵器化レーザーの出力はどうだった？」

「予定通りの改造には成功しました。ですが、想定していたよりも出力は弱い。今のままではオブジェクトに脅威を与えるレベルに達するかどうか、ギリギリのラインです」

「問題点は分かっているか？」

「先ほどの『試射』で割り出しました」

イリスは抱えている小さなコンピュータを操作しながら、

「送電の際にレーザーを均一的に送る事で安定した電力供給を行う機能があるようですが、このプログラムが設定以上に強力なレーザーを『誤差』と検知し、数値を『均してしまう』問題があるようです。ソフト的な問題です。機材を工業的に加工する必要はありません」

「時間はどれぐらいかかる？」

「今も続行していますが、あと一時間もあれば」

「よし」

ラミールは周囲を見回し、生き残った兵士達に声をかける。

「オリンピアドーム側の無人兵器は使えない。だが生身の兵力や、他の世界的勢力のＰＭＣなどが妨害に入ってくる可能性は否定できない。何としても足止めする。この一発だ。この一発

を撃てるかどうかで、世界の歴史は大きく左右される。分かったな？」

異を唱える者はいない。

彼らは休む間もなく、再び各々の配置についていく。

ある整備兵は襲撃時に破壊した防御システムの代わりに対空兵器を設置させ、ある歩兵は金属製の杭で固定した機関砲の調子を確かめ、戦闘機のパイロット達は愛機へと向かっていく。

ラミール自身も戦闘機 Harpuiai に目をやった。

『信心組織』のロケットイカロス。

アイスガール1のマリーディと同じく、エースパイロットとして特殊な分野で君臨する彼女は、こう宣言した。

「決着をつけてやる」

第五話

1

マリーディ＝ホワイトウィッチは海水で濡れた髪をタオルで拭っていた。
『資本企業』の護衛ＰＭＣが回してきた、小型のモーターボートの船上である。
「オーシャンサブステーションは乗っ取られた、か」
「だがすぐに兵器化レーザーでケリをつけないのは何故だ？」
護衛の男が尋ねてくる。
明確な答えなどないが、マリーディは推測を述べた。
「あれがオブジェクトの主砲クラスの破壊力だとしたら、あのタイミングで脱出しても間に合わなかった。お前達は黒ずんだ炭の回収作業を行っていただろうさ」
「出力が……足りなかった？」
「それで諦めるとは思えない。ここまでやったんだ。何が何でもやり遂げようとするはずだ。

たとえオーシャンサブステーションの主要設備に改造を施してでも」
「まずいな。いつまで猶予があるか計算できない」
「今すぐ撃たれないだけ幸運だと思うしかない」
モーターボートがオリンピアドームの岸壁へと到着した。護衛の男の部下であるＰＭＣのメンバーの他に、やる事もないはずなのに、何故かアリシアやステイシーまで待っていた。
マリーディはモーターボートから岸壁へと乗り移りつつ、
「こちらにはどんなカードが残っている？」
「海上警備をしている『資本企業』のオブジェクトが、現状の混乱に対する説明を求めてきている。どうやら整備基地の面々が独自に情報を集め始めているらしい」
「お前が動いたら全部終わると伝えておけ」
「しかし、オーシャンサブステーションから兵器化レーザーが発射されたとして、各世界的勢力のオブジェクトが簡単に騙されるものか？　あれには大量のセンサーやレーダーなんかも備えられているはずだろう」
「四つの勢力のオブジェクトは作為的にこう着状態を作っていたが、誰もがそれを望んでいた訳でもない。元々暴れたがっていた連中が乗っかる可能性は高い。実際にオブジェクトが動かなくても、『どこかのオブジェクトが動いている』という情報が流布されるだけで爆発が起こりかねない状況なんだ。オブジェクト関連は、それぐらいデリケートだって考えた方が良い。

……くそ、本当に手持ちのカードは何もないのか」

挙げ句、オリンピアドームが戦乱に巻き込まれ、テクノピックの選手団数千人が殺害されれば、世界各地で民衆の怒りが爆発する。大規模なテロや暴動の乱発は『安全国』と戦場の区分を崩壊させ、安定していた社会の歯車、金銭を循環させるシステムそのものを破壊しかねない。

すると、ステイシーが小学生のように小首を傾げ、

「さっきと同じようにこっそり潜り込めば良いのでは？」

「銃撃戦で混乱していた船上と、完璧に制圧されて防御システムを更新した船上じゃ難易度が違いすぎる。あの船に何百人の兵士が配置されているかも分からないんだ。その全員が銃口を向けてくるんだぞ」

「外から吹き飛ばすのが手っ取り早い」

護衛の男は早口で言う。

「電力そのものは発電衛星からのマイクロウェーブで補っているんだ。せめてあのデカいパラボラだけでも破壊できれば……」

「巡航ミサイルでも持ってくるか？　だが相手は不完全とはいえレーザー兵器を実用化している。一直線に飛ぶミサイル程度なら迎撃される可能性が高い。放物線を描く迫撃砲なんかも同じだ」

圧倒的な数があれば、レーザー迎撃が追い着かなくなる事もあるかもしれない。だが、そも

そも巡航ミサイルなど『護衛用』のＰＭＣが準備している訳がないのだ。
あの兵器化レーザーをかいくぐり、大量の砲弾やミサイルを叩き込めるカード。
それがなければオーシャンサブステーションを止められない。
泥沼の戦争の引き金が引かれ、オブジェクト同士の戦闘に巻き込まれるオリンピアドームは、内部に数千人の選手達と数百万人の観戦客を収めたまま吹き飛ばされてしまう。
マリーディは顎に手をやり、深く考えて、
「……いや、あるぞ」
「？」
「どこかで見た。使えるカードは必ずある。私は見たんだ。どこかで……」
呟く事で頭の中にある情報を改めて整理し、思考の糸口を探すマリーディ。
そこで、彼女は弾かれたように顔を上げた。
「そうだ。アスレティカの貸倉庫!!　あそこには『資本企業』とは関係のない兵器が山ほど収められていた!!」
「あそこは今も俺達の部隊が制圧しているが、巡航ミサイルがあるなんて報告は聞いていないぞ」
「違う」
噛み締めるように、マリーディは告げる。

「オブジェクトの登場で、すでに役目を終えた兵器と言われているが、私はそんなもの信じない。どれだけ窮屈だろうが、大空は常にそこに広がっているんだ。時代遅れと呼ばれ、それでも天空で踊りたがっているエース達の舞台が」

「？」

怪訝な顔をする護衛の男に、マリーディは自分の胸を親指で差してこう言った。

「私は元々パイロットだぞ。欲しいのはヤツらの戦闘機 Harpuiai だ」

2

マリーディ達は、以前制圧した貸倉庫へ到着した。

キャットウォークTVのルーカス＝ウェスタンローズは倉庫内でスマートフォンをあちこちにかざして映像を録画しているようだが、そんな中に目的の物があった。

『正統王国』の S/G-31 に外装を整え直した『信心組織』の Harpuiai だ。おそらくオーシャンサブステーションを襲撃するために用意されていた兵器の一つだろう。

すでに燃料も兵装も全て整えられていた。

マリーディは移動式の梯子で機首へ上ると、コックピットの内部を覗き込む。

「中身はやはり『信心組織』方式か」

「操れるのか？」

護衛の男が梯子の上のマリーディを見上げながら尋ねてくる。

マリーディは小さな尻をわずかにもぞもぞ動かしながら、

「以前、北欧禁猟区で奪った機を乗り回した事がある」

「……どれだけ泥沼なんだ、君の仕事場は？」

問われても彼女には答えようがない。マリーディ＝ホワイトウィッチにとっては、生身の殺し合いの方が平均値だからだ。

マリーディはコックピットに乗り込み、システム起動キーを回す。各種計器のスイッチを順番に入れていき、光の入ったモニター群へ直接人差し指を当てて細かい調整を行っていく。

フラップやラダーの調子を確かめながら、眼球の動きを操縦へ応用するためのゴーグルを顔に掛け、酸素吸入用の装備を身に着ける。それは一般的なヘルメットとマスクの組み合わせではない。ヘッドセットのようなパーツで、口元に酸素を放出するためのチューブが伸びている。喉には小型のマイクを取り付け、気管の動きに連動して酸素が放出されるよう数値を設定していく。

ヘルメットとマスクの方が単純かつ効果も高い。

にも拘わらず、敢えてそれを避けているのは、

（……やはり、『信心組織』も事情は同じか。使い物にならない戦闘機の開発なんて、単体で

は行われない。オブジェクト関連の技術開発の一端として国防費を回してもらっている訳だ）

一般的に、オブジェクトの操縦士エリートはヘルメットなどで顔を隠さない。

国家の代表は凛々しい顔をさらしたまま戦う。それをコックピット内部のカメラで撮影し、都合の良いシーンだけを切り取った上で、民衆へ大々的に放映する。分かりやすい戦略広報というヤツだ。

「上翼、尾翼、共に問題なし。続けてジェットエンジンとレーダーのテストを行う」

「おっと。離れるまで待ってくれ。電子レンジみたいに焼かれるのはごめんだ」

慌てて護衛の男が部下達をジェスチャーで遠ざけさせる。

マリーディはそれを確認してから、コックピットの透明な風防を閉じ、ジェットエンジンを点火させた。ブフォウ!!　という爆音と共に、貸倉庫の備品が真後ろへ吹き飛ばされていく。

風防を閉じているので肉声は届かない。

無線を使ってマリーディは護衛の男に話しかける。

「出力、問題なし。ベクタースラストノズル用の三次元パドルも正常に機能。垂直上昇用に推力を分岐、問題なし。レーダーの照射開始、問題なし。このまま行くぞ」

『俺達は管制の真似事をさせてもらおう。ちょっとは稼がせてくれ』

「……どうやって？　オリンピアドーム側は空港の管制室とレーダー設備をレンタルしてくれるのか？」

【harpuiai】
harpuiai

全長…17.1メートル

全高…5.5メートル

全幅…13.1メートル

火器最大装備時重量…25.3トン

最高速度…時速2550キロ(アフターバーナー使用時)

用途…多用途戦闘機

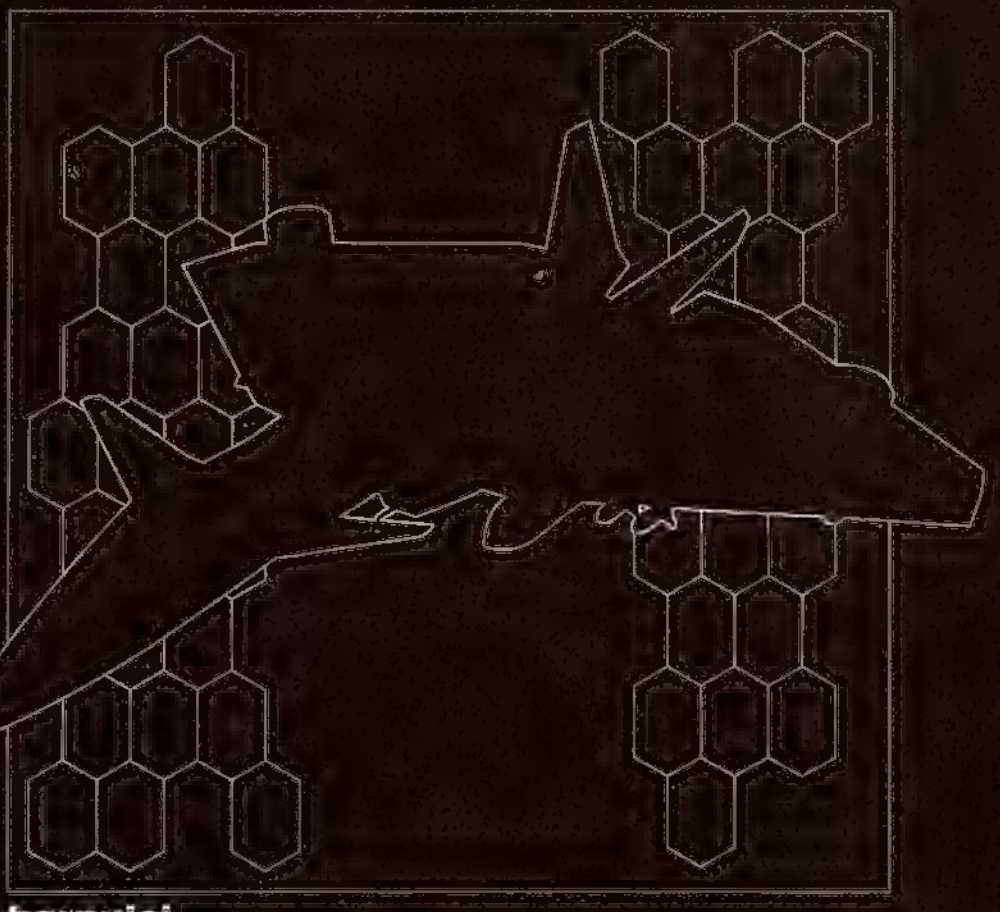
乗員…1名

運用者…『信心組織』(『正統王国』所属と誤認させている)

動力…ギリシア圏営空軍戦力工場製prometheus V×2
(VTOL推力可変モデル)

兵装…短距離空対空ミサイル×12、400キロ爆弾×2、20ミリ機銃×1、
光波長ジャミングポッド×2、電磁波ジャミングポッド×2

メインカラーリング…グレー



harpuiai

『ドップラーレーダーならあるんだ』

護衛の男は意外な事を言った。

『竜巻調査用に大学で使われていた、球状の気象用ドップラーレーダーを搭載したトラックを買い取った。早期警戒装置としても使える。元々は巡航ミサイルによる襲撃を想定したもので、反応があった場合は君を迅速に耐爆装甲車へ放り込む手はずになっていた』

「……耐爆装甲車なんて便利な物に心当たりはないぞ」

『そっちの使用許可が下りなくてな。結局、巡航ミサイルの接近は分かってもカウントダウンを待つだけの構成になってしまっていたんだ』

なんてザマだ、とマリーディは頭を抱えた。

そんな彼女を地上から見上げる護衛の男は苦笑いしながら、

『だが、これで最低限の管制機能は掌握できそうだ。できる事は限られているが、君のサポートをさせてもらう』

「略語のサインは『資本企業』空軍式で良いな？　私の作戦内名称はいつも使っているものにしよう。アイスガール1。アイス飛行隊のリーダー機でアイスガール1だ」

『了解。ではこちらは特に捻らず管制としようかアイスガール1』

護衛の男の言葉を聞きながら、マリーディはジェットエンジンの推力を慎重に操る。戦闘機には自動車のように車輪そのものを回転させたり、ブレーキで停めたりする機能はない。ジェ

ットエンジンで前進するか、ジェットエンジンを停めて停止するかの二択しかない。通常、空軍基地などで戦闘機を移動させる時は、専用のトラクターで牽引してもらうはずなのだ。

それを無理にジェットエンジンの推力だけで動かし、貸倉庫の外へ戦闘機を出すマリーディ。さらに今度はジェットエンジンの推力を分岐させ、真下に向けて噴射させる。

ぐらり、と機体が不安定に揺れた。

ＶＴＯＬというのはいつだって心臓に悪い。少し横風が吹いただけでひっくり返る恐れがある。これで波に揺られる空母に着艦するような連中の気がしれない、と歴戦のエースであるマリーディですら考えてしまう。

それでも二〇メートルほど上昇すると、今度は真下へ噴射していた推力を、再び真後ろへと戻していく。本来の配置に従って、Harpuiai は凄まじい速度で大気を切り裂いた。

真下へ叩きつける力は失われたはずなのに、今の方がかえって安定していた。

やはり飛行機とは、主翼で空気を切り裂いてこそ本領を発揮するものなのだ。

ようやく一息ついたマリーディの耳に、通信が入る。

意外な事に、護衛の男でもアリシアでもなく、第一声はキャットウォークＴＶのルーカス＝ウェスタンローズのものだった。

『もしもし、はい、はい、管制よりアイスガール1、で良いんでしたっけ？　ええ、はい、コックピットの中に私のスマートフォンがあるはずですが』

「……、」

確認してみると本当にあった。

離陸前、コックピットの風防が開いている間に投げ入れたのだろうか？

『はい、はい、すでに動画アプリは起動しています、ええ、はい。後は前面にレンズを向ける形で固定していただければありがたいのですが』

「付き合う義理はないぞ」

『もしもし、では捨てていただいても結構ですが、ええ、はい、その速度で風防を開けたらどうなるかはご存知ですよね？』

軽く舌打ちしたマリーディは、半ば投げやりな調子でスマートフォンを摑む。

が、彼女は素直にルーカスの命令に従うのではなく、小さな画面を人差し指で操作して、楽曲再生アプリを呼び出した。

「ふうん」

楽曲リストを呼び出し、羅列されるハードロックの曲名に目をやりながら、

「いけ好かない野郎だが、やっぱりマスコミ関係者だな。選曲のセンスだけは良い線してやがる」

動画再生アプリと楽曲再生アプリを同時起動させ、マリーディはスマートフォンに粘着テープを張り付けて固定した。馬鹿馬鹿しい事だが、離陸してからジャケットの耐G機能の異常に

気づいた時などの応急処置用として、こうした物が持ち込まれるのだ。

しかし、突然始まった爆音に目を回したのは管制を務める護衛の男達の方だった。

『管制(CT)よりアイスガール1！　何だこりゃ!?』

「ボーイレーサーのエンドオフだ。ハードロックの奇才がまだ正気だった頃に発表した名盤だよ。この説明必要か？」

『うるさくて君の声が聞き取れん！』

「文句ならスマフォなんか持ち込んだ報道関係者に向けるんだな」

『あのう……はい、楽曲垂れ流しにされてしまうと、はい、はい、放送時の使用申請で余計な出費がかかるのですけど、はいー……』

「うるさいな。そもそも絶対に放映できないような絵作りにしてやるよ」

マリーディが毒づいたところで、今度はアリシアから通信が入った。

『管制(CT)よりアイスガール1へ。オーシャンサブステーションは現在海上三五キロの地点にあります。そして今もオリンピアドームから離れる形で航行中。おそらく我々からの反撃を少しでも制限させるため、さらに「一発目」を海上のオブジェクトへ撃ちやすい位置へ移動しているのでしょう』

「マッハ二で進む戦闘機にとっては、目と鼻の先だ」

『向こうもそれを認識しているはずだ。来るぞ、方位Nから二機、NENから二機、NEから

三機。おそらくいずれもHarpuiaだ!!』

「了解、電波照射!!　交戦を開始する!!」

『向こうからもだ！　電波照射確認!!　気をつけろ、いきなり交差するぞ!!』

実際の風景とレーダー上の情報を重ね合わせるゴーグルに、いくつかの四角いコンテナが出現した。肉眼ではまだ砂粒のようだが、電子の目はすでに敵機の位置を捉えている。

先に空対空ミサイルを発射したのは、真正面の敵機の方だった。

『誘導開始!!　回避しろアイスガール1!!』

（だが照射時間は短い。照準完了はしていなかった。おそらくハッタリだ、実際に誘導はできない！　私が泡を食って急旋回したところで、修正コースに機銃をばら撒くつもりか。自由な空なんて、慣性の力でいくらでもコースが制限されるからな!!）

マリーディは即決すると、敢えて旋回を行わず、そのまま真っ直ぐ突っ込んだ。スーパークルーズ可能なHarpuiaであるはずなのに、さらにアフターバーナーまで作動させて全速力を叩き出す。

コックピットの数メートル先を、細い噴射煙を吐き出す空対空ミサイルが通過した。

だが爆発はない。

マリーディは操縦桿を改めて強く握り、人差し指の腹でトリガーを軽く撫でる。

機銃のスイッチだ。

『空対空ミサイル、回避を確認!!』

「情報が遅いぞ、機銃発射!!」

慌てたのは、マリーディが急旋回すると踏んで機銃の準備を進めていたアスレティカ側のパイロットだろう。だが回復を待ってやる義理はない。マリーディはそのまま毎分四〇〇〇発の勢いで機銃の弾丸を叩き込んでいく。

実際の交差は一瞬だった。

複合素材の塊は互いに直進し、即座に旋回して再びの接近を狙う。

ただし、その内の片方には黒煙のラインが伴っていた。

『着弾確認、交戦維持!!』

「ま、ヘッドオン一回で落とせるほど甘くはないか」

『手負いを追いすぎるなよアイスガール1。真後ろから他の機が接近している。美味そうな標的を追う君をさらに後ろから追う動きだ。典型的な串刺しに引っかかるな!!』

「ではイタズラの時間だ」

マリーディは大量に並ぶスイッチの一つを人差し指で弾く。

直後に、敵味方を区別するための識別信号がレーダー上に表示された。

マリーディを取り囲むアスレティカと全く同じ信号を、だ。

『な、ん!?』

「元々、連中から鹵獲した兵器なんだ。敵味方の区別なんかない。近距離の乱戦でちょっとは混乱してくれよ」

現に、真後ろから追ってきているHarpuiaiはともかく、周囲から追いこもうとしていた他の七機の挙動には明らかな動揺があった。同じ機体に同じ信号。これで敵味方を区別するのは不可能だ。そしてマリーディは最初から、自分以外は全て敵だと認識している。信号の有無などどうでも良い。

コイルを巻くように、マリーディは大きく機体を回転させながら前方へ進ませる。バレルロールという特殊な挙動で、後ろから迫いすがる敵機の目を眩ませるのと、自分の乗っている戦闘機を急減速させるために使われるものだ。

わざと急減速する事で、後ろにいた敵機に追い抜かせるために。

当然、戦闘機と戦闘機の戦いは、いかに後ろを取るかに全てがかかっている。

「電波照射、照射完了、誘導開始」

数え歌でも口ずさむように呟きながら、マリーディは操縦桿を握る親指で空対空ミサイルを発射させる。

識別信号で混乱し、さらにバレルロールでいきなり標的を見失ったアスレティカのHarpuiaiに対処できるはずがなかった。

さらに付け足すように、マリーディは歌う。

「着弾確認（アタックアルタ）、撃墜（ストライク）だ」

バム!!　という爆発音と共にオレンジ色の炎と複合素材の破片がばら撒かれた。音速超過の戦闘機でも、真正面からの爆発なら音を歪んだ形で認識できる。マリーディは爆発を確認した瞬間に操縦桿を操って機体を大きく旋回させたが、何か爪で引っかくような音が機体の内部にまで伝わってきた。

（破片を多少被ったか）

『管制（CT）よりアイスガール1へ!!　これでは俺達も君の位置を捕捉できない!!』

「今使っているこの通信の送信元を洗え！　頭を使うんだ。向こうだって、ほんの数分もすれば同じ事を思いつくさ!!　だからそれまでにできるだけ数を減らす!!」

Harpuiaiを一機落としたが、それでもまだ一対七。

機体の性能が全く同じなら、正直言ってまず間違いなく勝てる状況ではない。パイロットの腕で補えるレベルを超えている。そしてマリーディの目的は、この空域の制空権を確保するため、全ての敵機を撃墜させる事ではない。

「最低限、強引に突っ込める程度には弾幕を薄くさせる！　半分も減らせられれば十分だ。オーシャンサブステーションへ空対空ミサイル（AAM）を数発も撃ち込めば、それで私達の勝ちなんだか

らな!!」

『アイスガール1の位置を特定。四方向から敵機が君を追っている！　回避だ、電波照射、回避しろアイスガール1!!』

「全部で七機、四方向。つまりどこか一方向に必ず一機だけのところがある。なら、そこから喰わせてもらうとするか」

複数の方向から同時に機銃のオレンジ色のラインが襲いかかり、マリーディはそれらをギリギリのところで回避していく。彼女は操縦桿を傾け、最小限の旋回半径で、単独一機で活動するHarpuiaiの背後へ回り込もうとする。

（当然、それは向こうも予測できているだろう）

小さな体にのしかかる慣性のGに歯を食いしばりながら、マリーディは考える。

（その弱点を埋めるため、向こうは私の後ろへ張り付いて串刺しにしようとするはずだ）

その動きもまた予測できているのであれば、裏の裏をかく事だってできる。

つまり。

マリーディはいきなり機体を八〇度垂直方向へ立てた。

莫大な空気抵抗によって、彼女の操るHarpuiaiが急激に減速する。

プガチョフ・コブラという特殊な挙動だ。通常のエアブレーキとは比べ物にならない空気抵抗によって、真後ろに張り付いた相手を一気に前方へ追い抜かせるためのものだった。だが当然ながら、機体をほぼ垂直に立てる事はバランスの問題を浮上させる。機体そのものの安定性と、パイロットの正確な操縦、そして何より急減速による凄まじいGで意識が飛ばないようにするための忍耐力も必要だ。

マリーディ＝ホワイトウィッチはその全てを揃えていた。

だが考慮すべき事がもう一点。

連日のシュートアスロン競技に、その合間を縫うように繰り返された襲撃。

その莫大な疲労である。

「……ッッッ!!!??」

予想よりもグラリと揺れる視界。頭の中心に突き刺さっている、意識を繋ぎ止める杭のようなものを引っこ抜かれるような感触。奇妙な浮遊感と共に、胃袋の中身が進路を見失って体内で暴れ回るのを自覚する。

だが抑え込む。

操縦桿を握り締める硬い感触に意識を集中し、そこから一気に戦闘意欲を取り戻す。

機体の制御が回復する。

彼女を追っていた五機ものHarpuiaiがまとめてマリーディの前方へ叩き出される。今まで

追っていた単独一機も含め、六機もの戦闘機が一気に攻撃可能範囲に収まる。

マリーディは迷わなかった。

こういう状況では、空対空ミサイルより機銃掃射の方が素早く攻撃できる。

「機銃発射!!」

一つ一つの標的を繊細に照準へ収めるのではなく半ば横薙ぎに払うように、狙撃ではなく掃射の感覚で一気に銃弾をばら撒いていく。自分の乗っている戦闘機と全く同じ機体が、グズグズに崩れていくのをマリーディは目撃した。もう一つの自分の末路。そんなパラレルな錯覚を抱きかねない情景の中、黒煙と破片とオレンジ色の爆炎が網膜に飛び込んできた。

『着弾確認!!　撃墜、撃墜、撃墜！　……っ、二機は交戦維持だ!!　そのまま喰らいつけ!!』

「冗談。大空で欲をかくほど命知らずじゃない。残った野郎が私のケツを舐め回そうとしている。噛みつかれる前に、本来の目的を果たすとするさ!!」

二機は撃墜、二機は生き残っているが主翼や胴体から黒煙を発し、本来の性能を発揮できない状況にまで追い込んだ。

アスレティカ側で正常に動けるのは一機だけ。

万全を期すならこいつらにもダメージを与えておくべきだろうが、オーシャンサブステーションの兵器化レーザーがいつ照射されるかも分からない状況では、多少無理をしてでも突っ込

むしかない。

二機ぐらいなら、振り切りながらでも対艦攻撃は行える。

その余裕こそが、実際の空戦でベテランを散らせる一番の難敵なのだが、マリーディは無理にでもポジティブに考えて指先の震えをごまかす。

今は命惜しさに戦局を左右させるような安穏とした状況ではない。

（まあ向こうの防御システムもアスレティカ製に更新されているだろう。となると対空機銃やミサイルが山ほど飛んでくるかもな）

大空を舞うHarpuiaを無視して、マリーディは大きく操縦桿を動かす。機首をオーシャンサブステーションへ向ける。日線を読み取るゴーグルでプログラムを操作し、パラボラアンテナを画像認識で追尾できるように設定し、ロックを完了させる。

「照準完了」

対艦攻撃で一番面倒なのは、相手が停まっている事だ。狙いやすいかと聞かれればそうでもない。油断していると、あっという間に追い抜いてしまうのだ。相対速度を合わせて『止まったように』見せられる空中の格闘戦の方が、マリーディにとっては手慣れたものだった。

「誘導開始!!」

声と共に、二発の空対空ミサイルを発射していく。

狙いは船そのものではなく、甲板上に並べられている四つのパラボラアンテナだった。船を

攻撃するなら船腹がセオリーだが、専用の対艦ミサイルではない空対空ミサイルでは『海面すれすれを』飛ばすのが難しい。下手に狙うと海面に突き刺さりかねない。しかも、オーシャンサブステーションの装甲の強度も測りかねるところがあった。『此二細な傷が墜落に結びつく』戦闘機を落とすために設計された空対空ミサイルで分厚い船腹に風穴を空けられるかどうか、自信がなかったのだ。背後から迫る敵機を振り切るため複雑な軌道を描くマリーディとしては、水平飛行を求められる自由落下型の爆弾も使えない。

（……蝶を落とすための輪ゴム鉄砲で亀の甲羅を狙うようなものだ。それなら、亀にくっついたひらひらの羽を撃ち抜く方が合理的だな）

いくら何でも、パラボラアンテナぐらいなら破壊できるだろう。

そしてアンテナを破壊できれば、発電衛星から降り注ぐマイクロウェーブを受電できない。慌てて舵を切ったところで、流石に全長五〇〇メートルの巨体でミサイルを回避できるはずもなかった。

だが。

唐突に、大型船へ向かう二発のミサイルがストロボのような光を発した。

直後に空対空ミサイルは空中で木っ端微塵に爆発してしまう。

『回避、回避だ。だがあれは……!?』

「っ!!」

護衛の男の声を聞かず、マリーディは全力で操縦桿を捻った。

目の前で起きた現象を正しく認識した彼女は、急いで機体を海面すれすれの位置まで降下させる。

(レーザーで迎撃してきた!? まだ兵器化は進んでいないはずだが、わざと出力を下げた状態で照射する事で、連続的に発振させたんだな!!)

レーザー光は本来、真横から肉眼で捉える事はできない。オブジェクトなどの高出力レーザーが肉眼で観察できるのは、空気中の塵や水分が焼かれた跡が見えるためだ。

そこまで派手な痕跡を残さない程度。

しかし確実に空対空ミサイルを落とせる程度の連射。

推進力を持たない爆弾ならさらに命中の確率は減る。

それは当然、ミサイルや爆弾以外にもマリーディの乗る戦闘機 Harpuia だって撃墜できるはずだ。

『何とかできそうか!?』

「できなければ落とされる!!」

マリーディが海面すれすれに機体を降下させたのは、高度を下げた方が塵が多くレーザーが

減衰や屈折をしやすいからだ。また、地面や海面から立ち上る熱によって蜃気楼が発生するチャンスもある。大西洋のど真ん中、赤道直下という事も考えれば可能性は低くない。

それでも、レーザーを確実に回避できる保証はなかった。

さらに問題が一つ。

（くそっ!!　オーシャンサブステーションの壁が近づいてきた!!）

巨大船舶の高さは二〇メートル、海面に出ているだけでも二〇メートル前後はある。海面すれすれを進んでいるマリーディは、このままだと船腹に激突してしまう。

マリーディは操縦桿を握り直し、

（こういうアクロバットは勘弁してくれ!!）

機体の前後に串を刺し、九〇度回転させるような格好でマリーディは戦闘機を垂直に立てる。そのまま機体を急旋回させた。主翼の端は水面から五〇センチぐらいしかない。こんなものは凄まじいGに襲われながらやるような精密作業ではない。

オーシャンサブステーションから一〇メートルの位置まで迫り、マリーディはようやく旋回を果たす。

ついでに人差し指を操り、特に狙いも定めずに機銃を乱射させた。

旋回中の機首の向きに合わせて、ミシン目のようにオーシャンサブステーションの船腹へ弾丸が叩き込まれていく。

（やはり駄目か。仮に風穴を空けたとしても、海面より高い位置じゃ浸水はしない）

甲板に設置された機関砲や艦対空ミサイルもマリーディを狙ったが、距離が近すぎたのがかえって幸いした。防御システムは標的を取り逃がし、海面へ大量の水柱を生み出していく。

（むしろ離れる時が心配だ。向こうにケツを見せる訳だしな）

旋回のために垂直に立てていた機体を水平へ戻し、若干高度を上げてから小刻みに蛇行させて機関砲の照準から逃走を試みる。

機関砲に、艦対空ミサイルに、とどめは低出力制限の対空レーザー。

「よりどりみどりだな」

『発電用のマイクロウェーブを使われれば通信や照準も狂わされる可能性が出てくる。やはり一筋縄でいく相手じゃないぞ』

だがやるしかない。

遅れて、再びマリーディの包囲に取り掛かろうとするHarpuiaiの生き残りを回避しつつ、マリーディは次の攻撃の準備を進める。

（甲板上にいた女）

警告ブザーに顔をしかめながらも、マリーディは別の事に意識を割く。

（『信心組織』系のエースパイロット。連中の政府系報道で顔も観た事がある……。まさか、ロケットイカロスのラミールースコッフローか!?）

3

オーシャンサブステーションの甲板上にいたラミール＝スコッフローは、巨大船舶から、時的に離れていく敵性のHarpuiaiを睨んで歯噛みした。

間近まで接近された事で、彼女は風防の中にいる人影を目撃していた。

「航空ＰＭＣ『スカイブルー』のエースパイロット……アイスガールＩのマリーディー＝ホワイトウィッチが介入していたか!!」

確かに、シュートアスロンの選手としてメダルを獲得していたはずだ。そして、北欧禁猟区の泥沼で鍛え上げられたあの女なら、今までの妨害の手際の良さも頷ける。

ラミールは甲板上で今も作業している整備兵達へ振り返った。

「作業の方はどうなっている!?」

いちいち直立不動で敬礼しながら、整備兵達は口々に答える。

「機体上面の受電用可動板は完了しました!!」

「下面の照射装置も取り付けは終わっています。後はソフト面のアップデートが完了すればいつでも出せます!!」

ラミールは整備兵の一人に近づき、彼が持っている小型コンピュータを覗き込んだ。残りは

数分だ。

「よし。どうせ兵器化レーザーの作業が終わるまでは、発電衛星から降り注ぐマイクロウェーブは宝の持ち腐れだ。迎撃用にレーザーの出力を落としても、機銃の掃射までは防げないし、あのアイスガール1ならかいくぐって接近してくる。先ほどの機銃攻撃も、パラボラを狙われていれば危なかった。レーザーだけでは脅威を取り除けない。だったらマイクロウェーブは他の使い道に役立てた方が良さそうだ」

「通常、マイクロウェーブのせいで衛星にコマンドを送る事はできませんが、太陽風で乱れるタイミングで命令を送り、中佐機を大まかに追うようにします。一度マイクロウェーブを受電して電力に変換してから、再び発振器でマイクロウェーブを放射する仕組みです。機内に電力を溜め込むため、衛星よりさらに強力になるはずです」

「戦闘機を落とすだけの強度があれば十分だ」

移動式の梯子に手をかけたラミールの耳に、通信でイリスの声が飛んでくる。

『中佐。行かれるのですか？』

「そうだ」

『パイロットの候補は他にもいます。優れた作戦指揮能力を持つ中佐は、今後のためにも温存されるべきだと進言したいのですが』

「その候補達を向かわせたら、半分以上が落とされた　私が行かない訳にはいかないだろう」

それに、とラミールは呟き、

「今後などない。ここだ、この一発を撃てるかどうかに私達の全てが凝縮されている。腐ったテクノピックを完全に叩き潰し、健全なオリンピックを取り戻す。教科書や歴史年表アーカイブにしか存在しない、誰もが熱狂できる平和の祭典をだ。だから安易に次など考えるな、准尉。それは黙って手を広げていれば必ず渡されるものではない。私達には、今しかないんだ」

怒鳴るのではない。静かな声に込められた威風でイリスを黙らせる。

ラミールは移動式の梯子に手をかけたまま、改造型 Harpuiai を見上げてこう呟いた。

「マイクロウェーブ兵装。……こいつであのエースを叩き落としてやる」

4

『オーシャンサブステーションは向かってくる空対空ミサイルを必ず迎撃しなければなりません。まずパラボラに向けて空対空ミサイルを発射し、向こうがその迎撃に集中している間に高度を上昇。機銃を使ってレーザー照射装置そのものを撃ち抜くのが最善の策かと思われます』

「……連射能力の限界を調べられないのが怖いが、やはりそれしかないか」

黒煙のラインを描きながらもマリーディへの攻撃の意思を保ったままの敵機をさらに減らしながら、マリーディは方針を決定させる。

（……オブジェクトが動く気配はまだなさそうだな。今の内にアスレティカを叩くしかない）

あれが動けば戦局は一気に支配される。超大型兵器とはそういうものだ。破滅のトリガーがまだ引かれていない事だけは安堵するより他ない。

『レーザーなどのインパクトに惑わされがちだが、状況を鑑みればこちらの方が有利だ。あの船を沈める必要はない。パラボラか照射装置。甲板上にあるデリケートなデバイスのどちらかを破壊できれば良いんだ。もう刃は喉元に押し付けてある。後は刃を思い切り横へ引いてやれ！』

「交差した刃はこっちの喉元にも押し付けられているんだがな!!」

叫び、機首を洋上のオーシャンサブステーションへ向け直し、マリーディはジェットエンジンの出力を一気に上昇させていく。

その時だった。

警告ブザーがコックピット内に鳴り響く。それはミサイル照準用のレーダー波を照射されている事を示すものだ。

『電、波照射。方、位……SE、距……離……二、〇……』

「……？」

マリーディは怪訝な顔になる。

通信の様子がおかしい。いや、通信だけではない、レーダーにノイズが走り始めたと思った

らあっという間に緑色の砂嵐になり、ついにはコックピットを満たしていた警告ブザーすらブツブツと途切れ出してしまう。ゴーグルに表示されていた敵機の位置を示す四角いコンテナも消えてしまった。かろうじて、速度や高度、方位などを示すデジタル表示だけが残っているぐらいだ。

（なん、だ……？　ジャミング？　いや違う。レーダーや通信はともかく、片っ端から計器を潰しにかかる電波妨害なんて聞いた試しがない。何が起きている!?）

レーダーが使えないので、マリーディはシートベルトに戒められたまま、無理矢理に首だけを動かして真横や後方の情報を得ようとするマリーディ。

そこで彼女の顔がギョッと強張った。

右側の主翼の表面が、オレンジ色に輝き始めている。前縁に取り付けられた薄いフラップの辺りが特にひどい。おそらく後縁のものもそうだろう。肉眼で確認できないが、主翼下に懸架してある空対空ミサイルなどがどうなっているかも不安になる輝きだった。

正体不明の現象にしばし呆然とするマリーディだったが、

（……突然起きた様々な電波障害、そして右の主翼に現れた不自然な高温現象。まさか……）

「マイクロ、ウェーブ……？　アイスガール1より管制へ！　水平方向からマイクロウェーブが照射されている!!　推測に確信を得たい。情報をくれ！　そちらのレーダー上で異変はないか!?」

『ジジ……ジジジ……ジジジガガガガ』

「くそっ!!」

マリーディは舌打ちし、操縦桿を大きく動かす。敵の使う兵器の威力を予測できない。表面塗装やフラップ等の油の発火から動作不良を招くかもしれないし、最悪、航空素材の融解だってありえるかもしれない。『敵は右側から攻撃を仕掛けてきている』と想定し、とにかく派手に旋回して敵機からのマイクロウェーブ照射攻撃を回避しようとする。

だが駄目だ。

どれだけ派手に機体を操っても、並の機銃や空対空ミサイル程度なら回避できる状況を作っても、それでもマリーディの操るHarpuiaiのどこかがオレンジ色の輝きを放つ。被照射面が変わるだけで、照射そのものを回避する事はできない。

(いいや、回避はしているんだ、回避は!! だが向こうの照射範囲が思ったより広い。真正面一直線の『本命』が直撃していないから撃墜は免れているものの、懐中電灯みたいに広がる電磁波の余波をどうしても喰らってしまう!!)

今時の戦闘機は(実際に勝てるかどうかはさておいて)対オブジェクトを想定している。

相手が対空レーザーを所有している以上、ロックされて発撃たれればおしまいだ。

だから、戦闘機側は様々なジャミングを駆使してロックされる事を阻害し、同時に超低空を高速で移動する事によって、山や谷などの地形がロック用のレーダー波を乱反射させてしまっ

たり、塵や埃、蜃気楼などによってレーザーが屈折してしまったり……といった事態を誘発させようとする。

しかし、電磁波そのものの照射から完全に逃れる事はできない。

できないから、ジャミングや乱反射などを利用して『浴びても大丈夫』な状況を作る。

（その最初の電磁波照射の段階で損害が出るならどうしようもない！　既存の空戦の法則で戦い続けたら、直撃はなくてもジリジリと削り取られていくだけだ!!）

特に熱の影響を受けやすいフラップなどが一定以上の損害を受けて使い物にならなくなれば、操縦桿の動きに機体が応えてくれない状況に陥る。さらに主翼下の空対空ミサイルの信管が電磁波で誤作動を起こせば、今この瞬間にも爆発に巻き込まれる恐れすらある。

蓄積するダメージによって回避挙動に遅れが生じれば、懐中電灯のように広がる『余波』だけでは済まない。真正面へ一直線に放たれる『本命』を当てられて機体を吹き飛ばされる。

（だがこちらも摑んだぞ）

マリーディは操縦桿を派手に動かしながら、頭の中で情報を整理する。

（これだけ様々な方向からマイクロウェーブを当てられているんだ。相手は鈍重なオーシャンサブステーションじゃない。発電衛星から直接降り注いでいる訳でもない。戦闘機のどれかが送電ユニットを装着しているんだ!!）

これまでの機体ではないだろう。

こんな隠し球があるなら、最初から使っているはずだ。
後になって、戦場へやってきた機体。
改造型 Harpuiai。
（ロケットイカロス……。甲板上にいたあのエースが出てきたか!!）
『ジジ……ール1……』
一時的に照射の範囲から逃れたせいか、わずかに通信が回復する。
護衛の男がこんな事を言っていた。
『専、門用語を……思い浮かべるか、ら……事態を摑めな、くな、る。マイ……クロウェー、ブだな……んて考え、る、な。テレビ、の電波……を思い、浮か……べろ。どん、な状況な、らテレビ……の映りは悪、くな、る？　そ……れを応、用すれ、ば、マイク、ロウ、エーブ……に、も……ガガガ……』
（なるほど）
徐々に蓄積する損害を止められず、だがマリーディは必死に突破口を思い浮かべる。
テレビの映りが悪くなる理由。
電波が干渉を起こす理由。
山や谷など、地形によって電波が弾かれてしまう場合。
ビルやトンネルなど、人工的な構造物に電波が弾かれてしまう場合。

より強力な電波によって干渉されてしまう場合。
空の気温差によって電波の進行方向が曲がってしまう場合。
砂嵐など大気中の不純物によって電波が弾かれてしまう場合。
ざっと頭の中でリストアップしていくが、
（このだだっ広い海の上で、そんな条件に恵まれるはずがあるか!!　せめて、せめてもっと人り組んだ地形であれば……!!）
遮る物が全くない大西洋のど真ん中。完全に開けた空間。マイクロウェーブ兵装にとってこれ以上使いやすい環境はないだろう。回避する側のマリーディにとっては最悪の組み合わせだ。
「……いいや」
マリーディは呟いた。
「あるにはある。あのマイクロウェーブの回避に使える地形が!!」
自分の中で意見を束ねると、マリーディは即決した。操縦桿を大きく動かし、戦闘機を目的地へ向けて突っ切らせる。
そう。
大西洋に浮かぶ巨大人工浮揚島、オリンピアドームへ。

5

改造型Harpuiaiを操るラミール＝スコッフローはマリーディ＝ホワイトウィッチを追っている内に、相手の意図を摑み取った。

（もうマイクロウェーブに勘付き、具体的な対策まで練り始めたか）

状況の正体を探る力と、そこから有効な手を編み出す力はまた別物だ。

マイクロウェーブ兵器というこれまでの経験則の通じない出来事を前に、即座に次の手を組み上げるマリーディの速度に、ラミールはごくりと喉を鳴らす。

（オリンピアドームは目玉焼きのような形をした人工島だ。ドーム内には入れなくても、外周部のビル群に飛び込めば電磁波干渉を誘発できる……!?）

ビルそのものを盾にしたり、あるいは乱反射の誘発によって本来の破壊力を発揮できない状況を作り出す。それが向こうの狙いなのだろう。そして隙あらば反撃に移る。機銃やミサイルはもちろん、超高速でビル群を通過していくのだ、それらの構造物への激突も十分なリスクとなる。

（正気か、クソ、だが、やるしかない、あの脅威だけは確実に取り除かなければ!!）

ビル群の上を突っ切ってマリーディを追っても、照射されるマイクロウェーブが乱反射され

【harpuiai マイクロウェーブ兵装搭載機】
harpuiai equipped microwave armament

全長…17.1メートル

全高…5.5メートル

全幅…14.3メートル

火器最大装備時重量…25.9トン

最高速度…時速2430キロ（アフターバーナー使用時）

用途…多用途戦闘機

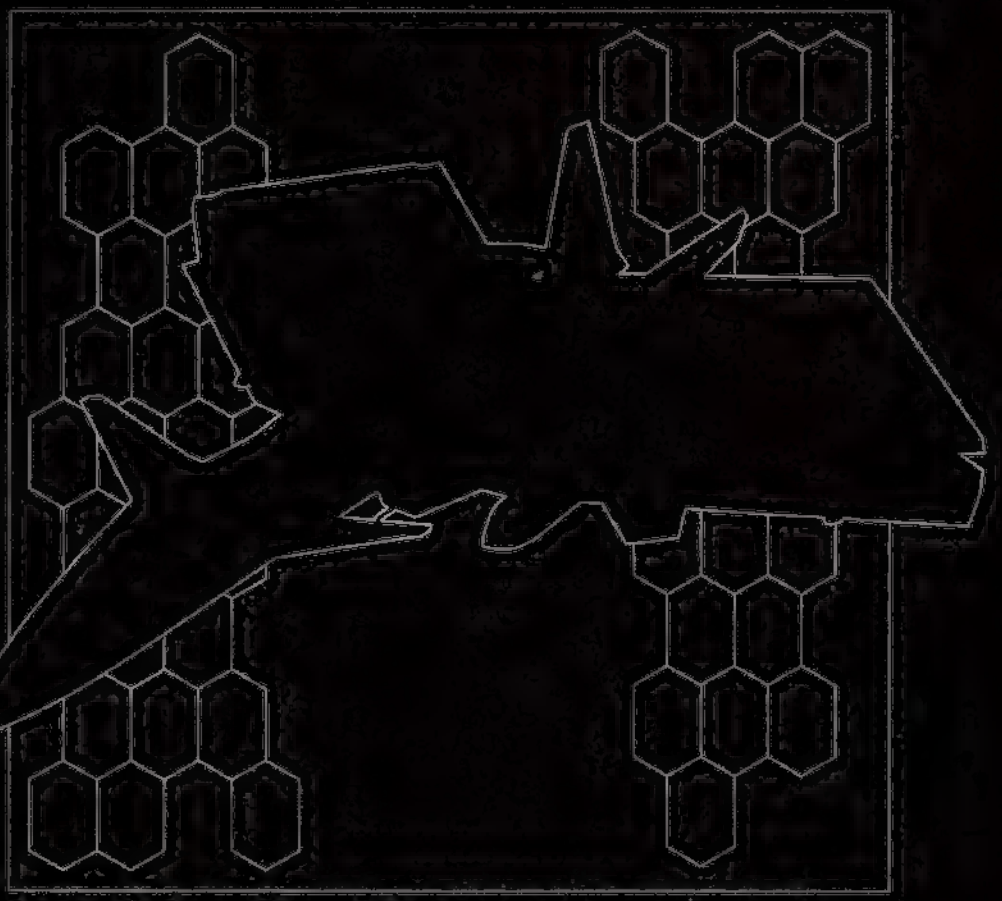
乗員…1名

運用者…ラミール＝スコッフロー

動力…ギリシア圏営空軍戦力工場製prometheus V×2
（VTOL推力可変モデル）

兵装…マイクロウェーブ受電板×2、マイクロウェーブ放射装置×2、
20ミリ機銃×1

メインカラーリング…グレー



harpuiai equipped microwave armament

てしまえば必殺とはいかない。発電衛星からマイクロウェーブの支援を受けているラミールの方も、ほぼレーダーは使えない状態なのだ。目視で見失うのはまずい。こちらが迷っている間に、相手がオーシャンサブステーションへ一直線に突っ込んでしまったら、作戦全体の勝敗を分ける羽目になる。

ここで確実に落とす。

そのためにマリーディ機と高度を合わせ、ビル群を潜り抜けながらマイクロウェーブ兵装で撃ち抜く。

懐中電灯のような『余波』ではなく、機首方向へ一直線に延びる『本命』さえ当てられれば、たったの数秒で戦闘機を落とす事もできるのだ。

6

「アイスガール1より管制へ！　対サイクロン用の警報スイッチを使って、外周部ブロック3の人間を屋内へ引っ込めさせろ！　おそらく使用されているマイクロウェーブの波長はセンチ単位だ。オリンピアドームの一般的な鉄筋コンクリート内にいれば影響は受けない!!」

届いているかどうかも分からないが、とにかくマリーディ＝ホワイトウィッチは無線に叫ぶ。

彼女も真後ろから追ってくる敵機に気づいていた。レーダーは相変わらずまともに作動して

いないが、それはつまり、マイクロウェーブを操る敵機が近づいてきている事をも意味しているのだ。

（あの改造型 Harpuia に既存の空戦の法則は通用しない。まともな手順で戦おうとしてもまず生き残れない。なら先入観は全部捨てろ。勝つために何でもやれ。こんな所で叩き落とされるために航空ＰＭＣに入社した訳じゃない!!）

ビルとビルの間を突き抜け、歩道橋の真下を潜り抜け、壁や地面のスレスレを高速飛行しながらマリーディは思考に没頭する。

すでに高度や方位を示すデジタル表示もあてにはならない。

指先の感覚だけに命を預ける。

（この新しい戦場のポイントは、切り札としてマイクロウェーブが導入されているところだ。そしてそれは徐々にだが確実な損害を蓄積させる悪魔の兵器であると同時に、レーダーや通信などに障害をもたらす副次的効果をもたらしている）

すでに目的地は決まっていた。

だが、そこに辿り着けるかどうかの保証がない。仮に到着したとしても、それで確実な勝算がある訳ではない。前述の通り、この戦いにはこれまでの空戦の法則は通用しない。だから全ての条件を綺麗に並べたとしても、予測に繋げられるほどの『経験』が存在しないのだ。

つまりはギャンブル。

それでもチップを場に置かない限り、そもそもの勝負を始める事ができない。

命という名のチップを置かない限り。

(だが勝ち目がない訳じゃない。お前にマイクロウェーブ兵装という切り札があるように、こっちにもこっちの切り札がある)

マリーディは操縦桿を操り、信号機のすぐ真横を突き抜けながらこう思う。

(Harpuiai という名前の切り札がな)

7

ラミール＝スコッフローはこう予測していた。

オリンピアドームは目玉焼きのような形をしている。そしてその外周部にビル群は並んでいる。だからマリーディは中央のドームに沿う形で、外周部をぐるぐると回転するのでは、と考えたのだ。

ビル群を抜けてしまえば、マリーディはマイクロウェーブから逃れられなくなる。

そのため、彼女は一直線ではなく円形に移動する事で、ゴール地点をなくそうとしている。

目先の問題を解決するなら十分だろうが、それではマリーディは逃げ続けるだけだ。機体を翻して反撃に出る事はできない。

（単純な恐怖に屈して回避行動を取り続けているだけ……とは違うだろう。何しろあのアイスガール1だからな。アクロバットな挙動でビル群を通過し、追ってくる私がついてこれずに激突するのを狙っているのか？）

しかし違う。

マリーディ＝ホワイトウィッチは目的地を定めていた。

それは外周部にある観光名所の一つ。

巨大人工浮揚島の内側へ人工的に海水を引き込んだ運河。その上へ並行的にかかる橋。

七本の鉄橋。

ライトアップによって七色に輝く虹の橋。

ビフレストアーチへと。

その瞬間、前方を進むマリーディは迷わずアーチ状の鉄橋の下へと飛び込んだ。海水と鉄筋構造物の間にあるわずかなスペースだ。ラミールは歯噛みして恐怖心を無理矢理に抑え込む。

ビフレストアーチは七本の鉄橋が並行的に架けられている橋だ。見方を変えれば、トンネルのような構造物でもある。

橋の上から狙ってもマイクロウェーブは弾かれる。

マリーディを確実に狙うなら、やはり橋の下へと潜り込むしかない。

（なるほど。ここで目を眩ませるのが目的か!!　ビビッて橋の上へ進んでしまえばマイクロウエーブは当てられない。橋の長さは二〇〇メートル以上あるから、やろうと思えばその下で旋回、方向転換もできる!!）

今までは前方のマリーディと後方のラミールが、狭いビル群の隙間で全く同じ方向へ進んでいたから、一方的にラミールが攻撃を仕掛ける事ができた。

その方向を変える。

ラミールの進行方向の九〇度で良い。まず進行方向を転換し、マリーディの位置を見失わせる。後はマリーディがビル群を通過してショートカットを行い、ラミールの真後ろへ張り付く事ができれば、今度はマリーディが攻撃する番となる。

「だが甘い。狙いが分かればそれで終わりだ!!　この私が、ロケットイカロスのラミールースコッフローがそう容易く立ちすくむとでも思ったか!!」

叫び、己を鼓舞し、ラミールはただでさえ低い高度を一気に下げる。外周都市部へ引き込まれた海水の運河の水面すれすれを突き進む。

橋の下へ。

ビフレストアーチの真下へ。

マリーディ＝ホワイトウィッチが逃げ込もうとしていた闇の中へと飛び込もうとする。

予想通り、相手の動きは遅い。

ビフレストアーチの真下は、上昇しても下降しても激突を起こしてしまう危険な場所だ。そんなところで機体を横倒しにし、大きく旋回しようというのだから、どうしても速度を落としてから行動に移るしかない。

それがマイクロウェーブ兵装を狙いやすくしているとも知らずに。

「終わりだアイスガール1。お前の死もオリンピックの礎にしてやる!!」

とどめの一撃を放とうとした、その時だった。

ラミール＝スコッフローは違和感を覚えた。それが目の錯覚によるものだとすぐに気がつく。マリーディは危険な条件で旋回するために減速しているはずだが、それにしては相手の機体が大きく見えすぎている。見た目の距離は遠近感で測っているため、そこに何かしらの錯覚が働いて機体が大きく見え、『近くにある』ように認識しかかっているのだろう。例えば、白い箱と黒い箱は、同じ距離に置いてあっても白い箱の方が手前にあるように見えてしまう。それと同じような効果が働いているのだ。

だが妙だ。

マリーディの乗っているHarpuiaiに、そのような要因は一切ない。それに今まではこういった錯覚はなかったのだ。ビフレストアーチの真下を通った途端に錯覚が生じるのはやはりおかしい。

（いや、まさか）

ラミールは疑問に思ったが、もう間に合わなかった。

（錯覚じゃない!!　本当に近づいているのか!?　くそ、まさか、くそ!!　やられ……!?）

機体が空中で停まっている。

だから音速超過で接近しているラミールからは、こちらに迫ってきているように見える。

考えてみれば単純だが、常に時速数百キロ、場合によっては一〇〇〇キロオーバーの世界で相対速度を合わせて時間・距離・速さの特殊な感覚を会得しているラミールには、それは完全に意識の外にある可能性だった。

戦闘機とは常に前へ進み続けなければ落ちてしまう乗り物だ。

だから相手も必ず高速で移動しているはずだ。

戦闘機のパイロットなら当たり前とも言えるその考えを、マリーディ＝ホワイトウィッチは覆す。

より正確には、彼女の乗るHarpuiaiが。

ＶＴＯＬ性を持った戦闘機が。

エアブレーキと推力の向きの大幅な変更。垂直離着陸用の推力を利用し、ヘリコプターのように空中でピタリと機体を静止させる、という意識の外にある選択肢を戦場へ持ち込んでくる。

（ま、ず……!!）

停まっている標的なら狙いやすいか。

音速以上の速度で動き続ける標的より狙いやすいか。

地上から立ち止まって狙いを定めているなら、前者をイメージするだろう。だが音速超過で突き進む戦闘機にとっては違う。相対速度の関係で、標的はあっという間に眼前へ広がる。二〇〇メートル先の物体が一秒で激突している世界なのだ。ラミールが事態の本質に気づいたところで、具体的な対策を整えるには『音速超過の環境に慣れ過ぎた』彼女の眼球が目まぐるしく変わっていく状況についてこれない。

苦し紛れにマイクロウェーブ兵装を照射するが、やはり『余波』は当たっても『本命』の直撃はなかった。

眼前のマリーディ機が垂直方向へ噴射する推力をわずかに調整し、機体を斜めに傾けた。

その空いた隙間へ突き刺すように、ラミール機が凄まじい速度で一気に通過してしまう。

そう。

追い越し。

オーバーシュートとも呼ばれるその状態は、一方的に真後ろから狙われ続けてきた戦闘機にとっての起死回生のチャンスだ。前と後ろ。その関係性が一瞬で逆転し、今度は今まで狙われてきた側の戦闘機が一方的に攻撃を加えていく事ができるようになる。

プガチョフ・コブラやバレルロールなど戦闘機には様々な特殊挙動があるが、その中のいく

つかは、こうしたオーバーシュートを狙うために開発されたものもある。
そして。
マリーディ＝ホワイトウィッチは成し遂げた。
ＶＴＯＬ垂直噴射によって、機体を停めるという『特殊な挙動』で。
「く、そ……」
レーダーが使えれば、正しい距離感を認識できていたかもしれない。
だがマイクロウェーブを戦場に持ち込み、それを場の切り札として機能させようとしたのはラミール自身だ。
ただし。
その切り札が、ラミールだけに働くとは限らなかったが。
「くそォおおお

ついさっき眼前でオーバーシュートしていった改造型Harpuiaiが、最後部のジェットエンジン噴射口からグシャグシャに噛み砕かれていく。それは一気に主翼や胴体へと侵食していく。相手は一瞬逃れようとするように機体を震わせたが、上は鉄橋で下は海面だ。大胆で派手な特殊挙動などできるはずがない。

機銃の弾丸の帯から逃げ切れず、改造型Harpuiaiの崩壊は続く。

それが一定に達した時、戦闘機は容赦なく爆発した。

最後までラミールは脱出用のパラシュートを作動させなかった。

頭上の鉄橋に激突すると思ってやらなかったのか。それとも脱出はしないというのが彼女の信念を表す一つの形だったのか。それはもうマリーディには分からない。

「着弾確認、撃墜だ」

墓標に名を刻むように呟いた時、マリーディの体の奥から何かが突き上がった。

Gに負けた訓練生のように片手を口に当てるマリーディだが、太股の辺りへ吐き出されたのは赤黒い血の塊だった。

今の挙動は、それほどまでの負荷を幼い肉体へ叩き込んでいたのだ。

ただでさえ垂直離着陸機能を使うのは神経を磨り減らすのに、この上下に狭い鉄橋の真下で、それも高速移動中にいきなり推力を大幅に変更させる離れ業を行ったのだ。正直、バランスを崩して墜落していてもおかしくはなかった　追っているラミールの側から見ればピタリと停ま

っているように思えたかもしれないが、実際には前方へ滑るように（それでも時速数百キロで）急減速していたのだ。急減速の膨大な慣性に肋骨を締め上げられながら、コックピットの中でガクガクと揺さぶられるあの感覚は、パイロットとして二度と味わいたくないものだった。だが、それでも勝った。

マリーディはその事実を認識すると、再びジェットエンジンの推力を後方へと噴射させる。前進する。

オリンピアドームの危機はまだ終わっていない。オーシャンサブステーションの兵器化レーザーが残っている。

9

その異変は、オーシャンサブステーション内部で作業しているイリス＝アグラベーション達も気づいていた。

整備兵の一人が金切り声を上げていた。

「ま、マイクロウェーブ発電衛星からのデータが……。降り注いでいるマイクロウェーブの反射、吸収効率のデータが消失しました！　中佐の乗っている機体が、機体がっ!!」

「Harpuiai がこちらへ急速に接近してきます！　おそらく敵性です！　と、止められませ

ん!!　防御システム、護衛機ともにあのHarpuiaiについていけません!!」

「……、」

イリスは高速でキーボードを叩き、レーザー施設のソフト上の問題を潰しながら、部下達の言葉を聞いていた。

「レーザーを使いましょう。あのHarpuiaiに近づかれて、受電用のパラボラやレーザー照射装置を破壊されたら元も子もありません!!」

だが、レーザーを使い続けながらソフト的な調整を続ければ、それだけ完成までの時間が延びる。できない事はないが、確実に遅れる。コンピュータのデフラグを行いながらアプリケーションを起動させる事はないだろう。それと同じだ。

事実、ラミールースコッフローがマイクロウェーブ兵装を装備した戦闘機で出撃したのも、レーザー施設を休ませる目的が大きかった。

その上官が稼いでくれた時間で、兵器化レーザーはあと一歩のところまで調整を進める事ができた。

ここでするべきは何か。

多少時間を延ばしても良いから、ひとまず出力の低いレーザーを連射してHarpuiaiの迎撃を行うか。

リスクを承知で調整を一気に終わらせ、高出力のレーザーをオブジェクトへ照射して『戦争

の引き金』を引くか。

イリスは考え、そして決断した。

「……我々に『次』などありません。それは手を広げて待っていれば、無条件で手に入るものではありません」

それは、失われてしまった上官の言葉。

そこに己の意思を乗せ、イリスーアグラベーションは大声で叱咤する。

「今しかありません。この今しか!!　たった一発の兵器化レーザーを撃てるかどうかに私達の全てがかかっています。なら、それ以外の些事に本命のスケジュールの足を引っ張らせるなど言語道断。一刻も早く兵器化レーザーを完成させ、それでオリンピアドームとテクノピックに終止符を打ちます!!」

その力強い言葉に、乱れかかっていた統制が一気に取り戻された。

彼らの動きの方向性が決まる。

とどめを刺すように、イリスはこう宣言した。

「標的は『信心組織』のオブジェクトであるラートリー!!　第二世代の操縦士エリートへ混乱をもたらし、彼女の誤動作によってオリンピアドームを守って拮抗する四機のオブジェクト全てを巻き込む戦乱を誘発させます!!」

10

ラミール＝スコッフローを落とした事で、通信やレーダーの調子も回復していた。マリーディは全速力でオーシャンサブステーションを目指すが、そんな彼女の耳にもっと広域で情報を収集している護衛の男の苦い声が聞こえてきた。

『管制よりアイスガール1へ。まずいぞ、レーザー照射装置の砲身が旋回を始めたのを目視で確認。君を狙うための動きじゃなさそうだ。おそらく兵器化レーザーの再調整が終わったんだろう。次のステップへ移るつもりだ!!』

「今から攻撃して間に合いそうか!?」

『分からん!!　だが甲板上から乗員が引っ込んでいる。おそらく輻射熱にやられるのを防ぐためだ。すぐにでも発射するつもりだろう!!』

「狙われているオブジェクトは!?」

『おそらく「信心組織」のアディスシュミー。向こうの正式名称はラートリーだったか。確か夜の女神の名前を取ったものだ。自軍のオブジェクトのはずだが、おそらく連中の味方ではない。回りくどい作戦をさせた事への苛立ちでもあるのかもしれないな』

地上のドップラーレーダーの情報を小型モニターに表示させ、オーシャンサブステーション

とアディスシュミーの間のラインを確認するマリーディ。
　このラインに沿って、高出力のレーザーは照射されるはずだ。
「……今からオーシャンサブステーションを狙っても一回の攻撃で完全に機能を奪えるかは分からない」
『管制よりアイスガール1へ。どうするつもりなんだ!?』
「レーザーの照射は止められない。あれがオブジェクトへ直撃したら、オリンピアドームを巻き込むオブジェクト同士の戦争に繋がってしまう」
　マリーディは操縦桿を握る手に汗が滲むのを確認しながら、それでも告げる。
「だが、どうにかしてレーザーを屈折させる事ができればオブジェクトへの直撃は避けられる！　甲板上から乗員が撤退しているという事は、おそらく最大出力の兵器化レーザーは甲板上へも輻射熱で大きな損害を出すはずだ。受電用のパラボラアンテナすら巻き込む形でな!!」
『待てアイスガール1。一体何をしようとしている!?』
「連中の最大出力の兵器化レーザーは一回きりだ。その一回さえどうにかしのげれば、連中の計画を挫く事ができる!!　ラインは分かっているんだ、ラインは！　あとはそのラインに『不純物』を割り込ませれば、レーザーそのものを弾く事ができなくても軌道をほんの少しだけねじ曲げるぐらいなら!!」
『待ってくれ!!　俺の仕事は君の身の安全を保障する事だ!!』

なおも騒がしい無線を切り、マリーディはアフターバーナーまで使って全速力で大空を突っ切る。

オーシャンサブステーションへ向かうのではない。

巨大船舶とアディスシュミーの間にあるラインへ向かって、だ。

（……腐りきったテクノピックを叩き潰し、元の健全なオリンピックを取り戻す、か）

操縦桿を握りながら、マリーディは小さく笑う。

（金メダルをかなぐり捨てた私よりも、よほど生産的な目的だな。だが駄目なんだ。掲げた目的がどれほど健全であったとしても、その過程で多くの血が流れれば、結局手に入れる物も真っ赤に染まってしまう。仮に計画が完全に成功したとしても、後に残っているのは死が溢れ返ったオリンピックだけさ）

結局、どこへ行っても殺し合いだった。

テクノピックに参加すれば少しは生産的な活動ができると思ったが、やっている事は北欧禁猟区の泥沼と変わらなかった。

ならばそれでも良い。

マリーディ＝ホワイトウィッチは、ただ己の職務を全うする。

合理性以外の感情で動く程度には、このオリンピアドームで出会った人達との繋がりを構築している

（だったら選ばせてもらおうか。どちらを選んでも結果は同じレベルのどす黒い大会しか残らないなら、私は人死にの少ない方を選択するよ）

そして、マリーディは目標の空域に到達した。

直後に、オーシャンサブステーションから本領の兵器化レーザーが照射された。

11

オリンピアドームの岸壁では、日没前の薄暗い夕暮れを引き裂く純白の閃光が確認できた。

護衛の男は眩い光に思わず顔の前へ腕をやったが、それでも瞼を貫通するように閃光は襲いかかってきた。

残像の焼きついた目で周囲を確認しようとし、何度も瞼を開閉させる護衛の男。彼はやがて、近くにいた部下へとこう話しかけた。

「どうなった？」

「へ、兵器化レーザーは照射されました。ですが、アディスシュミーは健在です。直撃はしなかったようです」

部下は呆然としながらも、上官の命令に答えていく。

「各勢力の通信を傍受しているところですが、オブジェクトの間では緊張が生じているものの、具体的被害が出ていないので、それほど大きな混乱には発展していない模様です。おそらく『信心組織』が企てていたような戦争へは展開されないでしょう」

「連中の照準に甘さがあったとは思えない」

「兵器化レーザーはアディスシュミーに届く前に、海水へと落ちていたようです。一部の海水は沸騰中。目視で水蒸気が確認できます。おそらく、途中で屈折したのでしょう」

「……」

レーザーが屈折したからには、屈折するための理由がある。

都合良く蜃気楼が発生したとは思えない。

もっと人工的な手段が行使された。

例えばレーザーの進路上で大きな爆発があったり、金属の塊などを置いたりといった……。

「マリーディ＝ホワイトウィッチはどうなった？」

「連絡は繋がりません」

「あいつの乗っていたHarpuiaiはどうなったんだ!!」

終章

マリーディー＝ホワイトウィッチの勇敢な決断と、結果として救われた多くの命を鑑み、同選手の金メダルは永遠に彼女の名誉とする。

一部でメダルはく奪の意見が出ているようだが、上記を今回の問題の最終回答とし、シュートアスロン女子の競技結果を決定する事をここに宣言する。

「……上出来です」

アリシア＝スラピージョーズは七本の鉄橋、ビフレストアーチの歩行者用通路の前で立ち止まり、そう呟いた。

片手にある書類の束が、このテクノピックの公式記録の全てである。

マリーディー＝ホワイトウィッチが崩壊を食い止めた後も大会は熱狂と利害の中で執り行われ、デジタルな数値と順位を残し続けていた。

アリシアはもう片方の手に持った携帯電話へ話しかける。

「これでスポンサー様との契約である新型ライフルの宣伝広報の効果が一定額を超えました。

マリーディ＝ホワイトウィッチ選手の結末はどうであれ、我々が不利益を被る事はありません。いえ、むしろ金メダルに美しいエピソードまで追加されたのですから、当初の契約以上の効果が見込めると判断しても問題ないでしょう」

電話の相手は、アリシアの所属する広告代理店の人間だった。

向こうがいくつかの懸念を告げたが、アリシアの直立不動は変わらなかった。

「確かに終盤の同選手は問題を解決するためとはいえ、国際法に抵触する行動を何度か取っています。鹵獲したHarpuiaiで出撃し、独断で軍事作戦を決行したところなどは特にひどい。……ですが、それで新型ライフルの評判が下がる事はないでしょう。むしろ、ここでホワイトウィッチ選手を公認イメージ選手から降板させてしまうと、『あれだけの人命のために戦った選手の存在をスポンサーは認めず、その存在を抹消しようとしている』と大衆に判断されかねません。そちらの方が損害は大きく出るでしょう」

電話の相手は何かを吟味したようだが、最終的には折れたようだ。

細かい調整を本社に任せ、アリシアはこう言った。

「では、そういう方向で。今回の結果についても大々的に喧伝し、次のスポンサー様を吸い寄せましょう」

それだけ言うとアリシアは携帯電話の通話を切って、ビフレストアーチの手すりの向こうに広がる運河へ目をやった。

彼女は直立不動のまま、表情を変えずにこう告げる。

「あなたともお別れです、マリーディ＝ホワイトウィッチ」

薬剤師のステイシー＝パーメットはホテルの部屋で荷物の整理をしていた。

とはいえ、荷物の中には業務用の巨大な冷蔵庫などもある。彼女にとって『荷物をまとめる』とは持ち物に一つ一つ番号札をつけていく事を意味していて、その後の梱包や運び出しは全て別の業者に任せる事にしていた。

「結局さー」

番号札のシールをペタペタ貼り付けながら、ステイシーは頬と肩で挟んだ携帯電話に向かって話しかける。

「今回は失敗だったよ、失敗。マリーディちゃんはよその分野からやってきた軍人系ってのがまずかったかな？　ドーピング関連も結構安全に再調整してあるんだけど、あんまり使いたがっていなかったからねえ。ええ、うん、そうそう、そんな感じ。次からは生粋のアスリート系を選んだ方が良いんじゃないかな。その辺の忌避感情が完全に飛んじゃってる系っていうの？」

電話の相手は彼女の親会社であるドラッグストアホールディングスの窓口だった。ステイシーのような『国際競技用強化薬剤師』など、顧客の数は限られている。『数は少ないが極めて

大口』というビジネスは、単独で実行するには浮き沈みが激しすぎる。よって、総合的なドラッグストアの一部門として登録された方が経済的に安定できるのだ。

つまり、ステイシーは戦略的に『わざと吸収された』のである。

「うーん。今度はさ、精神的ケアも含めて選手の心身を補強していますとか、そういう売り文句にしない？　そうすれば世間話にも後で請求書を張り付ける事ができるんだけどにゃー。えっ、別グループのカウンセラーやストレスビジネスと競合する？　そんなの知らんよライバルなんて蹴落としてなんぼでしょーがー」

一通り番号札のシールを貼り終え、漏れがない事をチェックすると、ステイシーはパチンと指を鳴らした。途端に部屋のドアが開かれ、作業服を着た業者の男達がドタドタと踏み込んでくる。

「いつも通りよろしく」

それだけ言うと、ステイシーは使い慣れているカバンだけを摑んで、そのままホテルの部屋を出た。通路を歩きながら、携帯電話での話を続ける。

「いやー、待ってよ寂しいのよー。どうせすぐに……何だっけ？　どっかのバスケチームと合流するんだけどさ。やっぱり契約が終わって次の契約に移るこの瞬間っていうの？　それまでの人間関係を更新するっていうのは後ろ髪を引かれちゃうからさ。適当な話し相手を作って感情をごまかしている訳。今回は事情が事情だったから特にねえ」

エレベーターのボタンを押し、ランプの表示がこの階で止まるのを待つステイシー。柔らかい電子音と共に開く扉を眺めながら、彼女はこう呟いた。

「それじゃ、これでさよならね、マリーディちゃん」

キャットウォークTVのディレクター、ルーカス＝ウェスタンローズは大きなカメラを構えたカメラマン達を従えて、オリンピアドーム唯一の国際空港へ向かっていた。理由は一つ。帰国のために集まってくる有名選手達を撮影するためである。

「もしもし、はい、はい、好成績を収めた選手であれば、この段階ならレンズを煙たがる可能性は低いです、はい。むしろ障害となるのは、はい、他の局との位置取りとなるでしょう、ええ、ええ」

車中で彼はそんな事を言う。

「はい、ええ、競争相手としては少しでもカメラマンの数を減らす事で有利な位置を確実に確保しようとするはずです。撮影不能な状況に陥らせるために最適なのは、カメラを破壊してしまう事でしょう、はい。ターゲットを追うのはもちろんですが、はい、はい、背後からの体当たりなどで機材を落とさないよう気をつけてください、はい」

「ウェスタンローズさんよ」

カメラマンの一人がニヤニヤと笑いながら言う。

「その定石ってのは、こっちから仕掛けちまっても構わないのかな？」

「……はい、はい、それと知られない、ええ、自然な形であれば」

ルーカス＝ウェスタンローズも静かに容認する。

彼らは銃の代わりにカメラを構えて世の中と戦っている。この分野において、競争相手へ容赦をする理由は何一つない。

「もしもし、確認します。狙うのは空港ターミナルの出入り口と、はい、五番の動く歩道、ええ、そして出入国ゲートの三ヵ所です。はい、はい、常に連絡を取り合い、指定リストにある選手達に関しては必ずどこかで三〇秒以上は撮影する事。ええ、くれぐれも撮り逃しのないようお願いします、はい」

彼ら『情報同盟』は常に新鮮な情報を貪欲に求めており、次から次へと生み出されていくデータの中で、古い情報はあっという間に埋もれ、色褪せていく。『それを色褪せさせない』ために活動している派閥もあるが、『常に情報を放出していく』ルーカス達はそうした問題を一切考慮していなかった。ようは、新鮮なブドウのまま食べるか寝かせてワインにして飲むかの違いでしかないと思っている。そこには好みしかなく、善悪など存在しないのだ。

そう。

すでに、マリーディ＝ホワイトウィッチを追いかけていた段階は終わったのだ。終わったと、

あっさり認める事ができるほどに整理は済んでいるのである。

部下のカメラマンの一人が、笑いながら言う。

「実際、放映できる部分なんざほとんどなかったが、思い出話にゃ良い仕事だったよな」

「そういう仕事ほど道楽だと評価されるものです、ええ、はい。ああいうタイプをこなすためには、それ相応の貯金が必要になります。はい、はい、だからつまらない仕事もやって、はい、好き勝手できる環境を整えましょう、ええ」

車が停まる。

ドアを開け放ち、国際空港へと降り立ったルーカス＝ウェスタンローズはこう告げる。

「もしもし、名残惜しいですが、はい、ここで区切りましょう。さようなら、ホワイトウィッチ選手」

護衛の男はオリンピアドーム外周部の貸倉庫へやってきていた。

本来であれば彼らの仕事ではないが、現場検証に付き合わされていたのだ。オリンピアドーム側のチームと連携しながら、貸倉庫の中にある兵器類の数や種類を調べ、面倒臭い書類を作るための数値を集めていく。

とはいえ、本来の業務ではないのでやる気がないのは明らかで、護衛の男は片手に携帯電話

を持っていた。

「そうだ、そう。始末書の請求はそこで止めておけ。分かってる。俺達の仕事はマリーディ＝ホワイトウィッチの身の安全を保障する事だった。そいつの結果はご存知の通りだ。分かっているからそこで止めるんだ。後で書類は用意する。その前に体を動かせる仕事の方を片付けさせてくれ」

専門的な機材を使って指紋や塵などを採取している部下に目をやりながら、護衛の男はさらに言う。

「は？　ホワイトウィッチの独走だったんだから、責任をそちらへ向けたらどうかだって？　無理無理、無理だよ。あいつは今やオリンピアドーム数百万の命を救った英雄様だよ。何週間感謝の念が持続するか分かったもんじゃないレベルの軽い英雄様だがね、このタイミングはまずい。それなら素直に始末書提出した方がダメージは少ないはずだ」

一通り建物内の調査が終わると、証拠品である兵器類の運び出しが行われた。機銃や爆発物の他に、装甲車やヘリコプター、戦闘機といったかなり大型の物まで運び出されていく。

そう。

戦闘機 Harpuiai。

マリーディ＝ホワイトウィッチ選手が乗っていた物と同じ機種だ、というのは正しくない。

彼女が乗っていた戦闘機そのものだった。

「……悪運の強いヤツだ」
護衛の男はポツリと呟いた。
それから、軽く笑う。
「だが、そのおかげで俺達の首は何とか繋がったがね」

そして。
マリーディ＝ホワイトウィッチは『選手村』のリゾートホテルの一室で、自分の獲得したメダルを片手で摑んでいた。首に下げるリボンの部分を指で摘み、目と鼻の先に純金のメダルを近づけて睨みつけている。
「……勲章に最も遠いエースパイロットって噂だったんだがな」
適当に呟くと、彼女はそれを開いたスーツケースの中へと投げ入れた。マリーディにとって、やはり他者から与えられる名誉にはその程度の価値しかない。こういった名誉の獲得に最も躍起になっているのは『正統王国』辺りだろうが、あの辺の鼻が高い『貴族』サマとは折り合いがつけられるとは思えなかった。
ホテルの中に広げてあった荷物を一つ一つスーツケースに収めながら、マリーディは最終局面の事を思い出す。

オーシャンサブステーションから放たれた兵器化レーザーを止めるために最後の行動に打って出たマリーディだったが、当然ながら、彼女も自分の乗っている戦闘機をレーザーの予想進路に突っ込ませて軌道を曲げようなんて考えていなかった。

彼女はありったけの空対空ミサイルを発射し、レーザーの予想進路上で爆発させたのだ。

発生したのは大量の熱と、ミサイルの破片である金属片。

気温差と金属片によってレーザーをほんの少しだけ曲げ、アディスシュミーへの直撃を回避したのである。

発射地点と標的の間に凄まじい距離があったからこそわずかな誤差を生むだけで妨害できたのだが、それにしたって明確な勝算があった訳ではない。あの空域の気温や湿度がほんの少し変わっていれば、結果は違ったものになっていただろう。

だがマリーディは賭けに勝った。

だからこそ彼女は死なずに生還したし、帰ってくるための場所もまた残されていた。

「こんなところか」

ホテルの中の私物を全てスーツケースに収めると、彼女は複数の方式のロックを掛けた。空港で貼り付けた荷札の一部がまだへばりついている状況だが、これからすぐにまた空港へ向かい、飛行機に乗る事になる。

北欧禁猟区へ戻るために。

航空ＰＭＣのエースパイロットとして、再び泥沼の戦争へ参加するために。

モデルルームのように生活感のない部屋の中に散らばっていた、わずかな生活の匂いを摘み取っていく作業にはわずかな寂寥感があったが、かといって滞在期間を延ばせるほどマリーディの勤労環境は優れていない。というか、有給休暇なんて概念はここしばらく忘れていた。ストックがどれぐらいあるかも分かっていない。

スーツケースのキャスターを転がし、部屋の出口へ向かうマリーディ。

その時、携帯電話がわずかに振動した。

立ち止まって確認してみると、健康器具会社が送ってきた広告メールだった。内容を読まずに削除するマリーディだったが、ふとその指先が止まった。

アドレスにはいくつかの名前が増えていた。

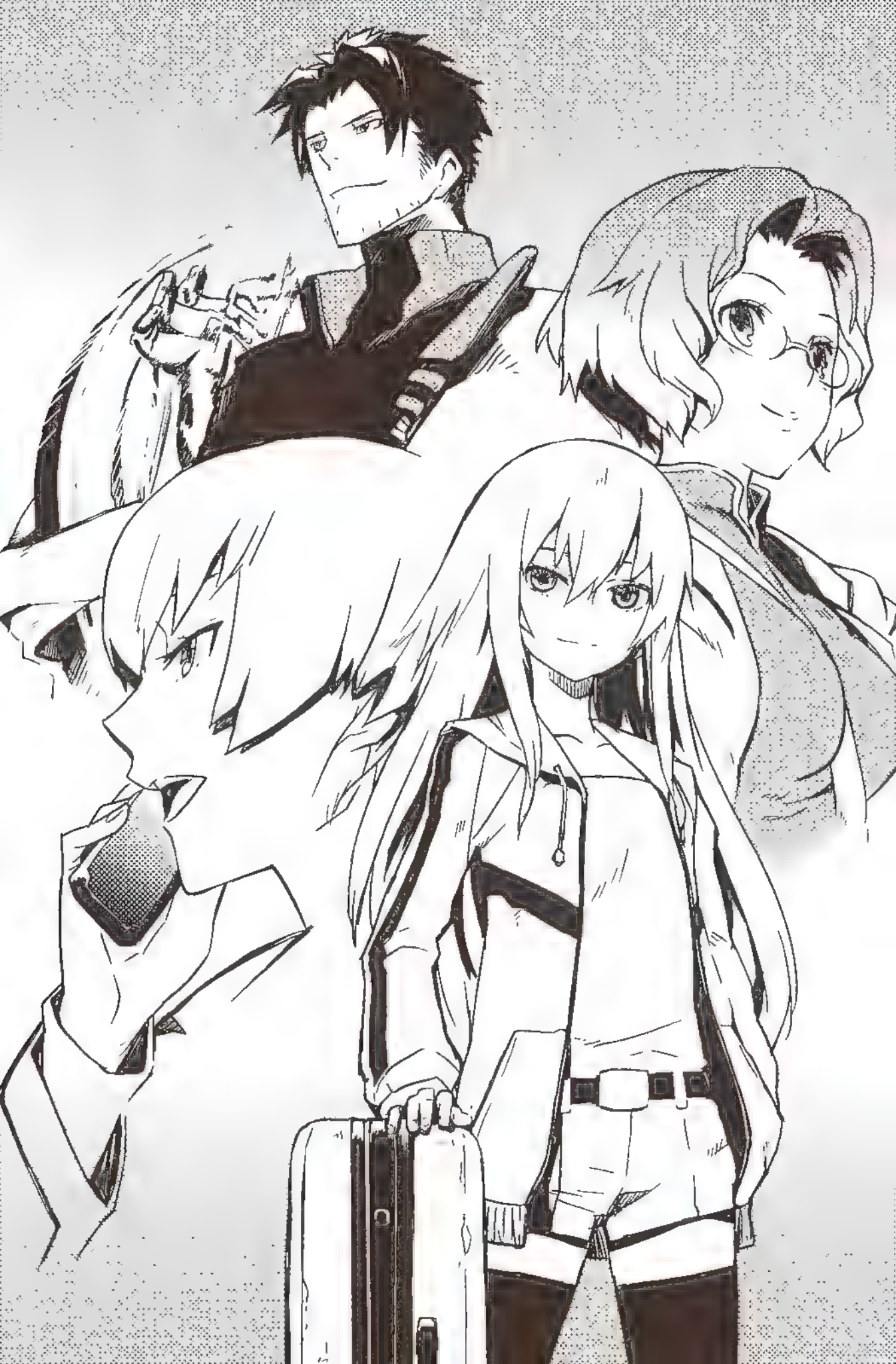
このオリンピアドームにやってきてから知り合った数名分のアドレスが。

「……生産性のある仕事とは思えなかったが、多少は得られる物もあった訳だ」

携帯電話をしまいながら、マリーディは薄く笑う。

あるいは、そちらの方が純金のメダルより有意義だったとでも言うかのように。

そして、最後に部屋のドアが開閉された。



あとがき

おそらく五冊目？　連チャンで書いている原稿がどういう順番を経るか正確に分かっていないのがあれですが。

鎌池和馬です。

今回は番外編です。いつものクウェンサーやヘイヴィアよりも、さらにドライな少女が大活躍する話ですね。北欧禁猟区という名前自体は『採用戦争』でも出ていたと思いますが、そこで働くエースパイロットが主人公となっております。

この作品の中に出てくるテクノピックは、オブジェクトによるクリーンな戦争同様、新技術によって大きくねじ曲がってしまった『戦い』の象徴となっています。

当然ながら、ドーピングは良くない事です。ウェアやシューズにしても、金をかけた方が勝ち、かけられない者はその時点で負けとなってしまってはスポーツマンシップからはかけ離れてしまうでしょう。

でも。

もしも、それらのルールに一切縛られなくなったら、人間はどこまで行ってしまうのか。

……という少々不謹慎な疑問から膨らんだのが今回の話です。現実には不可能である事、やるべきではない事、そういったものを取り扱えるのはフィクションが現実に勝る数少ない利点かな、と思うのですがいかがでしょう。

また、この作品世界ではテクノピックと同様の技術を利用していながら、ほとんどスポーツ上のルールに縛られない分野が存在します。

つまり、軍事。

言ってしまえばオブジェクトを操るエリートと、テクノピックに参加する代表選手は、共に同じ技術から出発し、別々の『泥沼を回避するための』代理戦争で戦っていたという事ですね。

マリーディ＝ホワイトウィッチは『本編から枝分かれした、もう一人のエリート』そのものという事になるため、まさしく『番外編』に相応しい主人公だったかな、と思います。

……あと単純に番外編にすると、『正統王国』以外の視点を持ち込めるのが楽しいなー、と。単に他の勢力の制度や風習などを利用するだけでなく、各々のキャラが『まあそれは当然だよね』『えっ？　それおかしくね？』などなどの反応を示す『根拠』や『基盤』そのものをガラリと変えられるのが面白いです。

つまり、クウェンサーやヘイヴィアが当たり前のように感じている事に疑問を投げかけ、彼らがギョッとするような事を当たり前のものとして受け止めさせる事ができる、という遊び方

ですね。……いつもの馬鹿二人の言動についても、安易に信じちゃ駄目なのですよ？

学園モノなどの場合は『こんな学校に行ってみたい』と思わせた方が勝ちだと考えているのですが、こちらの話ではそうした『学校案内』が不要であるため、割と『社会制度的な容赦のなさ』を描写できる余地が大きいと思います。

これからも、手を変え品を変え『こいつらの生きてる場所スゲー怖い！　でもこんな場所で生きてるこいつらスゲー!!』と思っていただけるような話を書ければなと考えていますので、よろしくお願いします。

イラストの凪良さんと担当の三木さんには感謝を。巨大人工浮揚島とか舞台自体がイラスト的な補助が欲しい場所である上、戦場と競技場でガラリと雰囲気が変わるため、相当メンドクサイお仕事になってしまったと思います。今回もお付き合いいただき、ありがとうございました。

そして読者の皆様にも感謝を。そもそも番外編なんてものはシリーズが継続的に刊行されないと実現不能なものでして、今回それができたのは間違いなく皆様のおかげだと思います。本当にありがとうございます。

では、この一冊が何かしらの小さな糧となる事を願って。

今回は、この辺りで筆を置かせていただきます。

セカンドヴェニスとか、いつ使うか分からない伏線をまた張ってみたり

鎌池和馬（かまち かずま）

◉鎌池和馬著作リスト

「とある魔術の禁書目録（インデックス）」（電撃文庫）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）③」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）④」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑦」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑧」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑨」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑩」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑪」（同）

「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑫」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑬」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑭」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑮」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑯」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑰」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑱」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉑」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉒」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）SS」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）SS②」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）
「ヘヴィーオブジェクト」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　採用戦争」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　電子数学の財宝」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「鎌池和馬先生」係
「凪良先生」係

■

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト　死の祭典（しさいてん）

鎌池和馬（かまちかずま）

発行　二〇一一年十一月十日　初版発行

発行者　高野　潔

発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一〇二-八五八四　東京都千代田区富士見一-八-十九
電話〇三-五二一六-八二九九（編集）
http://asciimw.jp/

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）

印刷　株式会社暁印刷

製本　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書のコピー、スキャン、電子データ化等の無断複製は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。なお、代行業者等に依頼して本書のスキャン、電子データ化等を行うことは、私的使用の目的であっても認められておらず、著作権法に違反します。

※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、株式会社アスキー・メディアワークス生産管理部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書として本書を購入されている場合はお取り替えできません。

※定価はカバーに表示してあります。

© 2011 KAZUMA KAMACHI
Printed in Japan
ISBN978-4-04-870997-2 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-868069-1

超大型兵器オブジェクト。その操縦士、『エリート』。雪原の戦場に派遣留学したクウェンサーが出会ったのは、そんな素性を持つ奇妙な少女だった――。

か-12-21　1833

ヘヴィーオブジェクト　採用戦争

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-868594-8

宇宙開発技術採用を巡る戦争の最中。戦地派遣留学生のクウェンサーと、見習い軍人のヘイヴィアの次なる相手は、姿が見えない超巨大兵器、ステルス・オブジェクト!?

か-12-24　1954

ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-870051-1

巨大兵器オブジェクトが世界のバランスを支配する世界。不良兵士のクウェンサーとヘイヴィアは、今日もマイペースに戦場を駆ける。近未来アクション、懲りずに第三弾だ！

か-12-27　2032

ヘヴィーオブジェクト　電子数学の財宝

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-870549-3

ミニスカサンタ！　ツンプリなお姫様と爆乳フローレイティアさんのミニスカサンタっ……！　一体これが、今回のクウェンサーとヘイヴィアのどんな伏線に!?　近未来アクション！

か-12-29　2136

ヘヴィーオブジェクト　死の祭典

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-870997-2

全世界が待ちに待ったスポーツの祭典、テクノピック。世界的勢力の代理戦争と呼ばれるこの一大イベントに、『北欧禁猟区』から戦闘機乗りの少女が参加した。

か-12-31　2219

電撃文庫

とある魔術の禁書目録（インデックス）

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2658-X

“超能力”をカリキュラムとする学園都市に“魔術”を司る一人の少女が空から降ってきた。『インデックス（禁書目録）』と名乗る彼女の正体とは……!?

か-12-1　0924

とある魔術の禁書目録（インデックス）②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2701-2

学園都市「三沢塾」で一人の巫女が囚われの身となった。上条当麻は魔術師ステイルと嫌々手を組み、彼女を助けに行くことになるのだが——！　学園アクション第2弾！

か-12-2　0951

とある魔術の禁書目録（インデックス）③

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2785-3

補習帰りに、上条当麻は御坂美琴とその妹に出会う。御坂妹も姉同様とにかくヘンな奴で……。そんな普段通りの生活の中、学園都市の能力者が次々と殺されはじめる……。

か-12-3　0988

とある魔術の禁書目録（インデックス）④

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2858-2

海へバカンスに来た上条当麻が見たものは、インデックスが青髪ピアスで、神裂火織がステイルで、ステイルが海のオヤジで、御坂美琴が当麻の実妹で!?　全てはとある魔術から……！

か-12-4　1021

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3025-0

8月31日の学園都市。御坂美琴は、さわやか男子生徒に誘われた。一方通行（アクセラレータ）は、不思議な少女と出会った。上条当麻は、不幸な一日の始まりを感じた……。

か-12-5　1083

電撃文庫

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2973-2

新学期初日。それは上条当麻が通う学校に転校生が来た日で、インデックスにはじめての「ともだち」ができた日で、学園都市に謎の魔術師が潜入した日だった……。

か-12-6　1113

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑦

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3205-9

伝説の魔術師クロウリーが記したとされる魔導書『法の書』と、その解読法を知るシスターが何者かにさらわれた。上条当麻は、〝不幸〟にもその救出戦に加わることに……。

か-12-7　1167

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑧

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3269-5

ここは学園都市屈指の名門女子校・常盤台中学。御坂美琴が体育の授業後、シャワーを浴びていると……。お姉様とあの殿方が交差するとき、白井黒子の物語が始まるのですの!?

か-12-8　1198

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑨

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3385-3

学園都市最大級行事「大覇星祭」。上条当麻や御坂美琴も参加するその大運動会の開催中に、謎の〝霊装〟を巡って、とある魔術師が学園都市に侵入した……！

か-12-9　1243

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑩

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3428-0

学園都市に、ひとつの波紋が広がった。『使徒十字（クローチェディピエトロ）』。そう呼ばれる存在が、上条当麻の大切な人たちの夢を、破壊していく！科学と魔術が交差するとき、物語は始まる！

か-12-10　1257

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑪

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3581-3

大覇星祭最終日。自分が〝不幸〟であることしか自慢できない男・上条当麻が、なんと大覇星祭「ナンバーズ」に見事当選した。景品は『海外旅行』のチケットで……!?

か-12-11　1327

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑫

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3683-6

九月三〇日。学園都市の某所に、御坂美琴は立っていた。待ち合わせである。けれど、あの少年は一向に姿を見せず……。罰ゲームを巡る学園(ラブ)コメディ編スタート?

か-12-12　1372

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑬

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3801-4

九月三〇日の学園都市に侵入した魔術師『前方のヴェント』。彼女が操る謎の魔術により都市機能は完全麻痺、大部分の人間は倒れた。絶望的な状況下で上条当麻は……!

か-12-13　1411

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑭

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-4062-8

一〇月。ローマ正教徒によるデモが全世界で勃発した。混乱の最中、その元凶が霊装『C文書』にあることを聞かされた上条は、土御門と共にフランスへと飛び立つ!

か-12-15　1506

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑮

鎌池和馬
イラスト　灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-4145-8

治安部隊がアビニョン侵攻作戦で不在の学園都市。そこでは闇の組織らの暗躍が始まっていた。『グループ』の一方通行(アクセラレータ)は、謎の組織『スクール』の存在を知り……!

か-12-16　1537

電撃文庫

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑯

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-867086-9

宿敵・後方のアックアがついに動いた。標的とされた上条当麻だが、彼の元には五和がボディガードとしてやってきて……インデックスとの同棲バトル勃発!?

か-12-17　1601

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑰

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-867591-8

『禁書目録召集令状』が布告された。何者かに爆破されたユーロトンネルを『王室』と共に調査せよ、という任務だった。上条当麻が被る今度の〝不幸〟は、英国にて開幕！

か-12-19　1730

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑱

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-867897-1

ロンドンはクーデターにより堕ちた。影響はイギリス全土に及び、市街では『清教派』と『騎士派』が対立する中、ついに上条当麻は「あの男」と出会う……!!

か-12-20　1787

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868137-7

一方通行ら『グループ』が『ドラゴン』について探る中、それを煩わしく思う統括理事会のメンバーが彼らに牙をむく。同じ時、浜面と絹旗が滝壺を見舞いに行くが……。

か-12-22　1847

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868393-7

上条当麻はインデックスを解き放つため、一方通行（アクセラレータ）は打ち止め（ラストオーダー）を救うため、浜面仕上は滝壺理后を治療するため。三者三様の想いが渦巻く、緊迫のロシア編開幕！

か-12-23　1908

電撃文庫

とある魔術の禁書目録(インデックス)㉑

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868762-1

〝大切な少女〟を救いたいと望む少年たちの、絶対に退くことの出来ない戦いは続く……!! 果たして彼らの願いの行方は……緊迫のロシア編、クライマックス突入！

か-12-25　1984

とある魔術の禁書目録(インデックス)㉒

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868972-4

右方のフィアンマが企てる『計画』が、ついに発動する。『ベツレヘムの星』。十字教信者だけでなく、全世界の人間を「救う」と言われるその計画とは……!?

か-12-26　2017

とある魔術の禁書目録(インデックス)SS

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3912-7

上条のクラスで行く鍋パーティのゆくえは？イギリス清教ロンドン女子寮の乱れた？一日とは？　一方通行が闇へと堕ちた、その先には……。本編補完のSSシリーズ！

か-12-14　1456

とある魔術の禁書目録(インデックス)SS②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-8673 42-6

ジーンズ切り裂き魔を追う神裂、半蔵に恋する郭(くるわ)ちゃん、謎の魔草売り少女と出会う上条刀夜、微妙な強さの超能力者(レベル5)・ナンバーセブン。圧倒的な登場人物で送るSSシリーズ第2弾。

か-12-18　1676

新約　とある魔術の禁書目録(インデックス)

鎌池和馬
イラスト／はいむらきよたか

ISBN978-4-04-870319-2

上条当麻の消失後、全世界に安息の日々が訪れていた。学園都市では、一方通行が騒がしい日常を取り戻し、浜面仕上は新生『アイテム』としての活動を行い……。

か-12-28　2093

新約 とある魔術の禁書目録(インデックス) ②

鎌池和馬
イラスト／はいむらきよたか

ISBN978-4-04-870738-1

上条当麻と一方通行、そして浜面仕上が、ついに交わった。それは、三者三様の『アンタ等何やってた訳』的オンナノコたちへの落とし前イベント勃発を意味していた……！

か-12-30　2169

ウチの姫さまにはがっかりです…。

鈴木 鈴
イラスト／藤真拓哉

ISBN978-4-04-868881-9

見習い騎士アッシュは、敬愛すべき君主・イリステラ姫の秘密の遊びを目撃してしまう。それは……!? 姫さまのイケナイ秘密をめぐるファンタジックラブコメ！

す-5-22　2024

ウチの姫さまにはがっかりです…。 ②

鈴木 鈴
イラスト／藤真拓哉

ISBN978-4-04-870269-0

落ちこぼれ魔族キキモラが、イリステラ姫に呪いをかけた！ それは「己の欲望」を増大させる呪いで――!? 姫さまのキケンな『趣味』を知るアッシュは？

す-5-23　2085

ウチの姫さまにはがっかりです…。 ③

鈴木 鈴
イラスト／藤真拓哉

ISBN978-4-04-870545-5

魔族キキモラの事件直後、アッシュのもとに現れた一人の少女リュカ。アッシュを我が物のように扱う彼女に、イリステラ姫とティリエルは戸惑いを覚え……!?

す-5-24　2143

ウチの姫さまにはがっかりです…。 ④

鈴木 鈴
イラスト／藤真拓哉

ISBN978-4-04-870816-6

姫さまの王国を傘下に置く『帝国』の皇女ディアマンドラがやってきた。あのイリステラを震え上がらせるほど「くせ者」な彼女を相手に、アッシュは……？

す-5-25　2224

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、成田良悟(『バッカーノ！』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川　浩・徒花スクモ(『図書館戦争』)、川原　礫(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

●賞(共通)

大賞……正賞+副賞100万円
金賞……正賞+副賞 50万円
銀賞……正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ)

メディアワークス文庫賞
正賞+副賞 50万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞 20万円

編集部から選評をお送りします！
小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。
http://asciimw.jp/award/taisyo/

主催：株式会社アスキー・メディアワークス